

NO. 42  
SUMMER  
1973

# 英語展望

## *ELEC BULLETIN*

「現地に見るウォーターゲート」 國弘正雄

国際展望 榎垣実・今日出海・小島義郎

宮本昭三郎・中村敬

「国際感覚と英語教育」 西山 千

「意義素の構造」 服部四郎

“Indigenous Barriers to Communication” 國弘正雄

英文法の体系1 「Modalityについて」 中島文雄

「Mother Gooseの世界(12)」 平野敬一

「日・英慣用表現の比較(5)」 長谷川 潔

「世界における外国語教育(5)」 星山三郎

ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

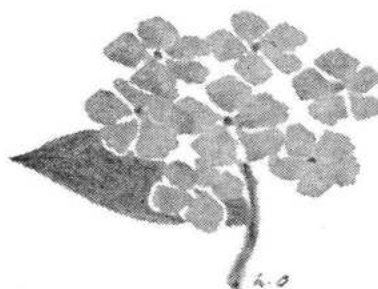
# 英語展望

NO. 42  
SUMMER  
1973

## ELEC BULLETIN

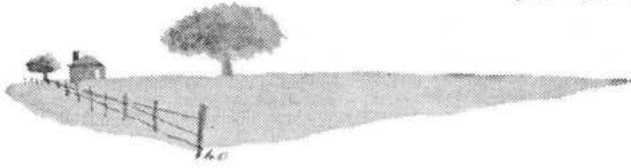
Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



現地に見るウォータージェット	國弘正雄	2
【国際展望】		
理解を阻むもの	榎垣 実	4
U.S.-Japan Cultural Interchange	今日出海	6
日本人の英語力	小島義郎	8
霧の中で	宮本昭三郎	10
外人教師と日本人教師の間	中村 敬	12
国際感覚と英語教育	西山 千	14
意義素の構造	服部四郎	19
Indigenous Barriers to Communication	國弘正雄	25
【英文法の体系 1】		
Modality について	中島文雄	34
Mother Goose の世界 (その12)	平野敬一	40
日・英慣用表現の比較 (5)	長谷川 潔	45
世界における外国語教育 (5)	星山三郎	51
Silence Is Not Always Golden (3)	David Hale	56
【新刊書評】 A Grammar of Contemporary English	山家 保	59
新刊紹介		66
展望通信		68

# 現地に見るウォーターゲート



KUNIHIRO MASAO

國 弘 正 雄

駆け足の旅だった。サンフランシスコに2泊、アリゾナ州のフィーニックス、航空宇宙センターのヒューストン、自動車の都デトロイトにそれぞれ1泊、ワシントンに2泊、帰途ニューヨーク、サンフランシスコ、ホノルルにそれぞれ1泊というあわただしさだった。ウォーターゲートで大揺れのアメリカを発って帰りついた日本は、これまた田中首相の、ブレーキのきかなくなった自動車よろしくの暴走で、大荒れに荒れている。嵐から嵐のとてつもない旅だった。それはまだ収まってはいない。しかも昨日戻ってきたばかりのこととて、纏まったことは書けそうにないが、感じてきたウォーターゲートを以下に書き録す。アメリカの動向が日本に与える影響の大きさもさることながら、太平洋をはさんで荒れに荒れる両国の間には、奇妙な一致点と著しい差異とが読みとれるからである。

さいしょにいえることは、僅か一週間の滞米中に、事件が刻々にエスカレートしていったという点である。たとえば、日本から一直線に飛来した日のサンフランシスコでは、まだニクソンの弾がい(impeachment)の可能性は殆どだれもが否定していた。ぼくの会った人の中には、民主党政権下の政府高官やライシャワー大使なども含まれていたが、彼らといえどもニクソンがかんているのではないかという疑念を抱きながらも、よもや彼が連邦議会で正式に弾がいされるところまではいくまい、という点では一致していた。上院による弾がい成立はいうまでもなく、下院がその発議を単純大多数で決める可能性すら皆無というのが、ほぼ共通の意見であった。

ところが、砂漠の町フィーニックスで会った2人の共和党員は、仲間意識もあってかその可能性をむげには退けなかった。その一人は巨大な石油企業の関係者で選挙資金集めに尽力した実業人、いま一人はニクソン政権の某有力諮問委員会の長で閣僚レベルのポストにある根っからの党員であった。とくに記憶にのこるのは前者の、ニクソンの問題は金が集まりすぎた点にあるという趣旨の発言だったが、なにか共和党の性格を垣間みる思いであった。それはとにかく、わずか3日の間に、新しい事実や証言が次々に出て、マスコミ、とくに新聞や週刊雑

誌がいずれも一面トップで詳細を報じていた。事件は明らかにエスカレートの一途をたどっていたのである。

ヒューストンを経てデトロイトにつく頃には、ことは底なしの感を呈し、もうながら出てきても、あたり前という静かなあきらめのようなものすら出はじめてきた。フォード社のフォード会長は明らかに当惑していた。ニクソン擁立の有力な一員だったからである。他方、ベトナム戦をいち早く批判し、その進歩性の故に、世界に多くの友人をもつボールドウィン元国務次官が、この度の事件をニクソン個人はとにかく、アメリカの大統領職(the Presidency)、ひいてはアメリカの国体への深刻な危機として捉えていたのが注目を惹いた。そして、このことがアメリカの対外政策に与えるであろうマイナスについても、懸念を洩らしていた。対外交渉力の低下はおおいたいものと考えられるからである。現にニクソンがブレジネフ書記長の訪米実現に熱心で、キッシンジャーをソ連に使いさせたのはこのためであると、もっぱらマスコミは今回の事件により、ニクソンが必要以上の大巾な対ソ譲歩を余儀なくされるのではないかと、という心配をあらわにしていた。

ワシントンの沈痛ぶりは当然のことながらあまりにも明らかだった。旧知のハンフリー前副大統領はきわめて感動的な演説を行なった。このリベラル派の驍将は持ち前の人柄のよさもあってか、宿敵ニクソンに対する個人的な感懐はおくびにも出さずに、もっぱらこの「南北戦争を唯一の例外とする建国以来の最大の政治危機」が、大統領職に対するアメリカ国民の信頼を揺がせた点への懸念を表明、あわせてこの事件が、かねて政治や政治家を見下し、自らを政治より上位に位するとしてきた法律家や広告屋、PR 専門家などの手によって、政治の常識をすら上まわる汚なさや悪らつきでなされたことを、怒りをこめて批判していたのが印象的であった。それはアメリカの良心的な政治関係者のだれしもが、ひとしく抱く懸念と憤激であったと思われる。

ついでニューヨークについた日、テレビはニクソン政権の元有力閣僚2人の告発を報じた。くるところまで来たのである。すでにニクソン自身が黒であるという疑い



は濃厚になり、問題はいかにして彼自身の面子を保つか、という矮小化の方向すら示しはじめていた。Face-saving という、元来が中国語の訳で、アジア人のお手のものと考えられてきた表現が、いまや合衆国大統領に関して用いられているのに、ぼくは皮肉な思いを禁じえなかったが、寄るとさわるとニクソン個人の去就に話は移っていた。1週間の間にみられたこの大きな変化が、単に西部から東部へとお膝元に近づいたからのみではなかったことは、こんご議会を中心に行なわれる調査の成りゆきがますますはっきりさせていくものと思われる。

考えてみれば、アメリカの大統領職というのは他に類をみないユニークな機構である。それは日本の天皇と総理大臣とを足して2で割ったようなもので、国家元首であるとともに行政府の長であり、三軍——厳密には四軍だが——の最高司令官の役割をも占めている。しかも大統領職というのは、他の立法府や行政府と比べて、同じく三権分立の一部門とはいいいながら個人的な色彩がすこぶ強い。他の二府がいわば高度に機構化された非個人的な存在であるのに反し、大統領職だけは直接選挙によって選ばれる秀れて個人的な機構である。したがって、機構としての the Presidency と、政治家個人としての大統領とは、はっきりと一線を画すことが制度上もむずかしくなっている。とくに近年のように、アメリカにおいてすら行政府の長の権限がほぼ無制限に肥大し、他の二府に対して圧倒的な優位を占めるようになると、よほど大統領自身が自制しないかぎり、両者の混同はますますひどくなっていく。ニクソンの場合には、この混同がその極に達したといえよう。彼の実務家としての感覚が、スタッフ制をとり、側近政治を実行させるにおいては、その弊害はいよいよ増大せざるを得ない。各省長官ですら、彼のまわりをとりまく親衛隊のアーリックマンやハルドマンのOKなしには面会すらできなかったという実情は、この点を物語っている。要は私的行動原理を公的なものに自動延長したところに、今回のスキャンダルの根はあったといえよう。そしてほぼ同じ図式が、今回の小選挙区制をめぐる田中首相の独走にもあてはまることに、われわれは気づかざるを得ない。自民党——一応公党であるとみなしても——という私的集団の論理なり倫理を、国会もしくは選挙制という秀れて公的な機構に生まの形で持ちこもうとして自滅したわが国の宰相と、それは奇妙に一致する。松葉杖をひいたご両人が、お互いに慰めあっている政治漫画は、かくして深い意味をもって来る。来たるべき首脳会談がどういうものになるか、待たれる所以でもある。

ところでこんご事件はどう展開していくだろうか。よもや弾がいはあるまいと思う。ただ面子をどうやら保った形での退陣は、あるいはという気がしないでもない。よしんばこの種の破天荒なケースがないまでも、大統領としてのニクソンは、自らが占める大統領職というポストにまつわる難問を、どうしても処理していかなければならない。それはニクソン自身の変身を必要とし、ニュー・ニクソンならぬ、ニューニュー・ニクソンへの脱皮をともしなければならぬ。彼はまた従来のような権力亡者的な姿勢を捨て、国民やマスコミに対するシニカルで親権者的な姿勢を変えていかなければならぬ。それははたして可能であろうか。やがてこの事件も、事件としての浮沈を経て、沈静化していくであろう。しかしこの命題をニクソンもアメリカ国民もかかえつづけることであろう。そしてぼくには、ニクソンの変身はまず不可能と思われる。かつてケネディが「この男から中古車を買うつもりになりますか」という反ニクソンの絶妙なスローガンを掲げたことをいまに思いおこすのだが、ぼく個人としては彼から中古の政治家を買おうとは思わない。そしてアメリカ市民も、あと3年有余、法によって保障されたチンパのアヒルの大統領(lame-duck President)を変え手続きもないままに、どうにもならぬ手詰り状態の中で、いらだたしさとやり切れなさとをかこちつづけるのではないか。68年に彼を選び出し、また去年はあれほどの地すべりの大勝を彼に許してしまったアメリカ人の、それは自業自得ともいえるであろう。ハンフリー氏の前述の講演を聞いて、「なぜこの男を大統領に選び出さなかったのか、と半分泣きたい心境だ」と語っていたある有力な言論人の、悔悟に呆けた真顔がぼくの眼前に浮かんでくるのだ。そして彼の悼みの念は、日本の現政権の惨状に照らして、われわれ日本人もまたすぐる日の総裁選に関連して共有する思いとはいえぬだろうか。

要は政治のトップには、実務しか判ろうとせず、理想主義の片鱗だにない男は絶対に不向きだということであろう。しかしそういう男の方が現実には力を持ち、のし上ってこれるという政治のメカニズムには、なんともたまらぬ思いを隠し切れないのである。ウォーターゲートにはたしたマスコミの役割、共和党と民主党の異同、ニクソンがこの度の事件を契機に、国内宥和のために対日強硬策に出てくる可能性など、ほかに書きたいことも数多いが紙面が尽きてしまった。アメリカの国歩艱難を目にし耳にして、やはり思われてならないのは、日本と日本人のことであった。戦中派の、これは悲しき性でもあらうかと審かりつつも。(1973年5月22日記)

(国際商科大学教授)



# 理解を阻むもの

UMEGAKI

MINORU

榎垣

実

わが国の英語教育が、方法的な面に問題があって、そのため、英語教育を受けた人たちが、英語を正しく理解することができず、更に国際社会での活動の上で、たいへんなハンディキャップを負わされているように思われる。この点については、今までいろいろと論じられてきたが、もうひとつ急所をグッと押えていないように思われ、いつまで経ってもたいして改善もされないように思われる。そこで、そういう理解を妨げているものが何であるか、根本的に考えてみて、御批判を得たいと思うのである。

最も根本的な問題といえば、英語を正しく理解するためには、どうするのがいいかということではなかろうか。従来わが国の英語教育では、英語を理解するために、たいていいわゆる「訳読」と呼ばれる方法を採用してきた。そして現在でも、たいていの学校で、依然としてこの方法が行なわれている。おそらく、古くからこの方法を習慣的に行なってきた、いわば惰性的にそれを続けているというのが本場で、必ずしもこれが英語を理解する最良の方法だと信じているわけではあるまい。けれども、じつはこの外国語学習法というのは、よく考えてみるともう千年もの古い歴史を持っているのである。だから牢固として抜き難い慣習となっているのである。

奈良時代にいわゆる漢字と呼んだシナ語の学習法は、じつに変則的な外国語学習法であった。第一に外国語を音読するということがなく、まして口頭で話すということなど考えもしなかった。そして、じつに奇妙な方法、いわば translation reading とでも呼ぶべき方法で、外国語と日本語で読んだのである。時には「不可能」とか「傍若無人」「一所懸命」など、漢音で棒読みにすることがなかったわけではないが、それはまことに九牛の一毛に過ぎず、漢文に「返り点」という符号をつけて、文法まで日本語風に直して読んだのである。つまり外国語そのままを使ったのは文字の形だけという徹底した変則的方法で学習したのである。こういう学習法が千年以上も続いて行なわれてきたのだから、明治前後になって英語を学習し始めたときも、この方式が当然のこととして

採用されたのであり、どうしてそんな方法を採用するのかなどと疑う人は誰ひとりいなかったのである。そしてそれ以来百年を経た今日でも、この方式が変則だなどと考える人はほとんどない有様である。これが、訳読方式が現在でも盛んに行なわれている第一の理由だと思われる。

第二の理由は、漢字の場合でもそうだったが、日常生活でその外国語を使う必要がほとんどなかったことである。だからこそ、外国語の書物から知識を得ることだけを考えて、聞いたり話したりということは全然考えなくても少しも差支えがなかったのである。

それから教師が外人でなく日本人であったことも、訳読を盛んならしめた理由のひとつだったと思われる。明治初年に、英語を外人から習った人たちの中に、岡倉天心・内村鑑三・新渡部稲造・植村正久・徳富蘇峰・芦花兄弟のような、会話も作文も自由自在という英語の達人が輩出したことも、日本人に習うようになってからは、そういう達人が極めて少なくなったことも、それを証して余りがある。日本人が教えるとなると、どうしても安易な訳読方式に片寄るのである。

訳読方式を盛んにしたもうひとつの理由は、教師の大部分が訳読方式で英語を学習した人たちだったことであろう。そういう人たちは、訳読方式以外の方法を考えることはできなかったし、仮りに訳読方式に疑問を抱いたとしても、どう改良すればよいのか見当がつかなかっただろう。それほど訳読方式は誰にでも行ない易く、また骨が折れないのである。たとえば direct method とか、oral method とか、それを改良した「新教授法」といった方式を採用した人たちは、九分九厘まで自分がそういう方式の教育を受けた人たちであった。そうでなくては、入門期にはうまくできても、程度が進めばその試みが挫折するのが常であった。それほど、むつかしくもあり、骨も折れたので単なる思い付きや気まぐれではとても続くものではなかった。

第四の理由は、訳読方式が入学試験に対して極めて有利だと信じられたことである。筆答試験が主であれば、

聞き話す能力の試験はできないのが当然で、そういう訓練をやっているのは全く無駄だと感じられた。それで新教授法は、父兄からも生徒からも不安がられた。そのため、かなり成功しながら、途中から訳読方式に切替えずにいらなかった case もきわめて多かったのである。

こんなに伝統的に行なわれてきて、ほとんどその効果を反省しようもしない人の多い、訳読方式が、英語を理解する手段としてどんなに役立っているかを、率直に検討してみよう。この方式は要するに、英語の文を読んで、それを日本語の文に置きかえることである。もちろんこの方法でも注意深く行なえば、立派に理解できる筈であるが、たいていの場合は、当面の訳を与えるという点だけが重視され、本当の目的である理解が忘れられてしまう。そうになると、ほとんど機械的に、英和辞典から訳語を探し出して、それに置きかえ、それを覚えさえすれば、もう理解したような錯覚を起こすのである。

具体的に云えばこういうことである。たとえば英語“communication”を、日本語「伝達」に置きかえ、それを覚えれば、“communication”は理解できたものとするのである。ところが、“conveyance”という英語が出てくると、やはり英和辞書を探して、また日本語「伝達」に置きかえ、それで理解したと考える。また次に“transmission”が出てくると、それも「伝達」に置きかえ、ついには“delivery”をも「伝達」に置きかえて、それで理解したと考える。実際英和辞典を引いてみると、どれにも「伝達」という訳が示してあって、決して誤りだとはいえないのだから、誰も怪しまないけれど、“communication” “conveyance” “transmission” “delivery”を、まったく同じ意味の同義語のように覚えて、それで全部理解できたと考えるようなことは、話にも何にもならない誤解だと、どうしてわからないのだろう。まことに「病い膏盲に入っている」としか考えられない。そういう愚かな方法を続けている限り、英語は決して理解できないのである。ではどういう方法によればよいか、その点は最後に述べるとして、もう少し訳読方式の害を検討しよう。

訳語に置きかえることは、英語の単語には必ずそれに対応する日本語の訳があるものだという暗黙の了解を基礎としているが、英語と日本語との単語で、意味が完全に等しいというような語は、ほとんど見当らない。そこで“go up”は「のぼる」、「go down」は「くだる」というような対応は、すべて「熟語」として別扱いにしてしまう。そうすれば“go”はいつも「行く」と訳できることになる。まことに都合のよい処理法だが、この処理のため英語の単語の理解が阻まれることおびたしいも

のがある。英語の意義に日本語の意義を重ね、はみ出したところを切り捨てて、それで理解したつもりになるという、まことに無謀な方法である。そんなことをすれば英語はゆがめられて、みな日本語と同じになってしまう。あきれ果てた方法なのである。

He refused to hire a lawyer with experience in such cases. という文を、「彼は、そんな事件での経験を持った弁護士を雇うことを拒絶した」と訳して、理解できたと考えるのが普通だが、英文では、この文によって伝えられる image は、まず He であり、次が refused であり、その目的語が to hire であり、誰をかといえば a lawyer であり、その人は experience を持っていて、その experience は such cases で得たものであると、中心から枝葉へ遠心的に論理的に展開してゆく。この展開の方法を知り、文構成の組み立て方を知ることが、英語を理解する根本であるのに、それと全然逆の、枝葉から中心へ求心的に気分的に展開する日本語の組み立て方に変えて訳したら、英語の正しい理解は根本的にぶちこわされてしまう。まったく怖るべきことである。英語を理解することとは全然逆の行き方ではないか。

こんな構成法を無視した訳読方式を続けていると、訳をつけなくては意味がわからないという悪習慣がついて、英文を読む力は容易に身につかず、まして書いたり話したりすることも不可能になってしまう。理解を妨げることに専念努力しているようなものである。

われらの知識というものは、大部分記憶として頭の中にストックされている。そして、必要に応じてその stock された記憶が照明を受けて思い浮ぶもののようなものである。ところが switch だとか cord だとかいう語は、たいてい英語の形で記憶していて、思い出したとき英語の形で頭に浮かぶから、英文を書く時でも話すときでも、そのまま使える。ところが「電灯」「電球」などは、たいてい日本語で記憶しているから、英語で話したり英文を書いたりするときは、もう一度頭の中で英語に訳してからでないと思えない。「ええと「電灯」は electric light だな、「電球」は electric lamp だな、冠詞はつけるのかどうか」などと考えないと使えない。まったく急の間に合わないから、それで日本人は会話が下手ということになるのである。

紙数が尽きたので簡単にいえば、英語は英文を読み、そのまま理解し、そのまま記憶するのが最もいいので、訳すことそのことが、理解を最も阻むものなのである。訳読方式を続けている限りわが国の英語教育はいささかも前進しないのである。

(関西外国語大学教授)

## U. S.-JAPAN CULTURAL INTERCHANGE

KON

HIDEMI

今

日 出 海



*The following is the text of a speech by Mr. Hidemi Kon, President of the Japan Foundation, delivered at a meeting of the America-Japan Society of Tokyo on February 23, 1973. The text is printed by the Society's permission.*

As you all know, Japan is a small country consisting of four major islands which is surrounded by the three greatest world powers—the U. S., the U. S. S. R., and China—all of which are armed with nuclear weapons. A French philosopher-critic once asked me, a look of half-astonishment and half-incredulity on his face, "How is it that you Japanese can be so unperturbed with nuclear-armed powers all around you?" Well, I guess we are a rather easygoing people at that. Although we do have our highstrung side, we lead our lives more nonchalantly than one might expect us to. This easygoing nature is perhaps partly explained by the fact that during the 260-year-long Tokugawa period of isolation from the outside world we led insular lives without any contact with foreigners or their culture. The habit of seldom looking outward grew on us and perhaps has remained to this day, at least as a vague tendency. Although Japan today is considered a very advanced country both culturally and economically, with more than a century as a civilized modern nation behind her, we Japanese are still unable to understand other countries and their people adequately. We do know a lot about other countries and peoples, but I have my doubts when it comes

to the question of just how specific our awareness is with respect to that knowledge, for, it seems to me, we all too often are misunderstood by foreigners and invite unfounded suspicions. We have been accustomed to depending on our own judgment, not knowing enough about foreigners or even having the opportunity to learn more about them. Some Japanese are very vociferous in their advice to their fellow countrymen to think internationally, but even they have pitifully little knowledge, understanding, or awareness about international matters. Television and the other mass media inform us about most world events of greater or less importance as soon as they happen, but we have hardly an inkling about how the people involved actually feel about and react to what is happening to them. This is a more fundamental problem than that of indifference or selfish egoism. All that is required of one is to open one's eyes and see things as they are. In 1863 Commodore Perry's "black ships" arrived at Uraga to pressure the Japanese into opening their ports to foreign vessels. This was the impetus that finally convinced the Japanese to scrap their policy of isolation and open their doors to the outside world. For the next five years they were in a state of bewilderment, amazed at the U. S., British, and Russian warships that visited their shores and overawed at their cannon firepower. In the first ten years of confusion they finally cut off their topknots and laid



down their swords to assume the appearance of an average Westerner. During this same ten-year period the new systems and institutions of the Meiji reform movement emerged, and there was born a new, modern nation in Asia. In this connection, I feel I should mention the high regard and sincere gratitude that I and many other Japanese even today feel toward Consul General Harris for the patience and extraordinary effort that he brought to bear on the Japanese scene in those days. With this awakening to the vision of a modern nation, the Japanese of the Meiji era adopted an attitude of eager acceptance of things foreign and built Japan in accordance with their image of the west.

And so a century of diplomatic, commercial, cultural, and other relations between Japan and the United States has already passed—a century in which many things happened. Three-quarters way through that hundred-year period there was a tragic war between us which ended in stunning defeat for Japan, and in the postwar period a new democracy took root in this Asian country. Since that war a quarter century has lapsed, during which time understanding between our two countries has grown in spite of, or perhaps because of, the many troubles that tried our relationship. We now see before us a perspective that no one in the Tokugawa period or even in the early Meiji period could have imagined. Although we have in the past succumbed to overconfidence and resorted to war—in 1941 for instance—we now still regret such folly and are resolved to pursue a policy of peace, just as we regretted it in 1945 and resolved to build a new, peaceful Japan from the devastation of war.

We were able to recover economically to the prewar level and then proceed on to an even greater prosperity. We have been careful not to become overconfident again, forgetting the past. We have recognized the necessity to be prudent and closely observe the international scene in a serious frame of mind. By

so doing, we have been able to plant a firm image of the new, peaceful Japan that we are working for. We have been able to enhance our awareness and join hands with the United States in common pursuits. We have had, and still have, the conviction that the unwavering friendship between us that grew out of mutual assistance in times of need and mutual congratulation in times of joy should be carried on into the future, for the misfortune of the one would ineluctably spell, misfortune for the other. We have come to realize that mutual understanding between our two countries requires constant attention from day to day with a mind to ascertaining whether that understanding is founded on correct awareness and whether our actions in accordance with that understanding are right. As president of the Japan Foundation, I believe that Japan must continue to maintain her attitude of a cultural nation, that understanding and knowledge of all countries must be untiringly pursued by her people. I feel that we must devote constant attention to our friendship with the United States, in particular, for in the past we have caused her a great deal of trouble and have benefited from her kindness. Although the Japan Foundation still stands on rather wobbly legs, this year, next year, and the year after its funds should gradually swell. In any case, it is my firm intention, as well as the present-day goal of the Foundation and a foremost consideration in its day-to-day affairs, to spare no efforts for the enhancement of cultural understanding between our two countries. I hope all those concerned will not hesitate to point out our deficiencies with due frankness in order that we might be encouraged to do better. What we are concerned with is neither national interests nor emotional ties. It is the business of setting Japan on an unswerving future course of healthy cooperation between our two countries and of making course adjustments as the need arises.

## 日本人の英語力

KOJIMA YOSHIRO  
小島 義郎

日本人は外国語がへたであり、英語ができないというのは今日ではなにか自他ともに認める定説のように言われている。しかし、ほんとうにそんなに絶望的であるのか。オーラルメソッド、オーラルアプローチなど新教授法を積極的にとり入れて、英語教育に関する本がこんなに氾濫している国は世界にないと言われるほど悪戦苦闘している日本の英語教育はそんなに無力なものであるのか。こんなくやしきような疑問を以前からもやもやと心に持っていたのであるが、昨年度約半年間ヨーロッパとアメリカを回ってみた印象から、私自身には日本人の英語も他国の外国語水準とくらべるとそれほど捨てたものではないのではないかというような気持ちもしてきたので、いささか乱暴な印象論に過ぎないがそのことについて書いてみたい。

よく言われることだが、日本人は中学から大学まで8年間も英語をやって、ろくろく会話もできず、手紙1本満足に書けないという非難がある。これについては、大学受験がガンであるとか、教材がむずかしすぎるとか、教え方が悪いとか、印欧語族に属さない日本語を話す我々の宿命であるとか、いろいろなことが言われている。たしかにそれはそのとおりで、宿命論は別として現状は大いに改善されなければならない。しかしまた一方、この「ろくろくできない」とか「満足に書けない」とかいう批判は多くの場合アメリカ人・イギリス人などの英語国民や、インド・フィリピンなどの準英語地帯の人々、それに国際的に活躍している英語の達者な外国人などと接触して感じる英語力についての劣等感からきていると思う。そして、このような劣等感や批判が自信喪失に拍車をかけ悪循環を起している面もないとは言えないようである。

しかし、このように母国語もしくは準母国語として英語を使っている人々とくらべられたら、8年間やったとはいえ、毎週数時間しかない英語の時間で、外国に行ったこともない人々が「自分はろくろくできない」と感じるのも無理はないかもしれない。言語現象というのは一般に考えられているよりもずっと複雑なものであると思

うし、それに文化的にも、語族の系統の上でも異なる外国語で会話をするとすると、教室だけの訓練では瞬間的にその場に適切な応答を引き出すことはなかなか容易なことではない。耳にはいつてくる英語の「認識」の方の訓練は教室でもかなり伸ばせるかもしれないが、「発表」となると俗に言う「場数をふむ」が必要になってくる。よく日本語のうまい外人のことが話題になるけれども、彼らの多くは日本に住んだことがあるか、少なくともかなり集中的な訓練を経た者である。

ところで、私もそうであるが、英語の先生方は留学とか研修というたいていアメリカかイギリスに行く。これは当然で、それ以外の所に行ってもしょうがないのであるが、そうすると自分のまわりの人はみな英語の native speakers であるから自分よりうまいに決まっている。そこで気の弱い人はひどく劣等感を感じてしまう。かつてある高名な先生から承った話であるが、ロンドンに行ってもどうしても自分は英語の教師であると言えなかったのも、教育学を専攻していると言ってごまかしていたそうである。これは日本人の英語教師ならだれでもよく理解できる気持ちである。

そこで私はこのような劣等感を吹きとばしたいと思う方には、英・米に行ったついでに非英語国を旅行されることをすすめたい。それもあまり英語のうまい一般市民とつき合うことである。私はオックスフォード大学での予定していた2か月間の研修を終えたのち、単身アイルランド共和国をはじめフランス・スイス・イタリア・オーストリア・西ドイツ・デンマーク・オランダと回ってみた。私の回り方はまったく貧乏旅行で、交通機関はすべて鈍行の2等列車、荷物もショルダーバッグ1個だけという着たきりすずめ、泊まる場所はすべて pension とか木賃宿で、予定も日程も組んでないから宿屋も気の向いた町で降りてさがすというやり方であった。いい年をしてこんなフーテンのような旅行をしたのは、一つには金がないということもあったが、また一つにはヨーロッパの素顔を見たいという気持ちからでもあった。こんな旅行であったから、夜中に列車がついて、

両替所もしまっており、宿屋もなく途方にくれたこともあり、よく無事で帰ってこれたと思うぐらいである。

ところで、このような旅行をする際にまず第一に問題になるのはことばの問題である。ヨーロッパ大陸の諸国ではあまり英語が通じないというのは周知の事実であるけれども観光客の多く集まるところやデラックスなホテルなどではたいてい英語でだいじょうぶのようである。しかし一步そういうところからはずれると、英語の通じないことはまったく予想以上であった。とくに、よく言われるようにラテン系の国はひどくて、フランス人などは英語を知っていても話したがらないときいてはいたがまさかこれほどとは思わなかった。英語を話すのは水商売の人間だといってばかにする風潮さえあるようである。それに比較的英語の通じると言われるスイスやゲルマン系の諸国でも、私のような旅行をする場合はオランダを除いてはまずあきらめてかかった方がよい。私もとうとう数十日の間私の乏しいドイツ語・フランス語と、出発前にどろなわで勉強していったイタリア語少々、それに各国語のフレーズブックをたよりにがんばり通した。そしてことばが不自由ということはこんなに困ることなのかということ、また単語1つでも知っているといないとでは生活がこうも違ってくるものなのかということを生まれてはじめて経験した。私は以前アメリカの大学に留学していたが、そのときもすでにかなり英語力はあったと思うし、こんどの場合にもロンドンに行き、意思の疎通には困らなかった。ところがこんどは違うのである。電車に乗っても *aussteigen* (=get off) というドイツ語の単語を知らないと車掌に「ここで降りなさい」と言われてもなにを言われているのか分らないし、*l'uscita* (=exit) というイタリア語を知らないとどこが出口だか分らず、重い荷物をかかえて長いホームを行ったり来たりしなければならず、また人に尋ねることもできない。というのはほとんど英語の表示は皆無といってよいからである。私がパリの安宿で知り合ったアメリカ帰りの若い日本の人は、宿を *check out* しようにもフランス語でなんと言ってよいか分らず、また駅に行っても切符もかえず途方にくれるという状態で、私の作文した変なフランス語でやっと用が足りるという笑えない悲劇もあった。駅に英語の分る人がいないなどということは日本ではちょっと信じられないけれどもヨーロッパでは往々にしてそうなのである。だからパリの北駅では、持っているお金がスイス行きの列車の中で使えるのかどうか尋ねようとしても、だれも取り合ってくれず泣き出しそうになって “Is there anyone who speaks English?” と叫んでいたアメリカの中年婦人を助けて地獄に仏のよ

うな感謝をされたり、ローマのテルミニ駅でも切符の買えないイギリス人を助けたり、いささか得意であった。

こんな風だから、最近ヨーロッパに洪水のように押しかけている日本人の観光客はいったいどこに行ったのだろうかと思うほど行きあうことはなかった。ただ、ときどき私と同じような安上り旅行をしている日本の若い人たちを見かけることはあった。ところが、この人たちが案外ことばの問題をうまくこなしているのにはびっくりした。彼らのほとんどは英語しか知らないし、それもおぼつかない英語なのだが、それで当ってみて英語のなにか分る人の見つかるまで根気よく探すのである。そういえば、私もよく英語が分るかどうかきいて回ったものだが、“Do you speak English?” という問いに対して、“No, I am not speak.” などという答えをするのはまだいい方で、たいていは首を振って逃げてしまう。ときどき、学校で英語を習ったかどうかきいてみると、習ったことは習ったが忘れてしまったとか、読めばだいたい分るが会話はだめだとか、ちょうど日本人の学生が言うのと同じようなことをいう人が多かった。こんな程度なら私の教えている学生の方がよっぽどましだ思うのがかなりいて、だんだん愉快になってきたものである。もっともスイスやドイツでもうまい人は本当にうまい。これは同じ印欧語族なのだから、少し真剣にやれば当然のことであろう。それができないというのは初歩のところか固まるほどにもやらなかったということであろう。

また私は旅行中によくアメリカ人と友人になったが、彼らの外国語能力の低いことはびっくりするほどである。1人旅などで何週間も無言の行を続けている人が多くて、英語で話しかけるとたいへん感激してたてつづけにしゃべる人が多い。そして英語は国際語なのにヨーロッパはけしからんというようなことも言う。はじめはこちらも英語に対する劣等感の裏返しで「ザマーミヤガレ」などと思っているのだが、私の方も日本語はとにかくとして、なんとかして英語がしゃべりたいという飢えた気持ちなので、何日分もためていたことをいろいろ話す。そうすると不思議なことに英語では思っていることがスラスラと言えて、我ながら感心するほどうまい英語なのである。自分は *native speaker* に近いのではないかと思うほどであった。ところがこの感じがロンドンに帰りついてホッとするとともにまたもとの劣等感に舞い戻ってしまったのだから実におもしろい経験であった。

帰国してしばらく経った今では、もうそんな記憶も少しうすれてきたが、日本人は自分の英語力について必要以上に自嘲的になりすぎているようにも感じられるのがどうであろうか。

(早稲田大学教授)



# 霧の中

— ある旅人の回想 —

MIYAMOTO SHOZABURO

宮本 昭三郎

1956年の秋、ある夜、私はひとりでテムズとおぼしき方角に向って歩いていた。かなり深い霧に、ところどころの街燈の灯が黄色くにじみ、道かどにある屋台店から話し声がもれているほかは、しっとりとした静寂があたりを包んでいた。人影もない歩道の上に冷たくひびく私の靴音。私はそれまで経験したことのない感触が足から伝わってくるのを感じながら、レインコートのえりを立てて、一步一步足もとを確かめながら歩いていた。

この重々しい感触は、桑港はもちろん、ニューヨークでも経験しなかったものだった。それはあまりにも重い歴史の蓄積とでも言えた。アメリカは、自分の歴史をつくろうと、意識して努力しているようだったが、ここでは、すべてが歴史のひだのあいだに生きているように見えた。かつてロンディニュームとよばれたこの町では、峭壁のかたわらで暖をとるローマ兵の姿を想像することは、ちっとも不自然ではなかった。私は、このような歴史の連続性を、日本で実感として身を感じたことはなかったように思う。もちろん、旅をすれば、天皇の陵であるとか、法隆寺などを見ることは出来たが、それらのものと私自身をつなぐ糸は、さがしてみなければ見つからなかった。また探しあてても、その糸はどこかで二本断りになってしまっていた。だが、この国では、過去と現在とは一本の太い糸で結ばれているようであった。

気のせいか靴のひびきがちがったと思ったとき、頭上に重々しくおおいかぶさるものがあるのに気がついて、私は歩みをとめた。城門のようにそそり立つゴシック風の塔。遠くで一声流れた汽笛。私はタワー・ブリッジの上に立っていた。ここからは、広いテムズの流れを前にして、有名なロンドン塔が真近に望めるはずだったし、昼間は、兩岸に林立するクレーンが、いらだたしいような速度でゆっくりとその手を動かしているのも見えるはずであった。だが霧の夜では、時おり橋脚にはねる水の音が聞えるだけだった。それでも霧は低いのか、見あげる塔の上部はいつしか青白く輝やっていた。中空に月が出ているらしかった。

私は、青白く浮びあがる塔のおもてを見つめながら、

ある感動が身にせまるのを感じていた。それは、幼少のころから絵葉書などで見おぼえていた英京「倫敦」にたどりついた感激というよりも、そこまでの道のりの長さが思ひだされたからであった。羽田をでてから5年あまり、日本はすでに遠い過去のどこかに去っていた。かつては私にとって唯一の現実の世界だった国は、私の脳裡のどこかで、遠い星雲のようにぼんやりと光芒をはなっているだけだった。

日本から最初の留学生がこの地に來たのは、たしか19世紀のなかばであった。してみれば、彼らが眼のあたりにしたのは、ヴィクトリア最盛期の英大帝国の繁栄であり、自信にみちた英国人の姿であったにちがいない。それから百年たらずのあいだに、多くの日本人がこの地に留学した。彼らは何を見だし何を考えたのか。日本が富国強兵のエレベーターで上昇するにつれ、日本人が英国を見る視点も変わっていったにちがいない。ふと私は日本人が英国を、またヨーロッパを理解する度合いは、むかしから本質的にはあまり変わっていないのではなからうかという疑念を感じた。私は日本にいたとき、英国に関する本を二、三読んでいたが、いま霧の橋の上で思い出すことができたのは「倫敦塔」だけであった。しかもそれを読んだのは、まだ中学生のころだったから、内容はすっかり忘れてしまっていた。ただ漱石の重い足どりが、霧の中から聞えてくるようであった。私はもうすこし足をのばしてみたい気になってまた歩きだした。

英国は、私がえらんだような足どりで西欧を知ろうとする者にとっては、都合のよい位置にあった。西欧における政治、経済、軍事上の主導権は、すでに西ヨーロッパからアメリカに移っていたとは言え、文化や思想の源流は、何と云ってもヨーロッパにあった。してみると、新旧両世界の中間に位置する英国で、ヨーロッパ諸国のことを知ることは、比較的やさしいことであるし、アメリカの姿を一望することもさほど難しいことではないように思われた。だが、ヨーロッパは私にとって途方もない思想の山脈であった。キリスト教、合理主義、個人主

義など、その山脈の尾根にあらわれた岩層には気づいたとしても、それらが私の目に見えないところで、どう織りなされているか見当もつかなかったと言ったほうが正直であろう。もちろんヨーロッパ精神といったものが、そうたやすく理解できるとは考えていなかったが、いざその高峯の前にしてみると、私は嘆息するほかはなかった。私はべつに東と西とどちらがよいかを基準に、ヨーロッパを見つめようとしたわけではなく、そこにあるもの——それは年月がたつとともにその大きさを増していったが——を知りたかったにすぎない。

ロンドンに来た目的は、観光ではむしろなかったが、毎朝ヴィクトリア駅前でのバスが、ウェストミンスター寺院、英国議会、トラファルガー・スクエアなどを通るとすれば、いずれにしてもことさら見物の計画をたてる必要もなかった。バスの二階の窓から、また足のおもむくさきから、ロンドンはしだいに私の心の中に入りこんでいったようである。と同時に、私は英国史上の過去が近づいてくるのを感じていた。この国の人たちは、日本人よりもはるかに長い時間の尺度でものを考えるようだったが、そのうらには、なんといっても英国人の意識の底に横たわっているこの国の社会の連続性があった。その連続性は単に過去の栄光への郷愁のためではない。かつて異民族が血腥い抗争をくりかえしたこの異質社会の人々は、必然的に自らの過去をつよく意識するようになったのだろう。明治維新が、日本にとってひとつの断層であったと簡単に言いきることは、むしろ出来ないとしても、昭和の年代に生まれた日本人の多くにとって、幕末の空気は、知的な努力によってのみ再現が可能ではあるまいか。だがロンドンの町並は、まだヴィクトリア朝の残照に包まれているといっても過言ではなかった。

ロンドンに来たころ、私の英語はどうにか不自由ない程度になっていたが、『タイムズ』の社説などを読むと一歎するのが常であった。簡潔、しかも核心をついたその文章は、米語とくらべると、もっと陰影にとんでいるように私の眼には映った。だが、外国語の習得は努力すればかなりな水準にまでは到達できる。そのころから私は、日本語のものを讀んだり書いたりするたびに、いらだたしい抵抗とでもいったものを感じるのに気づいた。それは漢字を忘れたとか、適当な表現が思い出せないとかいうものでなく、問題はコトバの裏にある思考形式のちがいであった。

ある国に生まれ、その国のコトバで生きて行くことは、その国の人間が共有する思考の形式でものを考えることであろう。たとえその国に生まれなくとも、そこに10年も住み、そのコトバもまず身につけると、自分の思

考形式が生来のものとはかなり違ってくるのも当然ではないだろうか。どちらかにきめてしまえば楽である。友人のすすめるように氣持を割り切って、国籍も変えてしまえば楽だが、私の心の中にはそれを許さないものがあった。それは愛国心というよりもむしろ自分を失うまいとするささやかな努力とでも言えたであろう。しかし、絶えず両方を意識しながら生きて行くことは苦しい。コトバとは結局生そのものなのではあるまいか。どこかでなんとか整理したいと思っても、私はややもすると霧の中にさまよう自分を見いだして焦燥の念にかられた。

ロンドンに来て間もなく私は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに籍をおいた。ストランドのはずれの横道にあるこの学校は、新聞街にも近く、いわゆる学園という言葉から想像される外観からかけはなれた雑然とした感じを与えたが、シドニー・ウェッブらが創立した学校として、その気取りのないさまはむしろ当然のことと受け取ってよかった。私はここで初めてほんとうの勉強の楽しみを知ったと思う。読書に疲れた夜などは、ちょうどそのころ生れた「ニュー・レフト」の会合でのアイザック・ドイッチャーらの講演を聞きに行った。例のマッカーシー旋風のなごりが漂っていたアメリカから来るとこの国の空気はさすがに自由だった。

英国の学風がいわば地味で、きわめて実証的であることはよく知られているが、それはアメリカやドイツなどと比較してみるとよくわかる。あまりにも堅実なその歩み方は、時として、斬新さを欠くようにも見えるが、考えてみれば、理論に現実をあてはめようとするよりは、学究として当然のことであろう。ただ学者の層が厚くなっているアメリカではその中から生まれる種々のアイデアを生かして大きなものに育てて行く社会が、英国よりも多いと言えよう。だが私を考えこませたのは個々の学問以前のコトバの問題であった。とくに、西欧の論理を基礎にして発展した社会科学の道具を日本人が使う場合にまず考えなければならないことは、個々の専門以前に横たわる思考の方式、コトバの論理が違うことである。西欧の学者はこの点めぐるまわっている。彼らは生まれながらに習得したコトバ、論理でものを考える。アダム・スミスは遠い国の人間ではない。ここにもいわば唐唐学生いらいそとを向いて歩かざるを得なかった日本の知識人の宿命といったものを感じて、私の心は重かった。

ロンドン塔は、立ちこめる霧の中で、身をひそめてうずくまっているようだった。それは塔というよりは、城と呼んだほうがよかったが、私の立っているところからは、空堀をへだてて高く立つ防壁がぼんやりと見えるだけであとは濛氣につつまれていた。（独協大学助教授）

## 外人教師と日本人教師の間

NAKAMURA

KEI

中村

敬

このところ在外国人教師と英語教育論を戦わす機会が続けざまにあって、今まで漠然と考えていたことが一層はっきりして来たように思うので、この機会に外人教師と日本人教師の問題にからめて、日頃考えていることの一端を述べてみたい。外人教師を雇っている学校の数がそうでない学校よりも圧倒的に少ない現状では、外人教師の問題を通して日本の英語教育の問題を考えるというテーマはそれほど魅力もなければ、場合によっては読者に一顧だにされないかも知れないと思う。しかし、そうした事実こそまさに日本の英語教育の現状を如実に示してはいないだろうか。毎年数多くの学会で発表される研究発表を始め、英語関係の雑誌に毎月発表される無数の論文・英語教育論などが、時として極めて *argumentative* なものでありながら、巨視的にあるいは国際的レベルで見れば、はなはだ仲間うちの、それこそ今様民主主義の合言葉にふさわしい「はなしあい」の壁を出ないのは、日本文化の同質性という抜き差しならないまさに日本の条件によって生まれて来ているものであろうが、こうした特徴は当然のことながらこの国の英語教育界においても支配的なものである。

しかし、仮りにも語学教育のささやかな目標のひとつが「国際的視野」を培うことであるとするならば、英語教育界の体質そのものの変革、つまり国際化がなされなければならぬ。英語教育界の国際化などといういかにも現実離れのした言葉に聞こえるかも知れないが、そのような向きには是非次の事実注目していただきたいのである。大学の英語教師で組織される大学英語教育学会 (JACET) というのがある。毎年夏には著名な外国の学者を招いてセミナーを開くのが恒例となっていて、昨夏は講師のひとりとして、シカゴ大学の McNeill 氏を招いた。帰国にあたって「JACET 通信 No. 13」によせられた一文 “Energy and esprit du corps” は短いものながら外人教師と日本人教師の英語教育観の基本的な差異を浮き彫りにしてはなはだ興味がある。問題の部分だけを引用する。

...since mass instruction necessarily implies only

limited success for most students... the emphasis in the case of universal instruction should be placed on the ability to converse, both speaking and listening.

つまり、全員に英語を教える場合には、どうせ学習者全てに英語のトータルな力を付けてやることができないのだから、目標を「聴く力および話す力」に置きなさい、と主張しているわけである。この一点は大多数の日本人教師の考え方と真向からぶつかるいわば *crucial point* である。筆者はたまたま、「JACET 通信」の英文欄を担当しているので、上記のポイントをその欄で紹介した後次のように付け加えた。

...He seems to have raised a crucial point where Japanese and native instructors most often disagree. Presumably, many, not to say *most*, of the college teachers in Japan will disagree with him: their conclusion will be quite the opposite like “...since mass instruction necessarily implies only limited success for most students, emphasis should be placed on the ability to *read*.” We welcome opinions on the problem from all quarters.

いうまでもなく、この種の議論の根底には何はともあれ外国語習得を伝達の道具を習得するものとしてみる言語観と、異質の文化を吸収する手段の習得とみる言語観の差異が存在するわけだが、ここではそうした基本的な差異がどこから来るのかといういわば根源的な問題を踏まえた上で、こうした最も基本的な考え方の差をぶつけ合うことのあまりにも少ない我が国の英語教育の体質をこそ問題にしたいのである。筆者もおよばずながら大学英語教育学会の会員のひとりであるから、いささかのためらいをもって書くのであるが、McNeill 氏の所論に関する筆者の提言に対しては、外国人教師からの意見は兎も角も、日本人教師の投稿原稿は半年以上たった現在ひとつも寄せられてはいない。

筆者が本稿の最初で英語教育界の体質の国際化といっ



たのは、つまりはこうした場合に素早く反応し外国人教師と知的討論を展開し、相手を説得しようとする姿勢をいうのである。日本の社会のように知的討論が極度に未発達なところでは、こうした提言は一見不毛であろうとも何回でもなされるべきであると信ずる。実際、英国の各種新聞の声欄に見られる読者同志の何カ月も続く議論に接すると彼我の文化的差をいやでも認識せずにはいられないが、日本の社会がそうした討論によってことを決するという文化的特質を備えていれば、今回の McNeill 氏の所論に対しても当然火花を散らす議論が澎湃として起こったに違いない。そうすることが、ひとりよがりになりがちな日本の英語教育に幅と奥行きのある perspective を与えることになろうと思われるし、何よりも日本の英語教育の stumbling block とそれが持つ特種性を外人教師にも理解してもらう最も有効な手段となると考える。

筆者の印象では、日本の英語教育の持っている特種な構造について認識している外国人教師ははなはだ少数だとみる。失礼を願ひ見ず極く大雑把に分類させていただくと、(1)来日して日が未だ浅く日本の事情が判らないため、認識できないでいる者、(2)長年日本に在る間に自然に(多くの場合、あくまでも自然であって日本人との知的討論を通してではない)認識できた者、(3)長年いても来日以前からの認識と理解を断固として変えずに通している者、(4)特種事情にはお構いなく、もっぱら経済的目的だけで英語という彼らにとって偶然母国語として身についた言語を教えている者、に分類できそうである。これら4者の中で英語教育論をやっけかならず相当の議論を引き起し、時にはけんか別れにもなり兼ねないグループは、(1)と(3)のグループである。(1)はやがて(2)か(3)に、場合によっては(4)に成長(?)を遂げる。

かなり多くの外国人教師と接した経験からいうと、前述の McNeill 氏のような意見を持っている人たちは大旨(1)ないし(3)のカテゴリーにはいる。こうした人たちの中には英語教育の理論家や、たとえ素人であっても、語学教育にはっきりした主張を持っている人たちがいて、時には日本の英語教育を指導し助言を与えようとする立場から発言するのであるから、影響力もかなり大きいと見なければならぬ。

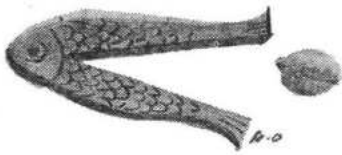
筆者の見るところ、こうした(1)、(3)のグループの人たちの発言は、歴史的に見れば決して戦後に始まったものではなく、戦前のパーマー氏の時代から続いているものと思われる。しかもこうした指導ないし助言は今日まで極めて一方的になされて来たのではない。つまり、外国人側の立場だけが明確に伝達されそれに対する日本側

の有効かつ explicit な反論はついに今日まで公的にはなされなかったのではない。だとすればこれは双方にとっては全く不幸なことといわねばならぬ。なぜなら明確な言語化を伴わないまま、つまり議論がなされないまま、彼らの意見が無視されて行くとしたら(例えばパーマー氏の例)、彼らにとってはこんなにも人を馬鹿にした、そして何よりも謎めいた行動はないのであって、結局は苦しい思いだけを抱いて帰国するか、(4)のグループになりはててこの問題を避けて通るかどちらかになってしまうからである。全て心の内を explicit に表明することこそが virtue であると考えている外国人教師の立場と、implicit であることこそ virtue であると考えて来た日本人教師の立場には「東は東、西は西」の文句ではないが、どうやら永遠に接点を見つけないことが不可能なのかと筆者など時として絶望感にかられる。

ここでどうしても触れておきたいのは、前述した第3のグループの「来日以前からの認識と理解」についてである。筆者はロンドン大学に留学していた頃、外国語としての英語教育の実習のため North Wales の小学校で2週間半ほど英語教育に従事した。公開授業の折、カメルーンから来た同僚のひとりが“This”“That”の用法を子供に教えるのにかなりむづかしい英語を使って説明していた。そこで tutor の Hill 氏に授業後の感想会で「日本だったら“This”や“That”の用法を英語で説明しても理解できる中学生はいない。これではまるで母国語教育ではないか」と述べ、そうした場合には母国語による説明の方が効果的だろうといて色々日本の特殊事情を説明したがついに理解してくれたとは思わなかった。氏やロンドン大学で世話になった大部分の教師たちの信念は、明らかに direct method であり、そうした方法が有効であったのは、英語が第二語としての地位を確立している、いい換えれば英語を駆使できるかどうか、が人生に survive できるかどうか、に直接結び付く社会においてなのだという事実を認識していないのである。

英米共々、第二語あるいは外国語としての「英語教育」は旧植民地の人たちないしは移民に対していかに能率的に英語を教授するかという社会的要請から生まれたものであった。したがって、その言語教育の目的が oral communication に置かれたのも当然のことでもあった。しかも、人間は兎角他の文化を自分の育った文化の尺度で判断したがるものである。まして人類の歴史は西洋に始まり、西洋が人類文化をリードして来たと考えた英米人にとっては、英語が国際語であるのは彼らにとって全く incidental な事情によることを忘れて、英語がで

(p. 24 へつづく)



## 国際感覚と英語教育

NISHIYAMA

SEN

西山

千

きょうは、英語教育と国際感覚の問題について少し話をさせていただきたいと思います。まず国際感覚というもの为一体何であるかという基本的な面があると思います。たとえば外国の風俗習慣になれていて、外国語を流暢にしゃべって、外国人と気楽につき合えるというのが、果たして国際感覚を備えているといえるかという問題もあると思います。中には、外国語が非常に達者な人でも、観察してみると、どうも国際感覚にだいぶ欠けている方もいるのではないかという気がします。バタクさい人間とか、きざな人間が国際感覚を身につけている人ではないかという悪いイメージを持つ人々もあるのではないかと思います。私は、基本的には、語学的能力と国際感覚との相関関係が完全に一致しているということはいえないような気がします。

その例として、たとえばアメリカ人で日本語を非常にじょうずに話せる人もずいぶんいます。そういうアメリカ人の中にはほんとうに日本を理解している——それは別に日本人の気持ちに同情してくれて、完全に日本人と同意してくれているという意味で日本を理解しているという意味ではなくて、日本について充分知識を持っていたり、あるいは日本人のいろいろな反応のしかたに対してちゃんと認識したうえで、その認識に基づいて行動するということが、私がいう日本をほんとうに理解しているかどうかという点ですけれども——そういうふうになると、日本語をどんなにじょうずに話しても必ずしもそういう日本人の感覚を認識しているとは限らないといえます。むしろ日本語はそんなにじょうずにできなくても日本人となじみやすいし、日本人のいろいろな反応に対しても非常にうまくやっていくアメリカ人もいます。

私の知っているあるアメリカ人は、たまたまこの人は日本で生まれて日本で育ったので会話はある程度できるのですけれども、それ以上あまり日本語を勉強したことがない。アメリカン・スクールにずっと行って、それからあとはアメリカの大学に行って向こうで育ったという人なのです。ところがこの人はいろいろな点で、日本人が皮膚で感ずるようなことを半ば本能的というか、直感

的に感ずるわけです。他方、彼と何か一つの用件について話した場合には、きわめてアメリカ人的な物事の考え方をしているわけです。Approach もきわめてアメリカ人的なんです。ところが自分がこういうアメリカ人的な approach をした場合、これを日本人と合わせるにはどういうふうにしたらいいかということを彼はほとんど直感的にわかっている。そういう意味では非常に勘が鋭いのです。彼自身は決して日本人でもなければ日本的な人間でもないのですけれども、日本人といろいろつき合ったり、日本人と仕事をやる場合でも非常にうまくすっきりとやっていけるわけです。

ところがまた別のあるアメリカ人は、日本語を非常によく知っていて日本人と盃をかわしながら非常にむずかしい漢字を書いて、「あなた、これ読めますか」と日本人に見せている。日本人がそれを読めないと得意になって、この漢字はこういう漢字だと自慢話をするような人なのです。彼はもちろんいろいろな点でアメリカ的な感覚を持っているし、ある問題についてその approach も全部アメリカ的ですが、そのアメリカ的なものを強引に日本人に押しつけようとする。日本人の反応がいろいろあっても彼は全く鈍感です。自分では日本のことをよく知っていると思っているし、日本語もできるし、日本の新聞・雑誌も読むのです。にもかかわらず、日本人といろいろと交渉する場合に、彼はアメリカ的な approach 以外はしないわけです。そしてそれを強引に日本人に押しつけようとする。

したがって私が思いますのは、必ずしも語学的能力と、国際感覚は一致するとはいえないということです。しかし、いうまでもなく、国際感覚を養成する一つ的手段としては語学的能力というものが非常に役立ちますけれども、それよりもっとさかのぼって根本的な人間の気持ちというか、態度、いろいろなものに対する心がまえというものがむしろ国際感覚に一番結びついている問題ではないかという気がします。

最近私が感じた一、二の例をお話したいと思います。この間、ホノルルでプロボクシング世界選手権試合

があって、日本の柴田選手が世界チャンピオンになりましたが、その宇宙中継の録画放送を見ていた時のことです。その試合は非常に接戦でして、引き分けの場合は今迄チャンピオンだったフィリピン系のホノルルに住んでいる選手が続いてそのタイトルを防衛したことになるわけですから、柴田はとてもタイトルを取ることはできないだろうと、私はしろうとなりにそう思っていました。また、日本人のアナウンサーも解説者も、とても柴田選手はあぶないというふうな口ぶりでした。ところが案に反して柴田選手が判定勝ちしたわけです。勝ったということがわかったとたんに彼は飛び上がって喜んだ。どこの国の選手だって飛び上がって喜ぶ。きわめて無邪気な、非常に人間的な表情であったわけです。

ところが日本のアナウンサーが、日本の視聴者のためにもう少し景気づけなければならないという考えを持っていたのかどうかはわかりませんが、リングサイドに飛び上がっていった、「柴田君おめでとう。ここに日本人の応援団がいるから万歳を三唱しなさいよ」といったたきつけたわけです。柴田選手は有頂点になって喜んでいてわけですから、悲鳴をあげんばかりに万歳を叫んだのですが、その前にいた観光客でしょうか、小人数の日本人の団も、声をはりあげて万歳を三唱しました。しかし、そのすぐそばに真珠湾があるのです。おそらくそういうことは全然そのアナウンサーの感覚には入っていませんでした。日本国内で万歳を三唱することはあたりまえなことでおめでたいときにはいつでも万歳を三唱します。そういう習慣に対して外国人がかりに異和感を感じても、よく説明してやれば外国人だってわかるわけです。ですからそれは全然問題がないはずで

余談になりますが、実は沖縄返還の記念式典を武道館でやったときに、最後に万歳の三唱がありました。そこにはもちろんアメリカのいろいろな高官たちも出席していましたが、アメリカの大使館に帰ってきて、「日本人が万歳をやったのはどういうわけか」といって不思議そうな顔をしているのです。私は変な質問だなと思って、「あたりまえじゃないか、おめでたいことだから万歳しているのだ」といったら、「わたしはわかる」とこの外交官はいうのです。ところがそこに来ていたアメリカの軍人が非常に奇妙な顔をしていたというのです。その軍人というのはだいぶ年をとった将官級の軍人で、彼は沖縄戦やらそれ以前はフィリピン戦とか、いろいろなところですよと日本軍と戦ってきた将校で、当時は日本では「玉碎」といっていたのですけれども、万歳と玉碎の最後の突撃をするのとを結びつけて考えていたのです。最後のときにワッとどなって突撃をする、これは米軍に

としては非常にこわいものだったのです。ところがその突撃をアメリカ人たちは「万歳アタック」といっているのです。だから全く行為は違うのだけれども、万歳ということばと、それからいま申しましたイメージとが結びついているために、沖縄返還を万歳で祝うということが彼らにとって非常に不思議だったのです。ちょっと脅威すら感じたらしかったのです。しかし私は、「これは日本国内でやることであるしそれだからといって遠慮する必要も何もないので、もっとその軍人は認識を深めなければいけないですよ」といってたたみ返してやったのです。そうしたらそのアメリカの外交官も、それは君のいうとおりだ、確かに認識不足のためにそういうふうな変な違和感を感じたアメリカ人もいたということとを私に教えてくれたのです。そういうような感覚ですから、柴田選手が選手権を取ったということで、ホノルルで万歳をやるということは、そこにいるアメリカ人には非常に異様な感じを与えたと思うのです。

こういうようなことは、どうも国際感覚に欠けた、きわめて一方的な自分だけに都合のいいようなことを考えて、柴田選手にそういうことを要求したという態度のあらわれではないかと思います。本来ならばそういうことは選手の周囲で監督をしている人たちとか、放送局のアナウンサーたちがちゃんと勉強しておかなければいけないわけです。はなはだ勉強不足の非常に間違った行為をああいふうにしてやってしまったというふうに感じたわけです。しかしそれはハワイにいるアメリカ人がすべて万歳に対して不快感を持つという意味では決していないのです。むしろハワイあたりでしたら日本人がずいぶん行っておりますし、それから二世の日本人たちもいますから、その万歳の意味はむしろハワイのほうがアメリカ大陸よりもはるかに理解していると思いますから、相当大勢の理解者もいたと思います。ところがそんなことをあまり考えないアメリカ人もやはりそこにはいたのです。その証拠には、私がテレビの画面を見ていたら、ハワイ人系の警官が立っておりましたけれども、非常に不思議そうな異様な表情をしていました。結局日本の視聴者だけを中心にして考えるからあんなことになってしまうのだという気がするわけです。そういう場合に日本人のことを考えると同時に、ハワイにいるアメリカ人のことも一緒に考えてやる。そういう人たちの気持ちを配慮しながら行動するというようなやり方があるのではないかと、それだって充分景気をつけ、日本の視聴者に喜んでもらえるような方法もあるはずで

ところがそういうようなことはとっさにやるのではだめなのであって、やはり前もってある程度研究して準備していかなければい

けないわけです。その準備をするという気持ちを持つということが国際感覚に結びついていることではないかという気がするわけです。

このボクシングの試合の前に日本の大場選手が交通事故で亡くなったということについてアメリカ人の司会者がアナウンスをして、そして場内全員起立して1分間の黙禱を捧げようということまで提案して、みんな立ち上がって黙禱していました。それからそのあと、日本の白井選手と、その白井選手があゝの当時選手権を獲得した相手のマリノ選手がそこに観戦に行っていたわけですが、その2人の選手をわざわざリングの上に呼び上げて紹介しているのです。そしてそういうふうな人たちに対しては場内いっぱい拍手かっさいを送っているわけです。アメリカ側では日本人に焦点を合わせているのではないけれども、国際的な一つの世界選手権の試合だという感覚を持ち、わざわざそういう礼まで尽くしているわけです。試合そのものは別に問題はもちろんなく、判定もきわめて公平であったらしい、69対71とか、70対71とか、非常にきわどい点のつけ方ですけれども、3人の審判員ともに1点か2点ずつ柴田選手に有利を与えたということ、すべて日本人にとっては非常に気持ちのいいものだったわけです。それを今度は万歳で逆転したような感じを与えたというところに、国際感覚の問題があるのではないか。むしろ逆にいえば、アメリカ人のほうが同じアメリカの国内でありながらも国際感覚を示すような行動をしたのではないかと思います。そういうふうに相手の気持ちを無視して行動するのか、あるいは相手の気持ちを一生懸命考えながら行動するのか、どちらかによって国際感覚はきまると思います。

それからもう1つの点は、相手の行動をどういうふうに関係するかということについてもいろいろと問題もあると思いますが、これもやはり国際感覚にある程度結びつくのではないかと思います。むしろ国際知識といったほうがいいかも知れませんが、やはり感覚につながると思います。最近の例ですが、ベトナムの和平条約が結ばれて、条約に署名する式典がバリで行なわれたときに、各国代表が条約書にサインするわけですが、条約書の文書が、いろいろあって、たくさんのものにサインをしなければならないわけです。そのときにアメリカのロジャーズ國務長官の席の前に十何本もペンが立ててあった。そして長官はサインをするときに1本ペンをとってはちょっと書いて、それを隣の人に渡して、また次のペンを持ってもうちょっと書いていたわけです。その情景を見たある日本のジャーナリストが新聞に報道したのは、どうもロジャーズ長官のペンはしょっちゅう

故障していたらしくて、うまくインクが流れなかったらしい。何本のペンを使ってもうまくいかなかったようだということを書いている。

これは全く相手の行動を読み違えてしまっていることであって、ああいう歴史的な条約にサインをする場合に、アメリカの習慣、また西洋人の習慣では、サインをしたペンが非常に貴重な歴史的な記念品になる。そうすると、おそらくロジャーズ長官はキッシンジャー大統領補佐官はじめ國務省の中の大勢の人たちが悪戦苦闘してようやくあそこまでこぎつけた努力に報いるために、国際条約にサインしたペンをたくさん用意して、それをおそらくスタッフに進呈するのだろう。これは明らかなことなんです。ところが日本の新聞はそうではない。ペンの工合が悪いというふうに説明してあったわけです。こういうのは相手の行動の無邪気な読み違いでもありませんけれども、もっと深刻な行動の読み違いもあります。とんだ誤解を生んでしまうということもあります。

一つ、非常に極端な例を申しますと、ある朝新聞を読んでいたら、横須賀であるアメリカの兵隊が日本人のおばあさんを刺し殺して逮捕されたという記事が出ていました。その犯人の説明では、実は両替を頼んだらこのおばあさんがおれを侮辱したというのです。それだけのことでしか出ていないのですけれども、私がそこから憶測するのは、日本人はよく断わるときにいいえとか、ノーノーと、手を前で振ります。アメリカではこれに非常に似たような動作は女性の前では絶対にやってはいけない、非常に相手を侮辱する動作になっているのです。その動作をやった場合にはけんかをする位の非常に悪い動作になっているわけです。そういうようなこともあり得たかも知れないと私は思うのです。考える人だったら、それこそ国際感覚を全然持っていない外国人がそういうような動作をした場合には、「ちょっと待てよ、あれはおれが察するのは違った意味かもしれない」というふうに考えるのが常識だと思うかもしれないけれども、全く無教養な若い外国に行ったこともないような兵隊が非常に一方的に判断してああいう犯行をおかしたということも考えられるわけです。ですから動作の読み違いというものもそういう深刻な問題にまで発展し得ることがあるかも知れないわけです。そういうところから私は国際感覚を持つということは、これは英語ができる、できないに関係なく、できるだけ大勢の日本の国民が持つようにする必要があるのではないかと思います。もちろん国際感覚と一口でいっても、程度はそれこそ0から100%までいろいろあるわけです。しかし私は0ではなく1%の、つまり出発点に立てるような国際感覚というもの



は、これはすべて私たち日本人が持っているべきではないかという気がするのです。

特にいまは公害問題が世界的な問題になっていますし、人口の爆発の問題、食糧の不足、新しい資源の開発、これらのたくさん問題はどうしても国際協力によって処理しなければならない、という時代に入りつつあるわけです。しかも科学技術の発達によってこういうような問題を物理的に解決する方法はこれからますますその可能性が多くなってくると思います。しかし物理的にそれを解決するためには、やはり世界中の人たちが一致協力して地球管理を行なうように、効果的に、その対策がとれるようにしなければいけない。私はそこが一番大きな問題だと思います。

たとえば国の境界線は海の上の3海里であるとか、12海里であるとか、国によっては200海里だというふうにがんばっているようなところもありますけれども、そういうような海の上での境界線はいまのような地球管理を効果的に行なおうとした場合には全くナンセンスになるわけです。ところが果たして各国とも自分の境界線はナンセンスだというふうに認め合えるかどうかということひとつを考えても、非常に重大な政治的、心理的な問題が多くての障害として残っていると思います。やはり世界中の国民が国際感覚を持っているとはかぎらないという点がひとつの大きな障害になるのではないかと思います。そういう意味で私は国際感覚というものが非常に重大なものであり、深刻な問題だと思うわけです。

さて、それならば英語を勉強した場合にどの程度国際感覚が得られるかどうかということですが、これはことばという道具を通して、どういうものを生徒が教わるかということによってずいぶん影響されるのではないかと思います。英語、たしかに文法も大切ですし、主語、動詞、目的語などを承知するのも非常に大切ですけれども、子供がことばを覚える状況を見ていると、全く無邪気に、おとながしゃべっている音を聞いて、その音をまねている。しかもその音と、それに伴う周囲の情景、状況、感情、そういうものを合わせて、そしてその特定の音に結びつけて、そこからその意味を子供はとるわけです。そして自然にことばを身につけていくわけです。

昨日、私はある会合で、西山登志夫さんという動物を扱う専門の方のお話を聞いたのです。あんなおもしろい話を聞いたのはひさしぶりです。この西山さんは何十年もカバや、ライオン、サルなどの世話をしているわけです。そういうことを通してやっていると、動物の鳴き声を実際ことばと同じように意味がわかる。サルは24種類ぐらいいろいろな communication を持っているそうで

す。しかも西山さんが動物に語りかけたり、自分で鳴いてみたりするとちゃんとその動物もわかるらしいのです。ですから動物との対話というものが行なわれるわけです。それで西山さんのいわれたのは、もしもどこか宇宙の人間が銀座のまん中に出てきた場合、その宇宙人と対話をしようとした場合には、西山千という同時通訳者はだめだろうが、西山登志夫ならわかるということです。これは私は非常に貴重な真理だという風に感じました。

私はことばという、たとえばフランス語は全然わからないのです。フランス語を聞くとやはり音のほうにとらわれたり、あれは何という字だったかなとか、何という語であったかなというふうに考えてしまう。そしてときたま英語に似たような発音がヒョッと出てくると、ああ、英語ではこうだなというふうに思ってしまう、そういうわけで私はおそらくフランス語を勉強する場合には悪戦苦闘しながら勉強するようになってしまうのではないかと思います。ところが西山登志夫さんのように動物と生活をして、動物の発する音といろいろな状況から、そのまま呼吸するように吸収しながら意味をとっていくというふうにするとか...

これは西山さんが話しておられたのですけれども、動物園に、あるフランス人がやってきたそうです。もちろん西山さんはフランス語ができない。ところがこのフランス人は英語ができないからフランス語でべらべらしゃべっていた。西山さんがそれをじっと聞いて、そのフランス人の表情やら顔、手まね足まねを見てわかったことは、「これから自分はわずか1時間しか余裕がないけれども、ぜひ動物園を見たいのだ。けれども不案内なのでだれか案内してくれないか」ということなのです。そこまでわかったそうです。そこで西山さんはちゃんと案内してあげて、フランス人は必要なことだけはわかって、非常に喜んで帰っていったそうです。私は語学の勉強の場合にも、何とかしてそれができたら非常に良いと思います。

それと同じようなことではないのですけれども、通訳という作業をやっていると、どうもそういうような面が多少わかりそうな気がします。つまり、通訳という作業は次々と出てくる単語を単に別の国語の単語に置きかえるということではないのです。もちろん翻訳でもないのです。学校で日本語という測定機を用いて英語の理解力を測定する場合には、これはある約束事に基づいた訳語、翻訳のしかたというものが有りますから、生徒がそういうようなものは一つの測定機であるということを理解した上で、翻訳をやるということはもちろん私は価値ある一つの教育方法だと思うので、決して学校における

翻訳のことを批判しているわけではありませんので、その点は誤解のないようお願いいたします。しかし、実用世界の翻訳、通訳の場合、どうかすると、たとえば英語である名詞があって、その名詞の性格をあらわす3つの形容詞がここにある。そういう場合に翻訳者は、つい日本語でもやはり3つ形容詞を使わなければいけないのではないかというふうに思いがちです。ところが実際は、同じような意味を、もしもいきなり日本語で表現した場合には、場合によっては形容詞は2つですむかもしれないし、1つですむかも知れない。あるいは全然使わないで、ある特定の名詞を使いさえすれば全体のものと同じような意味のものがそこに出てくるかも知れない。その場合、日本語だけで表現している場合には安心してそういうふうを書くのですけれども、原語の英語というものがあつた場合には、字数までそろえなければいけないぐらいに思ってしまうんです。そういうようなことは通訳をしている場合にはとてもやれないことですし通訳をする場合には、これは逐次通訳であっても同時通訳であっても発言者のいわんとしている内容をできるだけ正確に別のことばで表現することが原則なので、できるだけ正確に表現する場合には、やはりそのことば、たとえば英語から日本語にいく場合には、日本語の自然な表現のしかたをもって英語で発言されている内容を表現するといういき方でないと十分な communication ができないわけです。

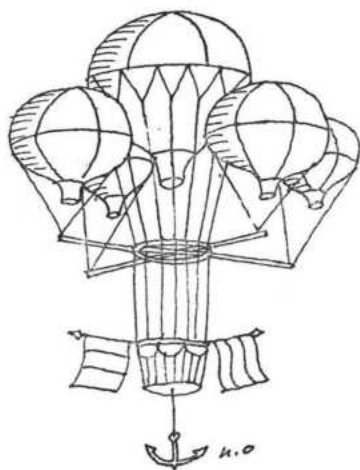
それで、たとえば同時通訳が技術的には相当できるようになって、ちゃんとついていけるようになっている人でも、まだ実際の国際会議における同時通訳を充分身につけていない人の同時通訳を聞いてみると、日本語はたしかによくイヤホーンに聞こえてはくるのです。ところがその日本語が何をいっているかよくわからない場合があるわけです。そういう通訳者の声を聞いてみると、何だか棒読みをしているような、単調なものいい方で、日本語の調子と全然違うのです。ところがおもしろいことに、その同じ通訳者が通訳をしないで友だち同士日本語でしゃべっているときにはきわめて自然な日本語であるし、声の表情もきわめて自然な日本の表情になっているわけです。それは何を意味するかというと、そういう通訳者はまだとにかくことばの転換に夢中になっていて、communication をしているのだという意識のところまで到達していないわけです。ところが communication を一方のほうから相手のほうへできるだけ円滑に正しく行なうというのが通訳者の仕事であつて、責任でもあるわけですから、どうしてもさっき申しましたように、ことばにこだわることはできないわけです。意味を

とつて、その意味を正しく表現することになるわけです。それをやっていると、先ほど例として西山登志夫さんの話をあげてみましたけれども、そういう方々の話などがわかるような気がします。これはちょっと国際感覚からだいぶ横道にそれたように聞こえますでしょうが、私は実は国際感覚というものもやはりこれに通ずるものがあるのではないかという気がします。

つまり通訳をするとか、あるいは西山さんのように動物と対話を持つ場合、あるいは初めて自分がそのことばの意味を吸収していく場合は、心を開いて、次に何があるだろうかというようなある好奇心や興味を持って、そして相手に対して同情心を持って耳を傾けるというふうにししないと正しく通訳もできないし、またことばを習うにも正しい意味のことばを身につけることもできないわけです。ですからそういうような意味で国際感覚という問題を考えた場合には、それをもっと広げて、言語だけではなくて、全体の文化というものに対して、あるいは国民性とかいろいろなものに対して、外国の国民に対してもこれから持っていく必要があるのではないかという気がします。したがって英語教育の場においても、いま申し上げたような心がまえと態度というものを学生の間に養成することができれば、自然にその学生が英語というものを通して国際感覚にもだんだん敏感になってくるのではないかという気がいたします。

(1973年3月31日 ELEC 月例研究会における講演の速記)

(国際コミュニケーター)





# 意義素の構造

HATTORI SHIRÔ

服部 四郎

筆者の定義に従えば、「意義素」(sememe)とは単語(word)の意味のことで、意義特徴(sememic features)(以下明らかな場合には単に「特徴」と呼ぶことがある)の束である。意義素は「文」(sentence)の単語断片の意味よりも抽象的であることが多く、「発話」(utterance)の単語断片の具体的な意味よりは遙かに抽象的であるのが常である<sup>1)</sup>。

しかしながら、「単語連続」(a sequence of words)(いわゆる「熟語」(idiom)の一部を含む)が全体としてそれ独自の意義素を有することがある。たとえば、*to put on*「着る」、*to have a hand in*「に関係する」、など。

意義特徴には3種類のものがある。すなわち、語義的特徴、文法的特徴、文体的特徴がそれである。名詞、動詞、形容詞のような「自立語」(すなわち、単独で発話され得る単語)の意義素は、語義的ならびに文法的意義特徴から成っており、さらにその上に文体的意義特徴が加わっていることがある。代名詞、particles、冠詞、前置詞、後置詞、一般に附属語の意義素は、文法的意義特徴(複数)のみより成り、さらにその上に文体的意義特徴が加わっていることがある。

たとえば *bird*, *horse*, *flower*, *boy*, *girl*, *book* などのような名詞の意義素はたがいに異なっているけれども、「countable nouns」という同じ文法的意義特徴(複数)を共通に持っている。これらの名詞のすべてに共通でないところの、その他の意義特徴(複数)は、大部分が語義的である。英語の *stay* という名詞と *sojourn* という名詞の意義素はたがいに異なる。なぜなら、前者は口語的な単語であるのに対し、後者は文語的な単語で前者にない《(bookish)》という文体的意義特徴を有するからである。

おのおのの意義特徴(単数)は2つの機能、すなわち、

1) 「文」(sentence) および「発話」(utterance) という術語の筆者の定義については、次の拙文参照。

The Analysis of Meaning (For Roman Jakobson, The Hague, 1956, 所収)

The Sense of Sentence and the Meaning of Utterance (To Honor Roman Jakobson, The Hague, 1967, 所収)

文脈的な機能と場面的機能とを持っている。

英語の名詞の意義素の文法的意義特徴(複数)の文脈的機能は、名詞が冠詞、形容詞に修飾される、前置詞に支配される、「主語」や「目的語」になる、代名詞に代置される、等々という事実に顕現する。

たとえば、次の単語連続を見よ。

*a bird*

*the bird*

*of (→to →from, etc.) the (→a) bird*

等々

これらの単語結合を根拠として、*bird* という名詞の意義素は、*a*, *the*, *of*, *to*, *from* などの文法的意義特徴(複数)に呼応する文法的意義特徴(複数)を有すると想定する。そして、それらの意義特徴を暫定的に《*a*→》, 《*the*→》, 《*of*→》, 《*to*→》, 《*from*→》などで表わすことにしよう。また、この *bird* という名詞は「主語」「目的語」

“(形容詞の)被修飾語”などという「文法的位置」に立てるので、その意義素は、これらの位置に呼応する文法的意義特徴を有すると想定し、それらの特徴を《(subject)》, 《(object)》, 《(modified)》などで表わすこととする。また、この *bird* という名詞は *it* という代名詞に代置され得るので、*it* の有する文法的意義特徴に呼応する文法的意義特徴を有すると想定し、それを《↔*it*》で表わすこととする。

名詞 *bird* は「主語」の位置に立てるけれども、あらゆる動詞の主語になれるわけではない。たとえば、

(1) *A bird is flying.*

はふつうの文であるが、

(2) \**A bird is reading.*

はそうではない。これに反し、

(3) *A boy is reading.*

はふつうの文であるが、

(4) \**A boy is flying.*

はそうではない。これらの事実を根拠にして、しばらくの間次のように想定することにしよう。すなわち、*bird* という名詞の意義素は *fly* という動詞の意義素の語義的

意義特徴(複数)の一部分と呼応する語義的意義特徴(複数)(これを暫定的に《⇒fly》で表わそう)を有するけれども《⇒read》と表わし得る語義的意義特徴(複数)は有しない、と。同様に、次のように想定する。すなわち、fly という動詞の意義素は bird という名詞の有する語義的意義特徴(複数)の一部分と呼応する語義的意義特徴(複数)を有し、これを暫定的に《bird⇒》で表わすが、《boy⇒》と表わし得るような語義的意義特徴は有しない、と。また read という動詞は《boy⇒》を有するけれども《bird⇒》は有しない、と。

- (5)  $\left. \begin{array}{l} A \text{ bird} \\ A \text{ horse} \\ A \text{ boy} \\ A \text{ girl} \end{array} \right\} \text{ is eating.}$

はふつうの文であるけれども、

- (6)  $\left. \begin{array}{l} *A \text{ flower} \\ *A \text{ book} \end{array} \right\} \text{ is eating.}$

はそうではない。故に、bird, horse, boy, girl は《⇒eat》を有するけれども flower, book はそれを有しない；また eat という動詞の意義素は《bird⇒》, 《horse⇒》, 《boy⇒》, 《girl⇒》を有するけれども《flower⇒》, 《book⇒》は有しない、と想定する。

名詞 bird は《⇒animal》を有し、名詞 animal は《bird⇒》を有するけれども、bird は《animal⇒》を有せず、animal は《⇒bird》を有しない。なぜなら

- (7) A bird is an animal.

という文は可能だけれども、

- (8) \*An animal is a bird.

という文はそうではないからである。

このように研究を進めて行けば、1つの言語の単語(複数)の意義素の構造の完全な記述に達することが可能であろうか？ これに関しては色々の問題がある。

1つの問題は、どこで止まるべきか、という点である。可能な文は無限にあり、それらを余すところなく取り扱うことはできない。1つの言語(すなわち de Saussure のいう langue) の意義素を研究するに際しては、われわれの資料をごくふつうの、慣習的な、社会的に確立した文に限定しなければならない。したがって、

- (9) An elephant has a long memory.

という文は、科学的な真理を表現しているか否かとは関係なく、ただそれがアメリカ人の常識を表現しているが故に、われわれの意義素研究の資料となる。従って、アメリカ英語の名詞 elephant の意義素は《⇒have a long memory》という意義特徴を含むことになる。これに反し、日本語の名詞 zō (象) はそういう意義特徴を有しない。

い。

一般に、ある単語の意義素の記述は、その単語によって表わされる事物の科学的記述ではなくて、むしろその単語の意味の民間伝承的記述となるであろう。意義素は主として必ずしも現実的経験の表現であるとは限らない言語表現によって伝えられる。従って、ghost, devil などというような単語も意義素を有し得るのである。

われわれの幼少時代には、われわれは昔ばなしを愛しそれを信じていた。昔ばなしの中では、鳥が本を読んだり馬や少年が飛んだりすることがある。そういう時代には、bird という単語が《⇒read》という意義特徴を有したり、horse や boy という単語が《⇒fly》という意義特徴を有したりしたわけである。成長するにつれてわれわれの現実的経験はそういう空想を排除するようになる。このような場合には、私は、horse の意義素は《⇒fly》, 《⇒speak》などという「抑圧された意義特徴」を有する、と言うことにする。

現代のような科学時代には、誰でも月に関する科学的な諸発見を信じている。それにも拘らず、moon が rise したとか、set, wane, wax したとかいう非科学的な表現を棄てようとはしない。そういう場合には、私は、moon という単語は《⇒rise》, 《⇒set》, 《⇒wane》, 《⇒wax》などという通常の(無標の)意義特徴の上に、科学的な意義特徴を有する、と言うことにする。

第2の問題は次の点にある。

- (10) Elephants are large.

- (11) This elephant is large.

この2つの文のうち、前者は一般的陳述であり、後者は特定の事実に関する陳述である。後者は this large elephant に変形することができるが、前者は \*large elephant に変形することができない。(11)の文の形容詞 large は small と取り換えることができるが、(10)の large は small と取り換えることができない。

次の諸事実に注意せよ。

- (12) This elephant is large (~small).

- (13) " old (~young).

- (14) " white (~black).

- (15) \*This elephant is large and small.

- (16) \* " old and young.

- (17) \* " white and black.

ところが、次のようには言うことができる。

- (18) This elephant is old, large, and white.

私の記述の仕方によれば、elephant の意義素は《⇒old》, 《⇒young》; 《⇒large》, 《⇒small》; 《⇒white》, 《⇒black》, などの意義特徴を含んでいなければならないが、



同時に *elephant* という単語の意味は大きさ、年齢、色などに関して中和的でなければならない。この中和性を《⇒large~small》, 《⇒old~young》, 《⇒white~black》, など で表わすことにしよう。一方また、*large*, あるいは *small*; *old* あるいは *young* などという形容詞が名詞を「修飾」し得るという事実は、《⇒large~small→》, 《⇒old~young→》などで表わすことにしよう。このようにして、【アメリカ】英語の *elephant* の意義素は、その有する多くの語義的意義特徴のうちに少なくとも次のものを含んでいなければならない。

《⇒animal》  
 《⇒large》  
 《⇒have a long trunk》  
 《⇒have a long memory》  
 《⇒large~small→》  
 《⇒old~young→》  
 《⇒white~black~grey, など→》

等  
 等

第3の問題は次の点にある。基礎的な（文語的、詩的、などでない）語彙において、*large* と *small*, *old* と *young* はそれぞれ対立する1対ずつの形容詞であり、色を表わす形容詞の数も限られている。ところが、より高い文体的レベルの語彙では、そういう形容詞の数は限られていない。《⇒large~small→》, 《⇒old~young→》などの中和した束を「閉じた束」と呼び、より高い文体的【あるいは専門語的】レベルの色彩形容詞の中和した束を「開いた束」と呼ぶことにする。ちなみに、*bird*, *horse* などの名詞の意義素や、*fly*, *read* などの動詞のそれは、原則として「閉じた」束ではない。

さらに第4の問題がある。前述の《a→》, 《of→》, 《↔it》; 《⇒fly》, 《⇒read》, 《bird⇔》, 《boy⇔》, 《⇒animal》, 《⇒large》などで暫定的に表わした意義特徴は、大部分が単独の意義特徴ではなくて究極的特徴の束である。たとえば、*a* という冠詞の意義素は究極的意義特徴《(indefinite)》, 《(countable)》, 《(singular)》の束と分析されるが、*the* という冠詞の意義素は《(definite)》, 《(uncountable~countable)》, 《(singular~plural)》という究極的意義特徴の束と分析されるであろう。また、《⇒fly》, 《⇒read》, 《⇒eat》などから《[[植物に対する]動物としての活動]》という究極的意義特徴を抽出し、《bird⇔》, 《horse⇔》, 《boy⇔》, 《girl⇔》などから同じく《(動作主としての動物)》を抽出することができるようになるであろう。

意義素を究極的意義特徴に分析するには、各言語の、

できれば、世界中のすべての言語の、少なくとも基礎語彙の、すべての単語の文脈的機能全体を研究することにより行なわれなければならない。

ただ1つの言語だけを研究した場合でも、それによって獲られる究極的意義特徴は、大抵普遍的なものである。言い換えれば、その言語との親族関係の有無を問わず、他の言語（単数または複数）にも見い出されるであろう。こういう究極的意義特徴は、科学的記号あるいは少なくとも科学的に定義した術語によって表わすことが望ましい。

究極的意義特徴の或ものは常に同時に機能するので、「抱合わせの束」を成すと言ひ、その2つの特徴を+の印で結合して表わすこととしよう。たとえば、英語の複数を表わす形態素における《(countable)》と《(plural)》という2つの究極的特徴は常に同時に機能するので、《(countable)+(plural)》によって表わされる。

意義特徴の抱合わせの束全体が他の特徴または特徴の束と中和することがある。たとえば、英語の *cold* という形容詞の意義素は、日本語の2つの形容詞 *samui* と *cumetai* の意義素を包含する。後2者の区別は次のようである。

*samui* 《(体全体の感覚)+(不快)》

*cumetai* 《(体の一部分の感覚)+(快~不快)》

従って、*cumetai biiru* (冷いビール)とは言えるが \**samui biiru* とは言わないのに反し、*samui kaze* (寒い風)とも *cumetai kaze* (冷い風)とも言える。英語の *cold* という形容詞に関しては、その意義素が次の意義特徴を含んでいると想定せざるを得ない。

《[(体全体の感覚)+(不快)]~[(体の一部分の感覚)+(快~不快)]》

英語では *cold wind* は常に不快なものであるが、*cold beer* は快でも不快でもあり得る。

1つの単語は文脈的機能と場面的機能とを有する。或単語の「文脈的機能」とは句や文の限られた位置に立ち得る能力のことで、いままでに研究してきたのはそれである。そのほかに、単語は、話し手の内的世界の当面の問題となっている特徴（複数）を表現し外界の事物の当面の問題となっている特徴（複数）を指し示す能力を有する。この能力をその単語の「場面的機能」と呼ぶ。たとえば、

(19) *This is a stone.*

という文の中の *is* という単語は、話し手の或種の判断を表現することができるけれども、

(20) *This isn't a stone.*

という文の中の *isn't* で表現される判断は表現し得ない。

この文が、皮肉の、或いは冗談の、或いは偽りの発話として用いられるのでない限り、そうである。同様に、

(21) *There is a bird.*

という文の中の *bird* という単語は、或種の動物を指し示し得るけれども、*horse, dog, flower, stone* などと呼ばれる物は指し示し得ない。

ある単語の文脈的機能ならびに場面的機能は、その意義素の顕現の2つの面であり、それらは互いに1対1の関係にある、と想定する。

前に述べたように、意義素は意義特徴の束であり、おのおのの意義特徴はそれ自身の文脈的機能を有する、と想定する。従って、また、おのおのの意義特徴はそれ自身の場面的機能を有する、とも想定する。

いままでは、意義素をその文脈的機能を通じて研究してきたが、意義素をその場面的機能を通じて研究することもでき、また研究する必要がある。

しかしながら、概して言えば、文法的意義特徴を科学的に研究するには、その場面的機能を通じてよりもその文脈的機能を通じて研究するほうが容易なのがふつうであるが、語義的意義特徴を研究するには、その文脈的機能よりも場面的機能を通じて研究する方が容易なことがしばしばある。たとえば、日本語の(三重県)亀山市方言と(鹿児島県奄美大島の)大和浜方言は、意味がかなり異なる次の同源語を有する。

*kosi* (亀山): waist の後部

*k'usi* (大和浜): back (背中) の上の部分、特に肩甲骨の部分を除いた残りの部分

これらの名詞の文脈的機能ばかりを研究するとしたらそれらの意義素の違いを明らかにすることは困難であろうが、インフォーマントの背中に触りながらその“地図”を作ろうとするとその違いはたちまち明らかとなる。

しかしながら、経験によると、意義素の研究において単語の2つの機能の両方に注意する方がはるかに有利である。附言するまでもないことだが、インフォーマントの内省による報告をメンタリストティックであるとの烙印を押して、研究資料から除外するようなことがあってはならない。

\* \* \* \*

上は昨年(1972年)の夏イタリアのBolognaで開催された第11回国際言語学会議(The Eleventh International Congress of Linguists)で発表した英文原稿の邦訳である。多少の誤植はあったがPreprintsにそのまま印刷されて、参加者に配布された。

発表時間15分という制限があったので、内容を極度に

圧縮した。非常に早口に読めば15分で読めるように書いたのだが、そんなに早く読んだのでは意味がないと考え、予定を変更して、強調すべき所は語勢を加えつつゆっくり読んだので、全文を朗読することができなかった。文章はもっと長く書いて、別に短縮したものを用意して行って朗読すればよかったと思う。

11月に帰国後、國廣哲彌氏に批判的な意見があると人伝に聞いたので、同氏にそれを英文で認めて貰い、私の回答を添えて、会議のProceedingsに公刊しようとしたのだが、時間ぎれで間に合わなかったので、ここに國廣氏のその英文と、私の日本文による回答を公表する。

Question to Professor Hattori's  
"The Structure of the Sememe"

Tetsuya Kunihiro

I understand that the restriction of concordance represented by sentence (8) holds only where the subject *animal* is 'indefinite,' because (8)' is possible:  
(8)' The animal is a bird.

It would be clearer if you would explicitly state this proviso. In the case of *elephant*,  $\langle \Rightarrow \text{large} \sim \text{small} \rightarrow \rangle$  is possible only where *elephant* is 'definite,' while  $\langle \Rightarrow \text{large} \rangle$  is possible in the cases of both 'definite' and 'indefinite.' Further, the distinction of 'definiteness' and 'indefiniteness' plays an important role in the choice of English articles *a* and *the*. Should not this distinction be given a proper place in the description of semantic structure?

In the case of *bird* again, the non-occurrence of sentence (8) can be stated in more general terms from the point of view of 'hyponymy' (cf. John Lyons, *Introduction to Theoretical Linguistics*).

(8) \*An animal is a bird.

With the proviso that the subject is indefinite, we can give a general statement that any two words which are in hyponymic relation to each other, e.g. *red* and *scarlet*, *flower* and *tulip*, etc. (the former of each pair is a superordinate word and the latter is a hyponym), can be arranged in the order (1) but not (2): unidirectionality in hyponymy.

(1) hyponym—superordinate word

(2) superordinate word—hyponym

*Animal* and *bird* are hyponymic relation; therefore sentence (8) is impossible.

By the general statement we can do without such specific statements as '*animal* does not have  $\langle \Rightarrow \text{bird} \rangle$ ,' '*animal* does not have  $\langle \Rightarrow \text{dog} \rangle$ ,' etc.

The hyponymic relation is automatically determined by comparing the structures of semantic features of words: all the features of a superordinate word is included in the features of its hyponyms.

The alternative I propose here will simplify the description of the structure of the sememe.

國廣氏の批評を読んでまず第1に感ずることは、同氏は私の意義素論的研究手順の意味を全く理解していないということである。

まず、私の研究手順は、下から上へであって、上から下へではないことに注意を喚起したい。すなわち、意味に関する言語事実の観察・調査から考察・研究を進めて意義特徴・意義素・意義素体系に達しようというのであって、日本語や英語のような我々によく或いはかなりよく知られている言語ばかりでなく、全く未知の方言や言語の研究にも有効であるようにと考えているのである。あらかじめ意義特徴や意義素体系などを直観的に立ててそれから言語事実へ下りて来るのとは逆である。

國廣氏はいきなり *bird* は *animal* の hyponym だと言うが、英語だからそういうことが安易に言えるのだということが十分反省されているのであろうか。私の研究手順は、文脈的機能の研究からそういう関係も明らかにするためのもので、そういう関係を記述から除外しようと言うのでは決してない。未知の方言や言語には、我々の予想できないような言語事実がある。たとえば、八丈島方言では、イモムシ、アリ、テントームシ、ムカデ、その他、名の不明な虫は、ムシメであるが、ノミ、シラミ、カ、ハエ、ハチ、チョー、トンボ、セミ、コーロギ、ミミズ、トカゲ、などはムシメではない<sup>2)</sup>。

また、私の説く研究手順によって帰納的に達する意義素は、純粋に言語的であり、「文化」的・民俗的であって、哲学的な「概念」や科学的な定義とは異なり得る、という点も1つのミソであることを強調しておきたい。

こういう研究を進めて行けば、hyponymic relation と呼んでよいような関係やその他の意義素体系の関係も当然明らかになるはずである。私はずっと以前から、理想的な言語学的辞典は、一面では分類的となるべきだと説いている。

その場合でも事実はかなり複雑であることが予想される。たとえば、國廣氏は「superordinate word のすべての意義特徴はそれの hyponyms の意義特徴の中に含まれる」という意味のことを言っているが、次のような

2) 『岩波講座 哲学, XI』(昭和43年)の拙文「意味」の329ページ参照。

ことがあり得る。一般的陳述として、

②2 *An ostrich is a bird.*

②3 *\*A bird is an ostrich.*

などという事実から *ostrich* は *bird* の “hyponym” と称してよい、ということになったとしよう。一方、

②4 *Birds fly.*

がごくふつうの表現であるとすれば、*bird* の意義素は《⇒fly》を有する、ということになろう。ところが *bird* の “hyponym” である *ostrich* の意義素は《⇒fly》を有しない。こういうことも有り得る。

また、*scarlet* は *red* の hyponym だというのが、*red* は基礎語彙に属し、*scarlet* はそうではない、というようなことが記述から除外されてはいけない<sup>3)</sup>。

また、ここには細説できないが、*tulip* と *flower* の関係も単純ではない。

私の考えている理想的な辞典では、これらすべての点が記述される。

上の①0および①1という2つの文について、私は、①0は一般的陳述 (a general statement) であり、①1は特定の事実 (a specific fact) に関する陳述である、として区別した。これに関連して説くべきことは極めて多いが、もうすでに与えられた紙数を遙かに超過したので、今回はごく簡単に述べておく。実は

②5 *This elephant is large.*

②6 *This elephant is small.*

から《⇒large~small》を有すると帰納される形式は *elephant* ではなく *this elephant* なのである。さらに

②7 *These elephants are large (~small).*

②8 *Some elephants are large (~small).*

②9 *His elephant is large (~small).*

などとの比較によって、はじめて *elephant* が《⇒large~small》を有することが明らかとなるのである。

また、実は表層形式においては、(7) *A bird is an animal*<sup>4)</sup> から知られるのは *a bird* という形式が《⇒an animal》を有するということだけである。さらに

③0 *Birds are animals.*

③1 *The bird is an animal.*

という一般的陳述の文と比較することにより *bird* が《⇒animal》を有することが明らかとなるのである。

3) 本文 (p. 21) で第3の問題点として説いた部分で言及した「より高い文体的レベルの色彩形容詞」に *scarlet* は属するのではないか。

4) 実はこれは科学的な文体レベルの文で、基礎的レベルでは

*Birds are not animals.*

というのが普通の文であるというインフォーマントがある。

國廣氏の挙げた

(8) 'The animal is a bird.

という文は、一般的陳述の文としては成り立たない（この点に注意！）けれども、特定の事実に関する陳述としてなら成立つ。しかしその場合でも、《⇒a bird》を有するのは、the animal であって、animal が《⇒bird》を有するという点にはならない点に注意すべきである。

國廣氏は、私が上に general と specific との区別としたものを、('definite' and) 'indefinite' と 'definite' との区別としているようだが、誤りである。説くべきことは多いが、1点だけについて述べれば、國廣氏は、「《⇒large~small⇒》は elephant が 'definite' である場合に限り可能である」としているが、(8) のように 'definite' でなくても specific fact に関する陳述であれば large~small が現われ得る。

これを要するに、國廣氏は私の論文の一部しか読まず、私の趣旨を理解しなかったばかりでなく、同氏の“提案”は、私の説いた研究手順に対する alternative などというものではないのである。

(東京大学名誉教授)

\* \* \* \* \*

(p. 13 よりつづき)

ない日本人を軽蔑したり、日本の英語教育の特殊事情に全く理解を示さなかったりすることになる。これら(1)、(3)のグループの心情を理解するためには一度留学でもして見るとたちまち判る。外国から帰って来た当座は日本の英語教育の非能率さをなんとかしなければという思いにかられ、腹も立つ、そして自ら教室でも日本語を一切使わずに授業を進めたりするのであるがやがて、日本には日本の事情があることに気が付いて、そこからもう一度日本の英語教育のあるべき姿について問い返しを始める。こうしたグループの日本人教師と第2のグループの外人教師は心情的にも極めて近い。しかし、この第2のグループの人たちの欠点は、あまりに事情が判り過ぎて、一切の批評的言辭を控えてしまって、discussion にならなくなってしまふことであろう。日本の英語教育にとって最も大切なことのひとつは、日本の事情を知的に理解する外人教師をひとりでも多く作ることなのである。それは彼らの努力に期待しているだけでは駄目なのであって、第1第3のグループを説得するためにも日本側からの積極的な働きかけが必要なのである。もういい加減に日本人だけの仲間うちの仲良し英語教育論や外人教師の御高説をウヤウヤしく伺うといった状態から卒業して、国際的な視野に立った議論を外人教師を大いに巻き込んでやるべきだと思うがどうだろうか。

(鶴見大学助教授)

英語教育関係者必読の書

# 英語の測定と評価

Testing English as a Second Language

ジョージタウン大学教授

D. P. ハリス著

ELEC 研修部次長

大友賢二訳注

A5判 上製 ¥950

本書は TOEFL の project director の経験を持つ D. P. Harris の *Testing English as a Second Language* を翻訳したもので、Robert Lado, John B. Carroll, Alan Davies などのさまざまな言語テスト観を見ごとに総合した、英語教育関係者の必読書であります。

## ●内容

第1章 言語テストの目的と方法／第2章 すぐれたテストの特性／第3章 文法構造のテスト／第4章 聴取識別理解のテスト／第5章 語いのテスト／第6章 読解のテスト／第7章 書くことのテスト／第8章 口答発表力のテスト／第9章 テストの作成／第10章 テストの実施／第11章 テスト結果の解釈と利用／第12章 基本的テスト統計の算出方法

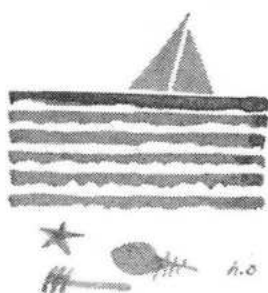
ELEC 出版部



# Indigenous Barriers to Communication\*

KUNIHIRO MASAO

*Professor of Cultural Anthropology,  
International College of Commerce and Economics*



IN RECENT years, relations between Japan and the United States have been considerably strained as latent trouble spots continue to rise to the surface. The reasons behind this are so wide-ranging and diverse, linked with multilateral as well as bilateral relations, that any immediate solution seems almost hopeless. In the quarter-century since World War II, the volume of personnel exchange between Japan and the United States has been large, in all fields and on every level, political, economic and cultural. Such busy coming and going has created the illusion that indeed real communication—that is, the ability of each nation to measure the effects of its actions on the other—does exist. We might recall how ill founded was the belief that understanding existed between Germany and the U. S. before the war. It is the quality, in the long run, not the quantity, of communication that is significant. Too much information or too frequent contact may even be counterproductive, as we shall see in this brief discussion of Japan's relations with the United States.

Why, in spite of all the many exchanges, has there been so much “discommunication” between Japan and America? This question should be approached not simply as an issue in bilateral relations but as a problem on the higher level of intercultural or cross-cultural communication between heterogeneous cultures.<sup>1</sup> In this world of annihilated distance, both the United States and Japan must continue to build increasingly close relations with

different cultures. Thus, to examine the points of friction between the U. S. and Japan is relevant to the relations of both nations with other countries and cultures, as well as with each other. For Japan, whose economy depends heavily on trade and materials from the outside world, this is clearly an urgent task. It is also true that strong friendship with Japan carries many benefits for the U. S.

An initial step in trying to put substance into our contacts is for Americans to understand Japan's unique internal patterns of communication. These patterns have been conditioned by a long history of racial, ethnic and linguistic homogeneity, and despite their unique provenance, they are often applied directly in external communication. This is particularly true in exchanges with the U. S., since that country is considered an ally, one of “the group.” In the foreseeable future, moreover, Japan is not likely to change either this attitude or the manner in which it communicates with the U. S. Like language and national character, patterns of communication have great durability. Therefore, provided there is no dramatic introduction of any wild variable in the areas of politics, economics or elsewhere, one imagines that no great change will occur in the constant of communication patterns. Understanding Japanese patterns of communication can provide an index for learning about the nonverbal assumptions behind verbal com-

1 By looking at the failure of communication between Japan and the U. S. as a case study involving heterogeneous cultures, I do not intend to imply that the communication gap is due entirely to cultural differences between the two countries.

\* Summary of a paper prepared for the Third Japanese-American Assembly, Shimoda, June 1972.

munication. In fact, one major reason for "discommunication" between Japan and the United States lies in the great dissimilarity between the two countries in importance and use of nonverbal communication and unarticulated attitudes.

In Japan, language, or communication through language, has not received the same emphasis as in the West. Rather than an expression of one's own will or thoughts, language has been a way of casually throwing the other guy a ball in order to get a reaction from him on which to base one's next action. It has been considered poor policy to use words as a tool to express one's views, to persuade the other fellow or to establish any depth of understanding. Language as an instrument of debate or argument is considered even more disagreeable and is accordingly avoided. Thus, in Japanese society, use of words becomes a sort of ritual, not often to be taken at face value.<sup>2</sup> It is only one possible means of communication, not *the* means of communication as is often the case among English speakers. This is plainly illustrated by comparing Japanese and Western drama. Generally speaking, it is practically impossible to comprehend Western plays without understanding the dialogue. In contrast, even in the highly stylized theatrical art forms of Japan, which are far removed from realism,

2 Take the case of a person saying, "I've already eaten," when he drops in at a friend's house at mealtime. If his friend takes him at his word, answers, "Oh, yeh?" and doesn't try to persuade him to have something anyway, he stands a good chance of being criticized later for being insensitive or unconcerned. One is supposed to make sure that he wasn't just being polite by saying something like "Ah, come on. Join us anyway" or "You're not just being polite, are you?"

The author of the recent bestseller *The Japanese and the Jews* repeatedly uses the expression *kaku mōsuwa rikutsu* ["words are just words"] in explaining the behavior of Japanese. And the language is rich in sayings such as, "Eyes speak as much as words" and "Far better than saying something is not saying it." An extreme of nonverbal communication is found in the expression *i-shin-den-shin* ["the heart is conveyed by the heart"].

it is possible to follow the plot without the words. Often the most inspiring parts of a drama are points where the dialogue does not quite fit in with the facts, such as when the little boy says to his lord in an admirable display of fortitude: "I haven't eaten, but I'm not hungry."

Contempt for language can also be seen in the attitude of even the most progressive Japanese companies toward contracts. It is still quite common to have unwritten contracts between large manufacturers and trading firms; often contracts seem to exist only for the purpose of specifying stipulations that are an exception to the rule. Often an escape clause such as "All other problems will be settled through consultation" is very useful in the end.

What are the reasons behind such distrust of language? Also, what goes into this Japanese "community of emotion" in which words are so sparingly used? Part of the explanation is the unparalleled homogeneity of this island country. There have been few, if any, nations in the world where a single ethnic group has lived for such a long time using the same language throughout its history. Furthermore, Japanese unity is a natural product of its special geographical and historical conditions; its independence as an ethnic entity or state, therefore, has been maintained by natural rather than political forces.<sup>3</sup> With such a degree of natural unity, understanding among the members of the society, too, is highly sensitive. They share common lifestyles, attitudes, superstructure and sub-

3 Kunio Yanagita, the father of Japanese folklore, presents a thesis which would seem to reinforce this explanation of Japan's natural unity: Old folklore, which can be considered the earliest expression of communication, has in Europe been buried in history and in large part destroyed; in contrast, in Japan it has been preserved right up to the present day.

On the subject of verbal communication, Yanagita tells us that in ancient Japan talking was viewed as "a lot of hot air" and therefore nothing more than a kind of amusement. In fact, talking in an interesting and funny manner was the job of a specialist, a "professional talker."

structure. These conditions make it possible for the same kind of communication that exists within a family to prevail throughout society as a whole. The familial structure of society is a result *and* a manifestation of Japan's natural historical unity. The danger must be recognized, however, that even this natural unity might disintegrate upon contact with entirely different cultures and peoples in the international area if there is not a serious, conscious effort to adapt. Both individually and in groups Japanese are adept at proximate communication, but they are handicapped when it comes to distal communication. For instance, two strangers sitting next to one another in the train (even if they are both Japanese) will exchange hardly any conversation and the atmosphere between them is cold and strained. When communication is with different racial and ethnic groups, with which there is no feeling of familiarity whatsoever, the unpleasantness is doubled.

A second reason for the Japanese contempt for language is the hierarchic structure of Japanese society, not entirely unrelated to the so-called family system. In this hierarchy the will of those further up the ladder is conveyed downward, but it is unpardonable for someone on a lower rung to give free and uninhibited expression to his opinions. In Japan the family-based principle of "vertical society," as Professor Nakane Chie has called it, creates the bond in human relations, exerting a frightful degree of compulsion on the individual. One can appreciate how strongly entrenched is the social norm that makes a taboo of speaking out of place by considering the experience of a Japanese businessman of high international repute: he commented to me personally that whenever he spoke his mind in the formal company of top Japanese business leaders, he was met with scolding criticism.

It seems incongruous that in modern Japan, the most highly industrialized society in Asia, the social fabric is held together vertically by

this family principle with an almost unbreakable tenacity in most areas of modern life. This social norm has encouraged the development of techniques of "reading the minds of one's superiors from their facial expressions" and "guessing what they are thinking." At the same time, a sense of hierarchy at home and the patterns of communication that go along with it have had a strong imprint on Japan's international dealings and on its view of foreign countries. Thus, Japanese understand international relations in terms of the same superior-subordinate relations, the same vertical relationships, and base their actions on this understanding.

Another explanation for the relatively low esteem placed on articulation of thoughts is related to child raising methods. The findings of a research project on childrearing being undertaken by a team of American and Japanese behavioral scientists, medical scientists and educators provide at least a partial explanation of the obvious differences between American and Japanese attitudes toward language, adeptness in its use and the degree of enthusiasm and trust afforded it. In the first place the American mother talks to her newborn child much more frequently and for longer periods. The Japanese mother has much more physical contact with her child—holding him, carrying him on her back and the like. Secondly, there is a marked difference in reactions to the child's efforts at vocalization. When the child cries, the American mother tries to discover the reason right away and to remove the problem, whereas the Japanese mother's reaction is slower and less often satisfactory to the child. This study shows that in some aspects American child raising is more conducive to the establishment of person-to-person relationships, that in Japan there is a tendency to view the child as a mere appendage of his mother, and that the American infant gains greater confidence in verbal activity.

A kind of reticence is also apparent in the

art forms of Japan. Japanese painting in its most extreme form often consists of only a few dots on the canvas, leaving the rest to the free imagination of the viewer. *Haiku* is a terse poetic genre consisting of only seventeen syllables. This form is symbolic of the premium placed on taciturnity in all forms of communication. Figuratively speaking, the speaker or the *haiku* poet has only to provide a few dots; filling in between them is not the responsibility of the speaker but rather a task left to the listener. While the speaker may be anxious about whether or not his message has gotten across, common experiences and attitudes give some assurance that not much discrepancy will arise. In addition, the task of "reading into" the dots affords the reader a certain creative joy.

Our language fosters the same kind of aesthetic vagueness that springs from sparing use of the medium. It is often difficult to ascertain what noun a particular adjective is supposed to modify.<sup>4</sup> In addition, there is no distinction between singular and plural for nouns, the comparative degree is seldom used and the number of relative expressions is very small. In traditional Japanese a single word—*kimo* [liver] or *harawata* [entrails]—stood for all of the human internal organs, and the word *kokoro* [heart] represented not only *chi* [wisdom], *jō* [emotion], and *i* [will], but also the series of concepts which are today differentiated through the use of terms coined for translation purposes such as *risei* [reason], *gosei* [wisdom, reason], and *seishin* [spirit]. Even highly educated Japanese naturally use the traditional terms in daily life instead of their more specific counterparts. Such words would probably not have served to explain

the theory of relativity or the principles of quantum mechanics or to discuss European logic. I should like to suggest, however, that the first step in improving U. S.-Japanese communication should be for Americans to discard the idea that this Western logic is *the* universal thought structure for all the 3.6 billion inhabitants of this globe.

The Japanese statement presents an interesting example. It typically falls into either one of the following types. The first type is a presentation of one item after the other in a highly anecdotal or episodic vein; conclusions are seldom articulated, or left unsaid. This, you may recall, is a "dot-type" presentation. The second type is observed largely in the statements made by people who may have been influenced by continental philosophers. These people tend to think deductively, presenting maxims and axioms as they are, often unaccompanied by actual data. Both these ways of presentation seem to irritate non-Japanese. To the first format, the typical reaction is "So what?" and the typical reaction to the second is "How, in concrete terms?" The American presentation typically begins with a series of concrete facts and data, and then the speaker tries to involve the audience in his search for principles or laws that may lie beneath as a means of drawing conclusions. This is a two-way kind of communication in which the audience is involved, and, I presume, it is what is called in English a process of abstraction. On the other hand, Japanese interpret the term "abstraction" to mean presenting the results of the process of abstraction in an *a priori* manner. It is not surprising therefore that non-Japanese are often irritated or discouraged at such a marked departure from what they regard as a logical presentation. If Japanese statements are considered shallow, without substance or are misconstrued as a conscious evasion of the issue, it is because the logic is so different. There is also a vast dissimilarity between what are supposedly lexicographical

<sup>4</sup> For example, *kuroi uma no kage* may read as either "the black horse's shadow" or "the horse's black shadow." Often the subject of a sentence is omitted as in the original of *The Tale of Genji*; for a Japanese with some proficiency in reading English, it is actually far easier to read Arthur Waley's English translation of this work since all the subjects omitted in the original are included.



equivalents. Take, for instance, the English word "fair" which represents the genius of the Anglo-American ethos. There is simply no Japanese word which is equivalent both in denotation and connotation. A concrete example of another problem—"Japanized" English words—may perhaps be found in President Nixon's statement made during his recent trip to China. He said: "China and the United States share many parallel interests and can do much together to enrich the lives of our peoples." In this particular case we can understand from the context that "parallel" means "with like direction or tendency" or "tending to the same result." However, the word "parallel," which by now is part of the Japanese vocabulary, seems to emphasize the impossibility of the convergence of the two lines, hence implying either opposition or confrontation.

Since natural scientists and engineers, especially in research and publications, use either Western languages or Japanese in such a way as to maintain standards of Western logic, we have developed a dual structure of communication—that employed by Japanese who are well acquainted with Western forms of logic and that used by other Japanese. To add complications, there is a dual structure in the use of the first person, one kind of logic dictating certain usages in communication with the outside world and another for communication with one's own groups. It follows, therefore, that if one confuses the logic used by a given person in communication with the outside world as being the logic dominating Japanese thinking patterns as a whole, the result will be not only a serious misinterpretation of Japan but also misunderstanding of that person's ordinary behavior.

A corollary to the Japanese attitude toward language might be called the "aesthetics of silence"—making a virtue of reticence and a vulgarity of verbalization or open expression of one's inner thoughts. This attitude can be traced to the Zen Buddhist idea that man is

capable of arriving at the highest level of contemplative being only when he makes no attempt at verbalization and discounts oral expression as the height of superficiality.<sup>5</sup> The aesthetics of silence does not necessarily indicate that the Japanese are not easily moved. The desire to depend on others is fortified by the assumption that the other fellow will understand without spelling out what passes between them, and it also involves sincere regard for his feelings. Ruth Benedict explains the discrepancy between the English word "sincerity," for example, and the Japanese word *makoto* or *seijitsu* roughly as the difference between the belief in the value of honest or frank expression of one's inner thoughts and the Japanese tendency to regard such openness as insincere. Thus the dictionary identification of the words "sincerity" and *seijitsu* has the rug pulled out from under it, and the bizarre parallel of "sincerity" and *fuseijitsu* [insincerity] becomes possible. The fact that words in the two languages which, according to the dictionary, ought to be equivalent are often even antonymous represents a larger, major problem point in U.S.—Japanese communication.

Expressing one's inner thoughts is restrained not only to avoid hurting feelings, but also because of the strong fear that by opening up one's heart with full candor one might become isolated from the group to which one belongs. In the homogeneous society of former times, with a large population and scarce resources, limited opportunity for employment and no possibility to flee abroad, such isolation could have been tantamount to committing suicide.

5 On the question of whether or not the Japanese have always thought this way, prehistoric Japan is quite commonly referred to as "the land where the soul of language flourished," and in the world of literature of the Heian period even men were easily moved to tears. However, in later years Japanese came to dislike verbalization and became extremely sparing in the expression of emotion, probably because of Confucian influence and strengthening of the hierarchic structure of Japanese society.

A heart-stirring episode is that of the mother of a celebrated commentator who gave her adult son the following advice: "No matter what you do, don't take the lead. When all the others stage a strike, you shouldn't be the only one who doesn't participate, for that could cost you your place in the group. But in any case the worst thing you could do is take the lead." To her, the most important thing was to pay as much attention as possible to the adjustment of human relations, to prevent quarreling with others in one's group and to avoid causing any kind of criticism from either superiors or subordinates. Much of a man's energy is expended in this way, with the resulting fall into a "psychological coma," as the ethnologist and writer Kida Minoru has called the adjustment to these pressures to conformity. For one factor in nonverbal communication is an almost abnormal concern about how one's words will affect the other person. An extreme form of this kind of guesswork can be seen in Maruyama Masao's example of what he calls the "system of irresponsibility" in his analysis of prisoners during the war. The soldier would surmise what the NCO wanted done, the NCO what the platoon leader wanted done, the platoon leader what the company commander wanted done, and so forth, the ring of responsibility growing wider and wider until in the end it was impossible to locate the person with "final" responsibility.

Perhaps, considering the present power positions of the United States and Japan, the Japanese have gone a bit further than necessary in conjecturing what the United States is thinking—in trying to keep track of its every humor—for the purpose of avoiding any action which might needlessly arouse American displeasure. This is a logical conclusion if one accepts the fact that even international relations have been seen as an extension of vertical relations at home. When this is coupled with a system of irresponsibility whereby one continually passes the buck

to his superior on up the hierarchic ladder, the other side alone is held to blame when there is a serious conflict of opinion and the danger that this will lead to exclusionism. Already the so-called Nixon shock seems to have touched off some antiforeign sentiment.

One qualification for status in Japanese society is a person's ability to read others' thoughts simply by their facial expressions. This criterion can be clearly appreciated by looking at idealized figures in Japan's history and legends. For instance, the reason why Ōishi Yoshio, the leader of the famous forty-seven *rōnin*, appeals to the Japanese is that he was a man of so few words that people called him a fool, which he certainly was not, as later became apparent. Today, those who consider their positions worthy of respect scorn verbal argument as silly, an indulgence for immature schoolboys. Such a person leaves verbal communication to his subordinates, muttering only a significant word or two at the appropriate time. And even before the word issues from his lips, his subordinates are prepared to intuit what he means by reading his facial expression. The heroes in Japanese movies and *kōdan* (narrative stories recited in a rhythmic chanting style) are always accompanied by people who do their arguing for them, these "assistants" often being loud, frivolous nobodies. Once again we find a dual structure of communication in drama and storytelling.

A similar arrangement exists in a very real way in modern Japanese companies as well. A company conference, for instance, is a ritual carried on behind the facade of an ordinary meeting held to air views on the question at hand; indeed, there may be a good deal of energetic discussion and argument. In actuality, the process of meeting has no bearing at all on decision-making. The chief might never utter a word, yet everyone knows the proposal he favors and the meeting will conclude with unanimous agreement on it. The entire procedure presupposes a rather cynical view of

the efficacy of argument or discussion which, after all, is only a human contrivance. Such an attitude might be called a "natural-law view" of things, discounting human invention. Discussion is all right in the parlor, but it doesn't have any place in the rest of the house. The Japanese attitude toward contracts can also be explained in these terms. The contract is just a lot of words; the reality exists somewhere apart from it. People who instinctively sense this are qualified to be leaders. Those who do not and persist in relying on pure reason find themselves in roles no higher than the buffoon or the stage manager.<sup>6</sup>

Japanese attitudes toward communication have thus been partially determined by certain elements in its culture and society. A recent case will illustrate how strongly our approach to contemporary political and economic problems is tempered by those attitudes and how far communication between Japan and America is in turn affected by them. Former Prime Minister Satō stated at a press conference before departing for the United States (at the time when the U.S.-Japan textile negotiations were bogged down): "Since Mr. Nixon and I are old friends, the negotiations will be three parts talk and seven parts *haragei* [reading each other's minds]." The words are difficult to translate into English, for the art of *haragei* is a communication technique peculiar to the Japanese. In a Japanese-English dictionary it is translated as "belly art; abdominal performance." The former sounds erotic and the

6 The reason why modern Japanese do not like argument for argument's sake—or people who engage in it, for that matter—might be because it conflicts with the traditional aesthetics of the culture. In a sense, Japanese were non-Aristotelian and often they sought a haven in aesthetic consciousness. The aesthetic measure of impurity, for example, was introduced even into such basic problems as life and death. This undoubtedly ties in with the tendency for Japanese to avoid real debate. *Mono no aware*, or pathos, is often cited as a characteristic of the Japanese mentality. I includes the emotions of love and sorrow and describes the emotion elicited by the image of falling cherry blossom petals or a tender infant.

latter like some kind of acrobatic stunt, and neither is what Satō meant. In this word there is a feeling of community of emotions—a desire to be given special consideration since the other fellow is supposed to be your friend, a member of your group. One can understand why Mr. Satō assumed that it would, naturally, be possible to communicate with Mr. Nixon with *haragei*, considering how close the relationship was between them. What probably happened is that Satō revealed his true inner feelings only after being thoroughly convinced that the United States was Japan's number-one ally, and that he, personally, was a close friend of Nixon. He was, no doubt, reassured in this feeling by the fact that he was a leading figure in both the government and the Liberal Democratic party, both of which placed high value on Japan's friendship with the United States, loyally giving priority to relations with that country.

Mr. Satō also felt that he had maintained an intimate personal relationship with Mr. Nixon. *Haragei* and *i-shin-den-shin* are communication patterns that are possible only among members of the same group where such friendship exists. Using Katū Shūichi's terms, Satō's problem lay in his attempt to apply the logic of "inner group communication" directly to "outer group communication." Figuratively speaking, Satō thought he could negotiate "without a contract" since both parties were supposed to be in the same inner group; to his great dismay Nixon later pulled out of the contract. This is one reason for the "Nixon shock." There have been other occasions when the government has not seen even the most obvious signs of new elements in the mood of Americans. A case in point is the failure to grasp the intensity of antiwar sentiment among American citizens until it became embarrassingly late—almost too late—to consider the effect of that sentiment on American life and politics, when thinking out Japanese foreign policy.

To the extent that Japan's social structure



determines its mode of external communication, there is little possibility that the latter will undergo any drastic change. Japanese leadership will continue to disparage articulate self-expression. Instead, they will retain experts in external communication to present their cases "logically," conforming to conscious norms. If the analyses offered by these "experts" are not always accurate, there may be misunderstanding on the other side of the ocean. There is the further risk that, since these experts are not necessarily involved with decision-making, their pronouncements and the subconscious norms which guide the behavior of Japanese leaders will have little or nothing in common. Expressions of conscious norms are a kind of ritual, and substance is frequently quite another matter.

The disparity between conscious and subconscious norms causes deeply felt irritation both among Japanese intellectuals, as well as foreigners attempting to communicate with them. While Japanese genuinely believe in the validity of conscious norms, they also find them too rigid and binding. Conscious norms after all, are nothing but "principles" and there is an urge to reject them even in the hearts of intellectuals; they will admit that their daily lives are governed not so much by conscious as by subconscious norms, which are endogenous and traditional.

A sense of impotence that is today growing among intellectuals may be related, at least in part, to the fact that Japan has rapidly become an economy-oriented or business-led society. A complex element in this situation is the fact that in Japan the modern and the traditional do not exist side-by-side but comeingle to the point of absorption of the former into the latter. Then, dialectics between the two stand no chance of evolving, tension vanishes and, faced with the clearly visible accomplishment of economic prosperity, it is easy for Japanese to passively accept the status quo. In fact, an increasing number of intellectuals collectively known as "realists" tend

to regard the absence of dialectics in Japanese society and the absorption of conscious norms into subconscious norms as the main force behind Japan's tremendous accomplishments and vigor. Allied with them are some American "Japan experts" who seem to give blanket approval to the status quo, as evidenced in the past debates on the process of modernization of Japan. There is reason to believe, then, that Japan's external communication may perhaps end up being either expressions of conscious norms, which stand very little chance of implementation, or a very clear display of the unchallenged supremacy of subconscious norms over conscious norms. Criticism of Japan as an "economic animal" may well indicate increasing awareness around the world of Japan's somewhat extravagant expressions of subconscious norms in the form of economic activity.

The tendency of the Japanese to regard international relations as an extension of hierarchic interpersonal relations at home is another durable characteristic. As already suggested, this has a direct bearing on U.S.-Japan relations. Japan will continue both to regard the United States as its superior on the totem pole and to "second-guess" U.S. intentions by playing the game of reading into the countenance of America. Likewise, Japanese leaders will continue to assume that the United States will understand their country through a "transference of thought," even when they do make their views explicit. This ability is, after all, one of the prerequisites to being a "superior."<sup>7</sup> Americans may regard this expectation by Japanese as oppressive; however, if the "big brother-little brother" syndrome derives from the structure of Japanese society (compounded by postwar relations between the

<sup>7</sup> In fact, I cannot avoid feeling the operation of this attitude within myself as I attempt to explain the peculiarities of Japanese society in hopes of a better American understanding. This paper represents a departure in that it is a modest attempt to verbalize what has remained in the category of the unsaid.



two countries), then it may be unrealistic to expect any radical change overnight. Indeed, should the U.S. choose to disregard Japan's expectations once and for all, the disappointment of the Japanese would be enormous and, in the absence of a sufficient cooling-off period, could touch off the desire to return to a dangerous exclusionism and chauvinism which once played havoc with Japan's external relations.<sup>8</sup>

### Some Concrete Proposals

In the final analysis, finding a solution to the communication gap boils down to whether or not the Japanese themselves can recognize the striking uniqueness of their patterns of communication, whether or not they are willing to go along with the majority rule in a diverse world, and whether or not they will strive, both individually and as a nation, toward the development of skills and attitudes conducive to self-expression. It also depends on American appreciation of Japanese patterns of communication. Though the problem is easily defined, practical remedies are difficult to formulate. However, certain actions by Japanese could improve the situation to a limited degree.

First, a need exists for the expansion and strengthening of of Japan's cultural exchange activity. Needless to say, this applies equally

to contacts with the United States and the rest of the world, and our neighbors in Southeast Asia in particular. Cultural exchange programs cannot compensate for the failure of an economic policy, nor should they become forerunners to a highly political, and military-oriented policy. Still, it is disheartening that total public expenditures for cultural exchange (in this case, by the Foreign Ministry) are far below those of the rest of the world, at an annual level of slightly over 800 million yen. The number of officials working in this area, a mere twenty-three (compared to Great Britain's four thousand, for example), is also inadequate.

One conceivable reason for such a low level of interest in this kind of activity on Japan's part is the psychological inhibition against "blowing one's own trumpet." The principles of Japanese exceptionalism may be at work here—that is, the attitude that things Japanese are beyond the ken of foreigners who do not share the "same blood." (In fact, it was only recently that some of us have stopped marveling at a non-Japanese enjoying *sashimi* [raw fish] or speaking a smattering of the Japanese language.) The low level of interest may also be ascribed to a kind of "Babbit" concept of culture as a luxury that should take a back seat to politics and economics.

Closely related to this first item is the problem of translation. Recent findings indicate that Japan ranks fifth in the world in translations of books into Japanese; in contrast, there has been a paucity of translations from Japanese into other languages (only seventy-seven titles in 1968).<sup>9</sup> This bespeaks attitudes that, as we have discussed, are at once behind the imbalance in Japan's status in international affairs. One explanation is our failure to

*(Continued to p. 39)*

<sup>8</sup> Some may sense a tone of blackmail in these statements and criticize Japan as being egocentric. Let me make it clear, however, that this is an observation in which I have tried to be objective. My personal conviction is that for one nation to be highly dependent on another is basically unwholesome. I also firmly believe that a return to the kind of chauvinism and nationalism we once experienced will jeopardize not only the relationship between our nations but also the peace and security of this part of the world. In this connection, it has been an unfortunate historical fact that the United States has been a major force in the evolution of the euphemistically called Japanese Self-Defense Forces, since their inception twenty-two years ago, have been the beneficiary of more than forty times increase in tax monies, while the growth of GNP in the same period was in the vicinity of twenty-three times.

<sup>9</sup> This is striking in light of the fact that every week sees the publication of some one hundred-fifty titles in Japan and that in 1963 translations from Japanese, accounting for only 0.2 percent of the total number of translations, were fewer in number than translations from Bengalese, for example.



# Modality について

NAKAJIMA FUMIO  
中 島 文 雄

(本誌上において、これまで「新英文法講座」と題して、英文法の諸問題を扱ってきたが、これを再考しつつ、もっと体系的に論じてみたい。「英文法の体系」と改題した次第である。)

私は Constituent structure rules を次のようにはじめる——

1.  $S \rightarrow \text{Mod } S_0$
2.  $S_0 \rightarrow \text{NP VP}$
3.  $\text{VP} \rightarrow (\text{Aux}) \text{MV (AdvP)}$

まず S を Mod (ality) と  $S_0$  (文核 sentence nucleus) とにわけると、普通に行なわれている

$S \rightarrow \text{NP Aux VP}$  という 3 分法よりも、 $S_0$  という構成素をみとめ、これに Mod が加わって実際の文ができるとした方が合理的と考えられるからである。上の規則につづいて MV が書きかえられ、いろいろの verb patterns が表わされるのであるが、それは後述ににして、Mod の書きかえ規則をさきにあげる。

4.  $\text{Mod} \rightarrow \begin{Bmatrix} \text{Tns} \\ \text{Md} \end{Bmatrix}$
5.  $\text{Tns} \rightarrow \begin{Bmatrix} \text{Pres} \\ \text{Past} \\ \text{Fut} \end{Bmatrix}$
6.  $\text{Md} \rightarrow \text{M}$
7.  $\text{Aux} \rightarrow (\text{have-en})(\text{be-ing})$

これらの規則は、普通に行なわれている

$\text{Aux} \rightarrow \text{Tns (M)} (\text{have-en}) (\text{be-ing})$

とは大分ちがう。われわれの Aux は 7. の規則にあるように、動詞の Aspect 表現にかぎられ、VP の構成素とされる。

4. の規則は Mod が Tns (Tense) と Md (Mood) のどちらかとして現われることを示している。Tns も意識の様相と考えられるので Mod である。そして Tns に Pres, Past のほかに Fut (ure) を認めたが、 $\text{Fut} \rightarrow \text{will}$  で、この will は M (Modal auxiliary) の will と区別する必要があるから Fut とするのである。

4. の規則で Tns と Md が対等の位置におかれたの

は、従来 Tns (M) では解釈できない場合が多いからである。Md は M で表わされるが、この M は次のようなものである——

$\text{M} \rightarrow \text{may, can, will, shall, must, ought to, might, could, would, should, need (not), let's, } \phi$  (ゼロの M も認められる)

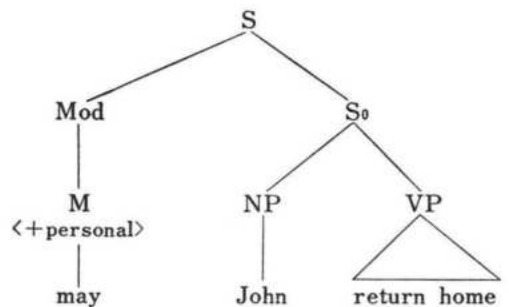
実例について上の規則を検討してみる。

(1) John may return home.

この文は permission と possibility と両方の意味にとれるので、あいまいである。パラフレーズすると、  
(permission) John is allowed to return home.  
(possibility) It may be [It is possible] that John will return home.

許可を意味する may は、人について話者の態度を表わし、可能性を意味する may は事について話者の判断を表わしているから、それぞれ  $\langle +\text{personal} \rangle$  と  $\langle -\text{personal} \rangle$  という特性をもつものとして区別できる。そこで(1)の文の深層構造は、次の 2 つになる。

第 1 図 (may : permission)

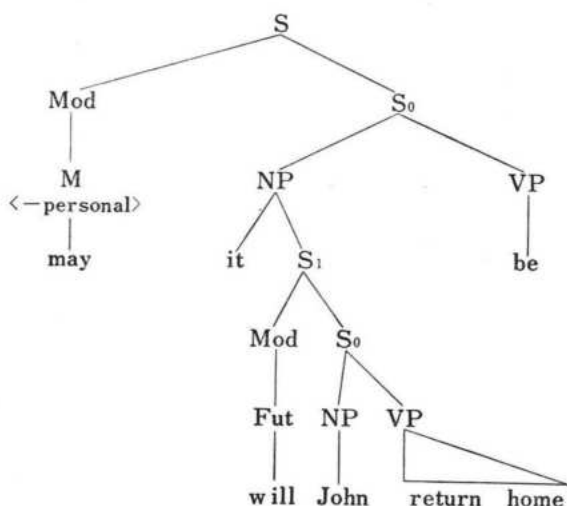


このような深層構造から、John が may の前に出る Subject transformation, return home が may のあとにつく Predicate transformation によって、許可を表わす John may return home ができたと解される。(私は Subject, Predicate を変形によってできたものと考え

る。後に述べるであろう。)

次に可能性を意味する *may* の場合は、次のような深層構造になる。

第2図 (*may*: possibility)



これが変形によって

*it* [that John will return home] *may be*  
となり、さらに埋めこみ文が外置されることによって、

*It may be that John will return home.*  
ができることは容易に理解されよう。問題はこれがどうして、

(1) John may return home.

になるかである。上の *It may be* は主文であるが、意味上よわめられて *maybe* という文副詞になり、*that*-clause が主文になって

*Maybe John will return home.*

になることはよく知られている。(1)はこれよりさらに圧縮された形であるが、私はここに *it be deletion* なる変形があると解釈したい。すなわち第2図の深層構造に *it be* の消去が行なわれると

*may* [Fut John return home]

となり、これに主語変形、述語変形が加わって

*John may Fut return home*

ができる。ここで *may Fut*→*may* となれば(1)になるのであるが、そういうためには他の Tns の場合も考えてみなければならない。

(2) John may return home tomorrow.

(3) John may be home today.

(4) John may have returned home yesterday.

これらの文は、それぞれ未来、現在、過去の事がらに関する可能性の判断を意味している。それを明示的に表わせば、

(5) It may be that John will return home tomorrow.

(6) It may be that John is home today.

(7) It may be that John returned home yesterday.

(5)の深層構造は第2図に示した通りである (*tomorrow*, *today*, *yesterday* のような時間規定の表現が、深層構造でどういう位置を占めるかは後で扱うことにする)。(6),(7)も同様で、ただ(5)の Fut が、(6) Pres, (7) Past となるだけである。そこに *it be deletion* という変形が適用されると、それぞれ

John may Fut return home tomorrow

John may Pres be home today

John may Past return home yesterday

となる。そして *may+Fut* と *may+Pres* は *may* に、*may+Past* は *may have-en* になって(2)(3)(4)ができたと言明される。さらに

(8) John may have returned home by now.

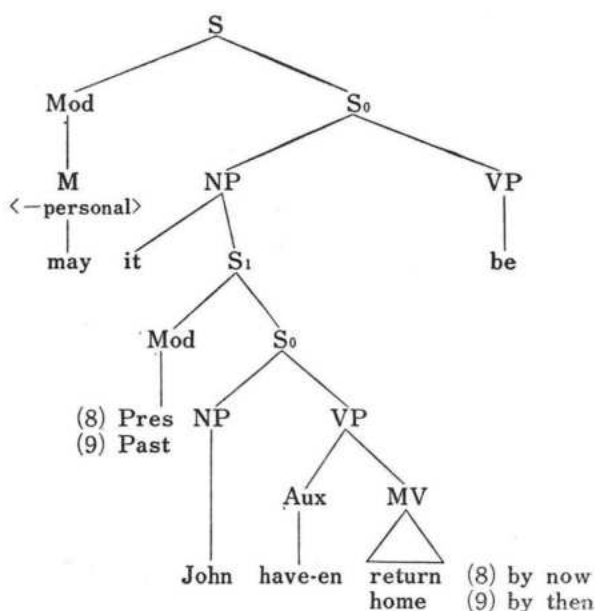
(9) John may have returned home by then.

を見ると、この表面構造の関するかぎり、(4)の Past の場合と同じである。しかし(8)(9)は、それぞれ

(10) It may be that John has returned home by now.

(11) It may be that John had returned home by then.

第3図



の意味で、(8)は現在完了、(9)は過去完了から派生したものである。(8)(9)の深層構造は Tns に Pres か Past かのちがいがあるだけで、第3図のようになる——

そして表面構造では、それぞれ

may+Pres have-en→may have-en

may+Past have-en→may have-en

と、どちらも *may have-en* になる。前者は上の *may+Pres→may* という規則を適用すれば Pres が消えて *may have-en* がえられるので、説明がつく。後者は上の *may+Past→may have-en* の規則を適用すると *may have-en have-en* となってしまう。そこでこの Past を消去する規則を立てなければならない。その条件は Past が *have-en* の前にくるときである。

以上の規則をまとめてみると次のようになる。これは *may* ばかりでなく、他の〈-personal〉な M にも通用する規則なので、*may* の代わりに M を用いることにする。

(12)  $M + \left\{ \begin{array}{l} \text{Fut} \\ \text{Pres} \end{array} \right\} \rightarrow M$

(13)  $M + \text{Past} \rightarrow M \text{ have-en}$

(14)  $\text{Past} \rightarrow \phi \text{ in env. } M\_ \text{have-en}$

規則(12)(13)によって3つの Tns と現在完了の場合は説明できる。過去完了の場合は M と *have-en* のあいだの Past はゼロになるという規則(14)によって説明される。

この規則は Modal auxiliary のあとばかりでなく、不定詞標識 *to* のあとでも gerund 標識 *Poss-ing* のあいだでも適用される。McCawley<sup>1)</sup> が指摘しているように、

John *arrived* at 2:00 yesterday. (Past)

John *has drunk* a gallon of beer by now. (Present Perfect)

John *had already met* Sue when he married Cynthia. (Past Perfect)

の3文が、*to-infinitive* に変形されると、いずれも *to have-en* になってしまう。すなわち、

John is believed *to have arrived* at 2:00 yesterday.

John is believed *to have drunk* a gallon of beer by now.

John is believed *to have already met* Sue when he married Cynthia.

Gerund にすれば、

John's *having arrived* at 2:00 yesterday surprises

me.

John's *having drunk* a gallon of beer by now surprises me.

John's *having already met* Sue when he married Cynthia surprises me.

となり、Modal auxiliary のあとでも同様に次のようになることは、われわれのすでに見た通りである——

John *may have arrived* at 2:00 yesterday.

John *may have drunk* a gallon of beer by now.

John *may have already met* Sue when he married Cynthia.

これらの場合、すなわち動詞が *to-infinitive* か gerund か、または M のあとという環境は、動詞が主語と一致する必要のない場合である。McCawley の規則では<sup>2)</sup>

$\left. \begin{array}{l} \text{Pres} \rightarrow \phi \\ \text{Past} \rightarrow \text{have} \end{array} \right\} \text{ if agreement has not applied}$

*have*<sub>AUX</sub>→ $\phi$  in env. *have*\_\_\_\_\_

となっているが、われわれの(12)(13)(14)の規則と本質的には同じである。

以上は M が〈-personal〉の特性をもつ場合であった。このときは判断の対象に現在、未来、過去のことがあるが、ところが M が〈+personal〉である場合そこに意味される事からは現在か未来のことであって、過去ということはない。たとえば

(1) John *may return* home.

の *may* が〈+personal〉すなわち許可を意味する場合には、

(15) John *may return* home today.

(16) John *may return* home tomorrow.

は可能であるが、過去にすることはできない。

同様に *must* をとってみると、

(17) 〈+personal〉John *must come* immediately.

(18) 〈-personal〉John *must be* sick.

〈+personal〉の *must* は obligation や compulsion を意味し、〈-personal〉の *must* は logical certainty を意味する。(18)は It *must be* (the case) that John is sick. ともなるし、また

(19) John *must have been* sick.

と過去のことについても言うことができるが、(17)の場合は It *must be* に言いかえることも過去にすることもできない。過去のことを言おうとすれば、

(20) John *had to come* immediately.

のようにしなければならない。ただし、*must* のあとに完了不定詞がくれば、いつも(19)のように〈-personal〉の

1) James D. McCawley: "Tense and Time Reference in English", *Studies in Linguistic Semantics*, ed. Fillmore and Langendoen (1971).

2) *Op. cit.*, p. 101.



意味になるとはかぎらない。

(21) In order to use a word properly, one must have acquired the underlying concepts.<sup>3)</sup>

(22) You must have completed the work by next April.<sup>3)</sup>

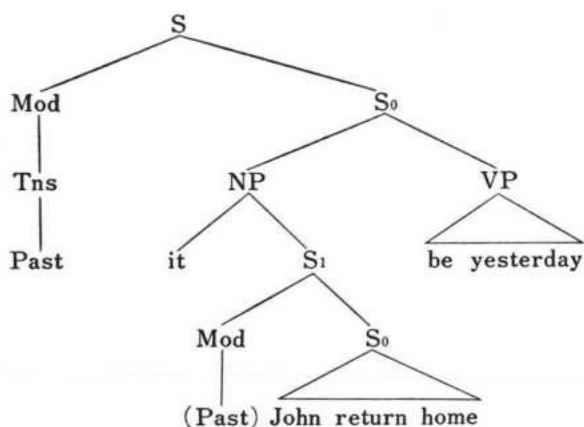
は外見上(21)と同じであるが、この *must* は〈+personal〉の意味である。しかし、あとの完了不定詞は過去のことではなく、現在完了から派生しているのであるから、〈+personal〉の *must* のあとに起こりうるので、例外ではない。

さてここで〈+personal〉の M を含む文の Tns を問題にしなければならない。(1)の文の構造を第1図で示したが、ここには Tns は出てこなかった。しかしここには Tns が含蓄されているので、Tns がないわけではない。(25)(26)には *today* または *tomorrow* という時間規定が明示されている。この場合には、これらの表現が深層構造において、どういう位置を占めるか考えなければならない。私は時間規定は(それから場所規定も)事がら全体についての規定であって、VP だけの規定ではないと思う。すなわちわれわれの規則の 3. VP→(Aux) MV (AdvP) の Adverbial Phrase ではない。それでは、時間規定はどこに位置するか。M を含まない文を例にとって考えてみると、

(23) John returned home yesterday.

の *yesterday* は *John returned home* という過去の出来事について、それが昨日であったと言っているのである。

第4図

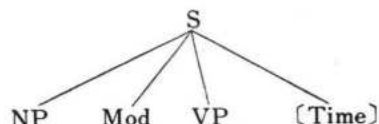


3) 太田 朗「法助動詞の意味と文法」(英語青年1970—8)より。

その構造は第4図のようなものであろう——

これは *it Past be yesterday* [John (Past) return home] という構造であるが、ここに *it be* deletion 変形が義務的に適用され、かつ S<sub>1</sub> の Past は主文の Tns を写したものと看做する copying rule を認めれば、(23)の文ができる。表面的には

第5図



というような構造になる。この [Time] のところには [Place] もおこる。(その他、条件・譲歩・理由などを表わす従文も、ここに来ると思うが、別に論じることにする。)

(24) John is coming home today.

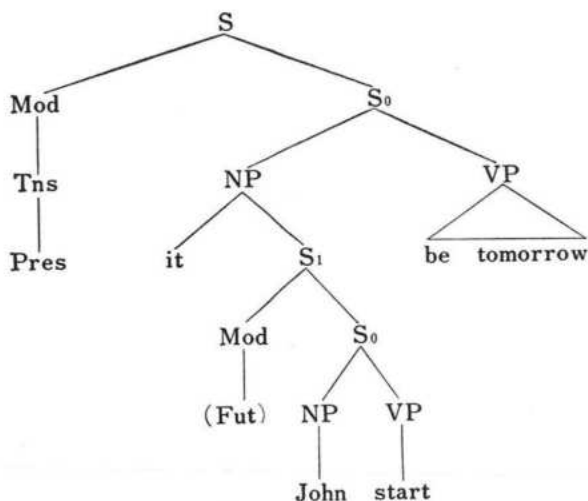
(25) John will return home tomorrow.

(24)は第4図の Past 代りに Pres を、(25)は Fut→will をおけば説明される。

(26) John starts tomorrow.

は現在か未来か。これは出発するという行為は未来であるが、明日にきまっているので現在形を用いているのであるから、その構造は

第6図



ここでは主文の Tns が Pres で S<sub>1</sub> の Tns が本来は Fut なのであるが、主文の Pres がここに copy され、そこで starts となったと説明される。

時間規定や場所規定をこのように解することは Lakoff<sup>4)</sup> にも見られる。彼によると、

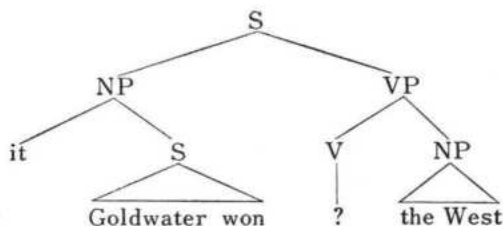
Goldwater won in the West, but it didn't  
happen in the East.

において、*it* は *Goldwater won* というところだけを受けているので *in the West* は含まれない。従って場所の副詞は、出来事そのものを “modify” しているので、*won in the West* を VP と見ることはできない。同様に

Goldwater won in 1964, but it won't  
happen in 1968.

における時間の副詞もそうである。これも *Goldwater won* という文を “modify” しているので、その外にあると見なければならない。そこで Lakoff は第7図のような構造を考える――

第7図



この図で V を ? としたのは “took place” とか “was located in” のようなもので、まだわからない規則によって消去されたものとしている。私は先に述べたように、この VP を *be in the West* とし *it be* deletion が義務的に適用されるとしておく。

以上のことを知った上で (15)(16) の Tns を考えると、ともに Pres の意識で言われていると考えられる。(16)には *tomorrow* という未来の時間規定があるが、これを現在の Tns で考えていることは (15) の場合と同じである。そこで (15)(16) の構造は、第8図のようになる。

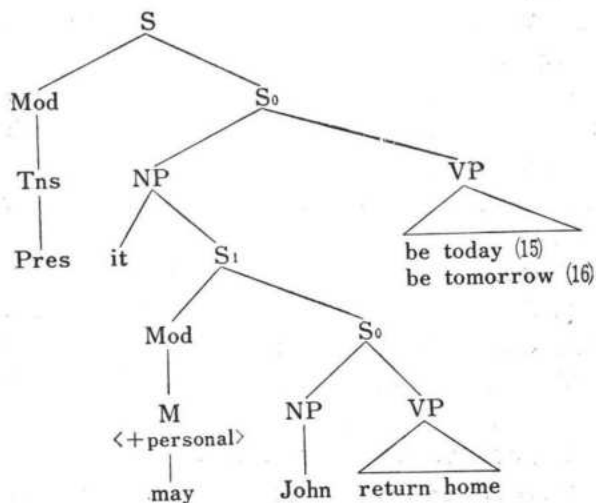
例によって *it be* deletion が義務的に行なわれ、それから Pres+may→may となって、現在の許可という意味になる。

こう見てくると、

(1) John may return home.

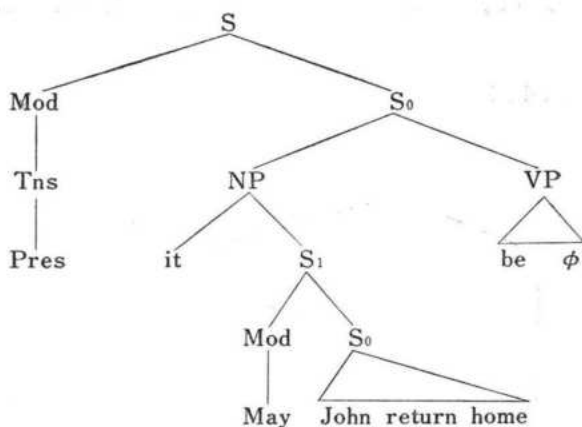
の構造を表わした第1図には、Tns が表わされていないということになる。第8図とくらべると、第1図の S は S<sub>1</sub> に相当するものであることがわかる。(1)には時間規定

第8図



が明示されていないので、一応第1図のように表わせざるを得ないのであるが、ここにも時間意識が含蓄されていることは言うまでもない。それを表わそうとすれば、第1図を次のように拡大しなければならない。

第9図



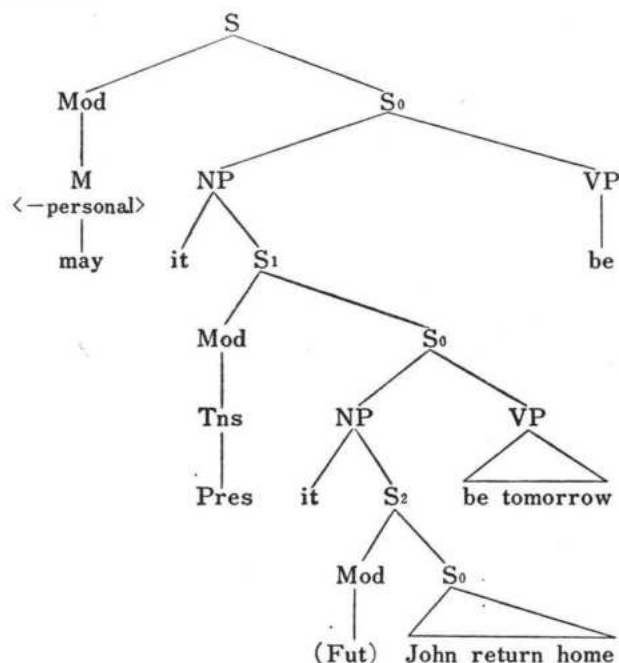
すなわち時間を明示しない [be  $\phi$ ] のような VP が含蓄されていると解釈するのである。

第1図が第9図のように訂正できるとすると、<-personal> の *may* をもつ

(2) John may return home tomorrow.

の構造を示す第2図も第10図のように訂正される。すなわち、

4) George Lakoff: "Pronominalization, Negation, and the Analysis of Adverbs, *Readings in English Transformational Grammar*, ed. Jacobs and Rosenbaum (1970).



たいへん複雑になるけれども, *it be deletion* を2度行ない, Mod を重ねれば容易に(2)の文ができる。そして  $S_2$  の Fut は  $S_1$  の Pres を写して Pres になる(第6図と同じ)とすると, われわれの規則(12)は

(12)  $M + Pres \rightarrow M$

ですむことになる。

すでに述べたように, <+personal> の M が用いられるのは, 主文の Tns が Pres のときである。ただこれには ability を意味する <+personal> の *can* が例外をなす。Past+*can* が *could* として ability を意味することがあるからである。(場所や時間を表わす副詞句については考えるべきことが多いが別の機会にゆずる。第3図の *by now*, *by then* は AdvP で VP に支配されるものと解される。) (次号につづく)

(津田塾大学教授)

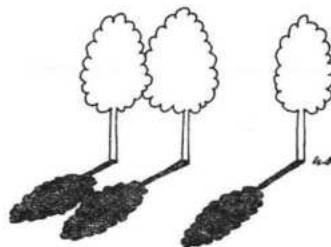
(Continued from p. 33)

regard foreign languages as a means of self-expression; on the contrary, Japanese have long regarded the acquisition of foreign languages as a tool for absorbing the fruits of foreign civilization. Insofar as the goal of the nation has been to "catch up" with the rest of the world, this passive orientation toward

foreign language learning has been inevitable. Another reason may be that, while we are extremely tolerant of the often mediocre Japanese found in translated works, Americans and Britons tend to be intolerant of such English, often called "translationese," which is often an inevitable concomitant of translated works, especially from such a difficult language as Japanese.

A second proposal would involve education. One indication of the parochialism of attitudes toward education in Japan is the fact that nationally-supported universities cannot hire foreign nationals as permanent teachers or members of a research staff. A permanent faculty member of a national university is a civil servant, and a foreign national cannot, by definition, be so appointed. If students, in their intellectually formative years, were in constant contact with foreign cultures, either through their professors or colleagues, they would develop wider and more varied patterns of thinking. They would also experience first-hand the confrontation between different ideas in lieu of simply reaching easy compromise between what are basically homogeneous elements in Japanese patterns. A cross-examination of ideas would transpire and the expansion of intellectual vistas beyond our national boundaries would become a reality. Bearing in mind the rapidly shrinking distance and time between countries, the world in which these young people will spend the greater part of their lives will undoubtedly demand coexistence with heterogeneous groups, not only for their own survival but for the survival of the planet itself.

(Reprinted from *The Japan Interpreter*)



# Mother Goose の世界

——雑感的序説（その12）——



HIRANO KEIICHI

平野 敬 一

## 伝承の「正しさ」について

伝承童謡にしる、伝承バラッドにしる、はたまた民話にしる、およそ伝承されてきた匿名作品には、欽定版 (authorized version) とか決定版とかいうものは、この本質上、存在しえない。過去の文献にたまたまどういう形で記録されていたかというようなことは、文献調査や研究が進むにつれて明らかになってくるのは当然であるが、ある作品がその初出文献でどういう姿を呈しているかということ、あるいは文献に記録されているかどうかということすら、実際に伝承されている当の伝承にとっては、多くの場合、偶然的な、いってみればマージナルなことがらにすぎない。口承（これが伝承のもっとも本来的なありかた）の形がたまたま記録されている場合にしても、流布していたさまざまな別形 (versions) が併せ記録されることは、まず、ないといっていい。十八世紀以来、イギリスの伝承童謡集は、何度も編さんされてきたが、さまざまな別形をことごとく列挙する *variorum* (別形併載) 版をつくることは、実際問題として不可能なことであった。十八世紀のニューベリーにしる、十九世紀のハリウェルにしる、ある童謡のある形をあげる場合、おそらく流布していたいろいろの別形の中から、ある選択を行なった（と同時に多くの別形を斬り捨てた）に違いないのである。したがって、できあがった童謡集が、伝承のありのままの姿を反映することは、はじめから望みえないことなのである。現在では、こと伝承童謡に関しては、オービー夫妻の *Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (1951) が、いくぶんか *variorum* 版を指向した形になっているが、それとて拠りどころにしている古い童謡集がすでにこのように限定された性格をもっている以上、それは「伝承」そのものでなく「文献」の *variorum* にすぎないという批判を免れえない。(F.C. Child 教授が伝承バラッドの分野であげた偉大な業績 *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols. について似たような批判を呈することができよう。)

したがって、たとえばオービーの *Dictionary* にあがっている形をもとにして、現に流布している童謡のある version を「正しい」とか「正しくない」とか云々しても、それはあまり意味のないことといわざるをえない。この「雑感」で、わたくしは Opie version を使うことが多かったが、それは便宜上そうしているにすぎないのであって、オービーのものを決定版と考えているわけではけっしてない。

## “The” か “a” かという問題

数年まえ、マザー・グースについてのわたくしの発言権がまだ公認(?) されていなかったころ、わたくしは、どういうコンテクストだったか忘れたが、ある文章のなかで “Little Jack Horner/Sat in the corner/Eating a Christmas pie” という童謡の出だしを引用したことがある。わたくしは、この唄をそういうふうにおぼえているので、おぼえているままの形をあげたままで、さまざまな童謡集や研究書を照合するという「学問的」手順をふんだ上での引用では、もちろんなかった。口からでまかせというと言いすぎだが、まあ、気軽な引用だった。ところが、さっそく尊敬する先学の N 氏から私信の形で、これは “Little Jack Horner/Sat in a corner...” が正しい形であろう。引用には細心であってほしいという注意がきた。そういわれてみると、わたくしのほうに確たる根拠があるわけなし、あらためて文献にあたって調べてみないわけにいかなくなった。(これがマザー・グースの文献調査をわたくしが多少本格的にやりはじめるきっかけとなった。)

調べた結果わかったのは、Jack Horner の唄の初出文献が *Namby Pamby* (1725) というバラッドであり、そのなかに “Jacky Horner/Sitting in the Chimney-corner/Eating of a Christmas-Pie...” という形で出てくるということだった。オービーなどの研究によっても、いまのところ、これより古い文献例はないらしい。古いほど “original” に忠実であるはずというふうにいちおう仮定



するなら（この仮定にももちろん問題はあつた）、わたくしがまえに引用した “sat in the corner” と定冠詞を使う形のほうが不定冠詞の形より「正しい」ということになるであろう。オービー自身も *Dictionary* の本文には “in the corner” の形を採用しているのである。わたくしは自分があげた形の文献的根拠を N 氏にお知らせしてその諒解をもとめた。

これでいさうこの論争にもならぬ論争に決着がついた形になったが、そのときわたくしにはひとつの問題が残った。つまり、わたくしが “sit in the corner,” N 氏が “sit in a corner” というふうに、それぞれ幼少時代から記憶している場合、たとえばオービーなどの「権威」を根拠に、一方を正、一方を誤としていいものかどうか、という問題なのである。結論からさきにいうなら、本稿の冒頭でも述べたように、伝承童謡にはほんらい authorized version がありえないのであって、古い文献がどうなつていようと、それが「正しい」形ということにはならないのである。（いまなおアメリカの Appalachian 山中で伝承されているバラッドにとって、十九世紀末に Child 教授があげた形が authorized version になりえないのと事情は同じだと思う。）

N 氏も、オービー夫妻が引き合いに出されたからといって自分の記憶している形を「修正」したりしないだろうし、わたくしはそれでいいのだと思う。人びと（厳密に言えばその伝承文化の中に生きる人びと）が記憶している形が、おたがいに食い違つても、それぞれ同等に「正しい」伝承の姿なのである。たとえ聞き違いや錯覚にもとづく別形があつても、それも伝承としては「正しい」のである。これは極論のようにきこえるかもしれないが、伝承文化の本質を考えると、どうもそういう結論に到達せざるをえないように思われる。

もう一度 Jack Horner の唄へもどろう。この唄の出だしは、オービーの *Dictionary* にしたがえば、次のようになっている。

Little Jack Horner  
Sat in the corner  
Eating a Christmas pie

（イタリックスは筆者）。これがわたくしの記憶している形とたまたま一致していたことは、前述の通りだが、試みにわたくしの手もとにあるいくつかの代表的なマザー・グース童謡本と比べてみたら、たちまち次の 4 つの形にぶつかった。別形というほどの大きな差異とはいえないが、それぞれどこか違つたのである。列記してみる（イタ

リックスはいずれも筆者）。

- (a) Little Jack Horner,  
Sat in a corner,  
Eating a Christmas pie
- (b) Little Jack Horner  
Sat in the corner  
Eating of Christmas pie
- (c) Little Jack Horner  
Sat in a corner  
Eating his Christmas pie
- (d) Little Jack Horner  
Sat in the corner  
Eating his Christmas pie

出典をあげるなら (a) *Mother Goose Nursery Rhymes*, illustrated by Arthur Rackham (London, Heinemann, 1913); (b) *The Real Mother Goose*, illustrated by Blanche Fisher Wright (London, Collins, 1916); (c) *Nursery Rhymes*, collected & illustrated by A. H. Watson (London, Dent, 1958); (d) *Mother Goose, Pictures* by Gyo Fujikawa (London, Collins, 1958) ということになる。いずれも定評のある信頼できるマザー・グース本の現行版（すべて入手可能）であるが、細部においてこのようにまちまちなのである。ここでまたまイギリス版ばかりになったが、アメリカ版どうしてももちろん食い違いはある。こういうふうさまざまの形があるのは、わたくしにいわせると、Jack Horner の唄が実際にいまも歌われ、伝承として生きているからなのである。伝承されているかぎり、さまざまの別形異形があるほうが、むしろ自然なのである。

それはともかく、英語国の人なら、たいがい自分が幼時親しんだ童謡本に合わせて、あるいは母親から教えてもらったとおりに、あるいは、 “sat in the corner”, あるいは “sat in a corner” というふうにおぼえこんでしまうのである。かりにオービーの *Dictionary* に出てくる形を欽定版と考えるなら、(a), (b), (c), (d) すべて少しづつ誤っているということになるかもしれない。しかし、もちろんそういう権威主義は、伝承童謡の世界では通用しない。要するに、伝承としては、Opie version も (a), (b), (c), (d) もすべて「正しい」のである。しかも、同等に「正しい」というより他ないのである。

定冠詞か不定冠詞かというのは些細な取るにたらない問題かもしれない。しかし幼時の記憶というのは、案外根強いもので、一度 “the” か “a” かのいずれかでおぼ

えてしまうと、それと違った形にぶつかった場合、かすかな異和感をおぼえるものである。なんとなく耳ざわりなのである。そして自分のおぼえ親しんだ形のほうが「正しい」、あるいは少なくとも better だと主張したくなるのである。

### “A Farmyard Song” の場合

じつは、こういう幼時の記憶の強さをわたくし自身経験したことがある。何年前か、わたくしはケンタッキーの伝承歌手 Jean Ritchie 吹き込みの *Children's Songs and Games from the Southern Mountain* (Folkways 7054) というレコードを手に入れ、聴いていたところ、“Fiddle-I-Fee” という曲にぶつかり、はっと胸をつかれる思いをしたことがある。歌詞をここに紹介してみると

I had a cat and the cat pleased me,  
And I fed my cat under yonders tree.  
The cat goes fiddle-I-fee.

(わたしはネコを飼っていた。そのネコはわたしの  
お気に入り。わたしはネコに向こうの木の下で食事  
を与えた。ネコはフィドル、アイ、フィーと鳴く。)

というのが第1節。第2節ではメンドリ、第3節ではアヒルがそれぞれ特有の鳴き声をたずさえて加わり、唄が進むにつれて、動物の数が増え、歌節がいよいよ長くなるという趣向になっている。つまり ‘This is the house that Jack built’ の流れを汲む積みかさね唄 (accumulative song) なのである。

わたくしは、たしか何十年まえ、カナダの小学校でこの唄を習った記憶がある。もちろん動物の登場順序や、歌詞の細部は、すっかり忘れてしまったが、初対面の唄でないことは、たしかである。わたくしは Jean Ritchie の澄明な歌声にじっと耳を傾けながら、記憶の底から長年眠っていたものが呼び起こされるときの名状しがたいよろこびに身をひたした。奇縁というべきか奇遇というべきか、わたくしは繰り返し繰り返しこの唄を聴きながら、この唄の素姓を調べなければならなかったと思った。

話が横へそれるが、さいきん大岡昇平が書きはじめた自伝(「少年」, 文芸展望所載)のなかで「現在の私には過去の経験を意識の領域に繰り込む作業に対する飢えのようなものが続いている」と述懐するところがあるが、数年まえ “Fiddle-I-Fee” の唄を耳にしたとき、大岡氏ほどはっきり自覚した形ではなかったが、やはり過去の無意識化してしまった「経験」をあらためて現在の自分

の「意識」の領域のなかに繰り込みたいという願望がわたくしのなかに強く疼(ず)いた。人間の自己確認というのは、おそらくそういう作業を通してしか成立しえないのではないか。わたくしは、この経験を、一刻もはやく意識化したかった。

わたくしはさっそく文献にあたって調べてみた。ところが、この唄はアメリカの山間部やカナダに広く流布しているはずなのに、その素姓が意外にはっきりしないのである。こういう場合いちばん拠りどころになるはずのオービーの *Dictionary* がこの唄を採録していないので、初出文献その他について、手がかりもつかめない。しかしオービーの *The Oxford Book of Nursery Rhymes* (1955) に、幸いにしてこの唄が “A Farmyard Song” という題名ではいつていた(同書 p. 182)。Opie version は Jean Ritchie のと酷似しているが、参考までにはじめの2歌節をあげてみる。

I had a cat and the cat pleased me,  
I fed my cat by yonder tree;  
Cat goes fiddle-i-fee.

I had a hen and the hen pleased me,  
I fed my hen by yonder tree;  
Hen goes chimmy-chuck, chimmy-chuck,  
Cat goes fiddle-i-fee.

登場する動物は、ほかに duck, gooses, sheep, pig, cow, horse など計9匹。動物の擬声音の表わしかたに Ritchie の唄と若干違うところがあるが、まずまず同一ヴァージョンとみていい。

とにかく Ritchie の “Fiddle-I-Fee” (それに Opie の “A Farmyard Song”) は、わたくしには聞きおぼえがあるし、幼いころ習ったことがあるに違いないのだが、そのヴァージョンがそのままわたくしの過去の「経験」であったかとなると、なんとなく確信がもてなかった。詞句にどことなく引っかかるところ、釈然としないところ、があるのである。

ほかにアメリカのフォーク・ソングの長老 J.J. ナイルズがこの唄のいわば Niles version を吹き込んだレコード (Folkways FA-2373) があるので、それも聴いてみた。Niles version の歌詞は “I had a cat and the cat pleased me/And I fed that cat on yonders tree./Cat said ‘Chim Chat, Chim Chat’/I said ‘Fiddle I Fee’” ではじまり、ナイルズ一流の個性ゆたかな、くせの強い歌いかたで、それなりの魅力はあるのだが、わたくしの

「経験」とははっきり異質のものだった。

さらに Richard Chase がアメリカの North Carolina で採集したヴァージョンに

I had a little cat, the cat loved me,  
I fed my cat under yonder tree.  
Cat went fiddle-i-fee!

というのがある (*American Folk Tales and Songs* [1956] 所載)。これはいままでのなかでは、いちばんわたくしの「経験」に近いように思えたが、やはり自信がもてなかった。

とにかく Ritchie, Opie, Niles, Chase とどのヴァージョンにも “fiddle-i-fee” という妙な擬声音(?) がでてくるのだが、幼いころこれを耳にしたという記憶がどうにもよみがえってこない。しかし、それよりわたくしが引かかるのは、第1行の “I had a cat and the cat pleased me” だった。文法的にはこれでいいはずなのだが、この行を口ずさむとき、わたくしはどうしても後半も a cat としたくなってくるのである。しかし人間の記憶の復元には限定があるらしく、わたくしは、なつかしい唄に何十年ぶりで会いながら、すっきり解決できず、釈然たらざる気持のままこの唄のことをしばらく放置していた。

ところが、近ごろになって、わたくしはマザー・グースについてあらためていろいろの文献にあたる必要がおり、ハリウェルが十九世紀中葉に編んだ *Popular Rhymes and Nursery Tales of England* [1849 (The Bodley Head, 1970)] をひもといていたら、偶然 “My Cock Lily-Cock” という題名の唄が採録されているのを発見した。登場する動物の数や順序は異なるが、上記の “Fiddle-I-Fee” の唄と歌詞の展開は同工異曲である。あきらかに同じ唄の別形なのである。ネコのところだけを引用してみると次のようになる。

I had a cat, and a cat loved me,  
And I fed my cat under a hollow tree.  
My cat went—miow, miow, miow.

これは、まぎれもなく、わたくしがかつて「経験」したヴァージョンなのである。声を出して朗読してみても、すこしも渋滞するところがない。しかも、うれしいことには、1行目の後半が学校文法では説明しえない不定冠詞になっているではないか。

ハリウェルによると、スウェーデンにもこの積みかさ

ね唄の類例があり、Chambers 編の *Popular Rhymes of Scotland* (1847) にこの “inferior version” があるという。わたくしのこの唄についての考証や詮索も、いまのところ、その段階でとまったままである。それに読者諸賢にとって、ハリウェルの掲げる version がわたくしの「経験」であろうとなかろうと、あまり興味のないことであろう。ひとつの唄にわたくしはかかわりすぎたのかもしれない。ただ、ここでわたくしが言いたかったのは、伝承童謡の詞句のなかの “the” や “a” といった些細なところが、その童謡をおぼえているか、あるいは意識の底のどこかに秘めている人にとって、思わぬ重要な意味をもつことがありうる、ということなのである。たとえオービーその他ほとんどすべての versions で “I had a cat and the cat pleased me” となっていたとしても、わたくしにとって「正しい」形は、あくまでハリウェルのあげる “I had a cat and a cat loved me” なのである。そしてこれは断じてゆずりえない、というたいへんえこじな頑固な気持ちにすなるのである。伝承と個人とのかわり合いの機微は、どうやらそういうところにあるような気がする。さきにわたくしが引用した “Little Jack Horner sat in the corner” にたいして “Little Jack Horner sat in a corner” を主張したN氏も、わたくしのようにもって回った言いかたこそしないが、おそらく同じような気持ちだったろうと思う。

### マザー・グースの根の深さ

マザー・グースの世界に分け入ることは、わたくしにとっては、ある意味で、自分の過去への遡及(さうき)であり、自己の identity の探究でもあった。この「雑感」で広く読者に話しかける形をとりながら、わたくしは大岡流にいうなら、自分個人の過去の経験を意識の領域に取り込む作業に従事していたのである。少なくとも、そういう面が大きかった。しかし、この作業が一個人の自己探究にとどまりえないことが、だんだん明らかになってきた。わたくしがマザー・グースについて書くようになってからかれこれ3年になるが、その間、わたくしは『マザー・グースの唄』という小冊子を世に問い、マザー・グースについて講義や講演をする機会をも何度か与えられた。そして、わたくしは、いろいろの場所で、以前まったく予期していなかったある反応に出会ったのである。マザー・グースは、わたくしにとってこそ自分の過去の思い出とまつわりつく「なつかしい」ものであるが、そういう結びつきが他の人にもありうるということ、を、わたくしは、うかつにも、そして不遜にも、思い及

ばなかったのである。ところが、わたくしのつたない著書を読んで下さった人たちがつたない話をきいて下さった人たちが寄せてくれる感想のなかに、「なつかしい」ということばがあまりにしばしば出てくるのに、はじめは目をみはるような思いがした。戦争前からのマザー・グースの愛読者で戦争中の疎開さわぎにも空襲下の防空壕暮らしにもマザー・グースの童謡集を手放さなかった思い出をわたくしに書いて下さった人もいるし、親子3代にわたってマザー・グースの「ジャックとジル」の唄が自分の家で歌い継がれたということを知らせて下さった方もいる。大正の末に出た松原至大訳の『マザグウス子供の唄』(このすぐれた訳業については別に紹介の機会をもちたい)を購入し、いまなお愛蔵し愛読している年配の方からも便りがあった。マザー・グースを英語国の伝承文化と限定して考えていたわたくしにとって、こういう反応は、文字通り“eye opener”だった。マザー・グースは日本の社会に深く根を下ろしており、すでに日本の文化の一部になっているのだということを、いまさらのようにわたくしは思い知らされたのである。もっとも戦前から日本でマザー・グースに親しんでいた人たちの社会層はあるていど限定されるかもしれない。たとえばミッション系の女学校で教育を受けた都会の中流以上の子女というのが、そのなかでかなり大きな比重を占めるのでないかと思われるが、そういう限られた中でも、その根の下ろしかたは、かいなでの外国文学のそれよりもはるかに深く、はるかに自然であるように思われる。

マザー・グースが実際にどういう形で日本の社会にはいったのか、その実態はわたくしにまだよくつかめていない。本稿でいままでしばしば言及した北原白秋や竹友藻風のほかに前述の松原至大や西条八十などすぐれた翻訳者の紹介の功績はもちろん大きい、そのほか女学校などでマザー・グースに原文のまま親しんだ人たちも意外に多いのである。大正時代、あるいは戦争前に、どのていど英米の絵本が日本に輸入されていたのか、いまのわたくしにはちょっと見当がつかないが、白秋にしたってアメリカ版の童謡本によってマザー・グースに開眼しているのである。輸入されたマザー・グースの絵本、白秋や藻風などによるすぐれた翻訳、それにおそらくミッション系の女学校教育——こういったものが日本の社会(の一部)にマザー・グースが根を下ろすのに与って力があっただろうといちおうは考えられる。しかし、このほかにも、いろいろの思わぬ経路を経てマザー・グースが日本にはいり読者に親しまれていた形跡がある。たとえば、マザー・グースの絵本を気軽に(あるいは安直に)

翻訳・翻案したマザー・グース絵本の日本語版もかなり古く出回っていたらしい。(こういう類のものは出版されてもおそらく記録にも残らないのだと思う。)

ある読者は、小学校へ上がるまえに自分の家で親しんでいたマザー・グースの絵本のことをわたくしに知らせてくれた。この読者は、わたくしより年上なので、その方が小学校へ上がるまえといえば、昭和初年ということになる。「布地の絵本で絵は西洋の漫画風、歌詞はカタカナ」だったことをおぼえているが、絵本そのものは紛失し、歌詞だけをいくつかいまなおおぼえているといっ何篇か記憶のなかから呼びさまし書き寄こして下さった。その1篇をここに紹介しよう。

バラの花は赤い  
スミレの花は青い  
お砂糖の味は甘い  
お花ちゃんはかわいい

というのである(原文はカタカナ)。もうお気づきの読者もおられると思うが、英語の原文は、

Roses are red,  
Violets are blue,  
Sugar is sweet,  
And so are you.

であり、ハリウェルの童謡集(1849)にも採録されており、オービーによれば十八世紀末から文献例があるれっきとした伝承童謡なのである。上述の訳は、わたくしの調べでは白秋や藻風といった名の通った訳者のものでなさそうだが、いかにもすなおな訳しぶり、特に第4行の「お花ちゃんは可愛い」はみごとなものである。昭和のはじめころ、限られた数の家庭だったかもしれないが、こういう絵本がすでに出回っており、幼児に親しまれていたことは、注目していいことであるように思われる。しかも当時この絵本に親しんだ幼い読者が、いまなおその歌詞を忘れずにいるのは、マザー・グースの唄そのもののもつふしぎな魅力のせいだというよりほかない。この魅力に一度とりつかれたことのある読者が、その後何十年と歳月をへだてて再びマザー・グースに相まみえ思わず「なつかしい」と嘆息をもらすのは、きわめて当然なことかもしれない。わたくしは、うかつにも、こういう当然の反応を予期していなかったのである。

英語国で育った人が自分の過去への遡及をこころみる  
(p.65 へつづく)





## 日・英慣用表現の比較 (5)

—日本文学英訳作品を資料として—

HASEGAWA

長谷川

KIYOSHI

潔

### I-M 腰・尻

「腰が重い(軽い)」、「腰が据わらない」など、日本語に「腰」に関する慣用句が多いのは、日本古来の武芸に由来しているようだ。柔道も剣道も腰がしっかり据わっていないと出来ない。

卑怯な奴を「腰抜け」というのも、武芸の下手な弱い武士をさしたのであろう。

一方、英語では loin, waist を使った慣用句はあまり見当らない。聖書の語句として、a fruit of my loins (自分の子供)、come out of (from) his loins (彼の子として生まれる) などがあるが、現代英語の表現として使われることはまれであろう。比較的一般的な口語表現としては、That woman **has no waist**. (よく太った女ぞな。) ぐらいのものが目につくぐらいである。

腰や尻の重い人のことを英語では、“He (She) is **slow to act**.”/“He (She) is a lazy bone.” のように言うが、『天声人語』に次のような表現があった。

〔例 203〕 Japan has **not been very enthusiastic** because of a lack of funds, but it has finally drawn up survey plans of its own.

(ふところ工合でシリの重かった日本もようやく計画決定の段取りとなった)

「腰(尻)の重い」と反対に、積極的にになにかに取り組むことを「本腰を入れる」とか、「腰を据えてかかる」などという。同じく『天声人語』から引用してみよう。

〔例 204〕 The Government **has begun to put in serious efforts to tackle** diplomatic problems.

(政府は外交問題に本腰を入れて取組みはじめた。)

和英辞書にある make a strenuous effort; go at it whole heartedly などとも類義の語句として使えるだろう。

「腰を入れて」いた仕事からはなれること、または興味をなくすことを「腰を浮かす」と言う。

〔例 205〕 I remember well enough how those two were during the war. “Let’s get the university out in

the country, let’s get the students organized for the war effort.” **Off they went and forgot all about** their studies.

(わしはあの二人が戦時中、やれ大学の疎開だとか、やれ学徒動員だとか、すっかり研究から腰を浮かしてしまったことを知っている。『比良のジャクナゲ』井上)

「腰を浮かす」という慣用句は和英辞書には記載されていないようだが、上述の Seidensticker の英語は、日本語を分析し意味をくみとったものでさすがに巧みである。

同じ「腰を浮かす」でも姿勢を表わす時には、上述の訳とは全ったく違うものになってしまう。

〔例 206〕 I was in such an unsettled frame of mind that I felt rather like a man who **was neither sitting down nor standing up**.

(私は坐った儘、腰を浮かした時の落付かない気分でした。『斜陽』太宰)

〔例 207〕 He got up with a little bow, and sprinted back to the car.

(小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻ってきた。『帰郷』大仏)

これは原文の日本語と英語との間に少しくいちがいがあろう。つまり、小腰をかがめたままの姿勢でちょこちょここと馳けもどった描写がうまく訳せていない感じがする。

「丸腰」という言い方も、武士が大小の刀を腰にはさんでいないという発想から、without carrying a sword; without one’s swords (『大和英』) という訳がなりたつが、現代文では次のように訳すほうがよい。

〔例 208〕 The soldiers had neither guns nor swords. **Weaponless**, they sat like coolies, with only their bundles piled beside them.

(気がついて見ると銃も剣も彼らは持ってゐなかった。丸腰で、苦力のように荷物だけを側に置いていた。『帰郷』大仏)

「腰を折る」は、現在では「人の話をさえぎる」、「話

が続かないようにする」の文脈でよく使われているが、もともとは和歌の第三句と四句がうまく続かない腰折れ歌から由来する表現であろう。英語では「火にかけるぬれた毛布」という発想から、話の腰を折ったり、熱意に水をさしたりすることを“throw a wet blanket over...”と言い、現代英語にもよく使われている。

「逃げ腰」は『大和英』に preparation for flight という訳語が記載されているが、どういう文脈の中で使うのであろうか。これなどむしろ be ready to run away とする方が文章の中では使いやすいだらう。

『大和英』には「逃げ腰になる」として take an evasive attitude という訳も与えられているが、これは比喩的な意味で使うことができる。同じような文脈で、次の例のように be on the defensive という表現のしかたもある。

〔例 209〕 The school authorities were on the defensive from the beginning.

(学校当局は最初から逃げ腰だった。『天声人語』)

「腰」に関する慣用句では、「腰のひくい人だ」とか、「ぎょっとして、腰をぬかした」などがあるが、意味をくみとって、“He is a very humble person.”/“She was scared to death.” のように訳すとよい。

「尻」に関する表現ですぐに頭に浮かぶのは、「尻の下に敷かれている」であらう。

〔例 210〕 Sometimes I would stay away for three and four nights running, and not once did I call up the house, as Hiroyuki is always doing, to say I wouldn't be home. Haruko has him under her thumb. He's too soft with her and he's too soft with the children. I don't like it at all.

(三日も四日も黙って家をあけたが、ついぞ一度も、弘之のように女房に電話で断わったことなどない。大体弘之は春子の尻に敷かれている。『比良のシャクナゲ』井上)

親指の下よりも尻の下の方が表現としてずっと感じがでている。英語に比べて、日本語の方が身体の名稱を使って表現する語句が多い。全般的にみて、日本語の方が比喩表現が巧みのように思えるがいかかであらう。

「彼は女房の尻に敷かれている」を表わすほかの英語表現としては、He is henpecked./His wife wears the pants./He is tied to his wife's apron strings などがあ

る。日本語でも「嬖天下」という成句がよく知られている。ちなみに、『大和英』には pettycoat government; gynecocracy という訳語が記載されている。前者は pet-

ticoat government の誤まり。それは別として、いずれの語句も現代英語の文脈の中でいったいどのように使ったらよいのだろうか。「あそこの家はかかあ天下だ」というようにただけた言い方を英語に訳す場合、His wife has him under her thumb. とする方が自然な英語であって、petticoat government とか gynecocracy のような大時代な表現は使いようがない。ところが現行の和英辞典のほとんどが研究社の『大和英』を見なっていて、petticoat government という訳語を記載しているのはなぜだろうか。

「尻」に関する慣用句としては、「尻込みする」とか「尻馬に乗る」などが比較的よく知られている。

〔例 211〕 Sasuke had felt sure that Shunkin would be offended if she learned of his practicing. She would think it presumptuous of him, a mere apprentice who ought to be contented fulfilling his duty as her guide. Whether she pitied or scorned him, he would be in for trouble. And he became all the more alarmed when he was told that she wished to hear him perform.

(佐助は此の事が春琴に知れたら定めし機嫌を損ずるであらう。唯与えられた手曳きの役をしていればいいのに丁稚の分際で生意気な真似をすると憫殺されるか嘲笑されるか、どちみち確なことはあるまいと恐れを抱いてただけに「聴いてやろう」と言われると却て尻込みをした。『春琴抄』谷崎)

「尻込みをする」は、『大和英』に flinch from; shrink from; back from などが記載されている。また「ためらう」の意味で hesitate; be hesitant などの語句もあり、いずれも現代の英語として使われている。上述の Hibbet 訳は、前後の文脈から意味をくみとったもので、原文の気持をよく伝えている。

「尻馬に乗る」は『大和英』の blindly follow a person でよいだらう。この表現を使って「人の尻馬などに乗るな」を英訳すれば、Don't follow anybody blindly と訳せる。

日本語には、尻、けつなど下がかった表現がまだまだ沢山あるが、省略して「足」の項に移ることにする。

## I-N: 足 (膝を含む)

日本語では足と脚の区別をあまりしないが、英語では、足首からさがき foot で、もののつけねから足首までが leg (脚) と、はっきり使いわけをする。日本語では「足が出る」、「足を奪われる」、「足元に火がつく」など「足」を使った成句が「脚」よりも断然多いが、英語

でも foot, leg に関するものが同じように沢山ある。

[例 212] People fear they will **be unable to go on** cherry blossom viewing trips because of the half-day strike planned on the Japan National Railway.

(あいにくそのころ国鉄の半日ストで足を奪われ、花見もままならぬのではないかと、気のもめることである。『天声人語』)

ここでは **unable to go** と自動詞表現に訳されているが、「交通手段を奪われる」と解釈して次のような受動態による訳し方もある。

[例 213] About five million commuters **were deprived of the means of transportation** because of the strike of National Railway workers.

(国鉄ストのため約 500 万人の通勤者の足が奪われしまった。『NHK ニュース』)

「足もと」、「おひざもと」なども直訳すれば、どの和英辞典にものっているように at one's feet; close to one's feet なのであるが、日本語の文脈の中で英訳すると、前後の関係によっていろいろ違う訳がでてきてしまう。

[例 213] When **one's own house is on fire**, one tends to get carried away by heated emotion instead of being governed by cold reason.

(とにかく自分の足元に火がつくと、カッとなって頭にくるらしい。『天声人語』)

[例 214] Yet the campus newspapers **right inside** the university are carrying so many help-wanted advertisements that they are even increasing the number of pages takes them all.

(が、おひざもとの大学新聞が“求人広告”まがいのものを増ページまでして、どしどしのせている始末だ。Ibid.)

それぞれ、原文の内容にしたがって訳しわけているが、これらの英文の中に at his feet とか close to its feet の語句は使えないだろう。和文英訳をする場合、和英辞典はなくてはならないものであるが、そこに出てくる英語の語句を必ずしもそっくりそのまま使えないところに問題があるように思える。

「足もと」に関連して「足もとにもおよばない」とか「足もとにつけこまれる」などの慣用句がある。「足もとにもおよばない」にあたる英語の成句は not hold a candle to ~ で次のように使える。

[例 215] **He can't even hold a candle to** his father.

(あの人は父親の足元にもおよばない。)  
もちろんかならずしも not hold a candle to ~ を使

わなければならないというわけではない。すでにたびたびのべているように、前後の脈絡にしたがって英訳すべきであることは言うまでもない。

[例 216] **I can't come near him** so far as speaking English is concerned [when it comes to speaking English].

(英会話では彼の足もとにも近よれない。)

この訳ならば、より日本語に近いわけだが、これを He speaks English much better than I do と言いかえたとしても、内容的にはそれほどかわらない。

「足もとにつけこむ」は「弱みにつけこむ」と解釈して take advantage of と訳することができる。

[例 217] He threatened to blackmail her, **taking advantage of** her past relation with him.

(男はその女と過去に関係があったということで、足もとにつけこみ女をゆすろうとした。)

「足」を使った成句で、日本語独特の発想から出たものに、「足かけ……年になる」という表現がある。『大和英』をはじめ多くの和英辞書では、~ calendar years という訳語をあげ、「東京にきて足かけ 5 年になる」の訳例として、This is my fifth year in Tokyo=My stay in Tokyo spreads (=extends) over five calendar years などをあげている。一般にはこういう言い方よりも、むしろ I have been living in Tokyo since the summer of 1968. のように年代で表わすか、I have been living in Tokyo nearly 5 years のような言いの方がよく使われている。

どういう発想からきたのか知らないが、日本語ではお金のことを「おあし」(御足) という。金が人々の間をではいりすることに由来するのかもしれない。予算を超過することを「足が出る」というが、松本享の『これを英語で何というか』に次のような用例がでていた。

[例 218] Every time I travel on business, I **lose out financially**.

(出張するといつも足が出してしまう。)

これなども意味は伝えているとは思いますが、financially というのがやや大げさな感じがするし、いつもこのような訳があてはまるとは限らない。適当な用例が見つからなかったので、筆者自身の書いたものを 2 つばかりあげてみよう。

[例 219] Because of the rising prices, we can **no longer make both ends meet**.

(最近の物価高では、家計費の足がでてしまう。)

この make both ends meet は、「ちょうじりをあわせる」の意味でよく使われている英語のイディオムだ

が、日本語の「足が出る」にがい当する表現としては、次にあげる not cover the expenses の方が、いろいろな文脈で使いやすいだろう。

[例 220] One thousand yen per person will **not cover the expenses** for the party.

(ひとり千円の会費じゃ足が出るね。)

やっていることから手を引くことを、日本語では「足を洗う」というが、これにあたる英語のイディオムは wash one's hands of ～ で、旺文社の『シニア和英辞典』にも He washed his hands of the business という例がのっている。手と足の違いはあるものの、ほとんど同一の発想からでていると考えてもよいだろう。

しかし、同じ表現であっても、文学作品の英訳ではまったく違った英訳がみられる。

[例 221] It so happened that an old high-school classmate, the editor of *Fellow Hunters*, asked me to write a poem—noting that even at my age **I was still writing poems** after my fashion for obscure poetry magazines.

(たまたま「猟友」という雑誌の編輯に当たっているのが、私の高等学校時代の級友で、いい年をして未だに詩の同人雑誌から足を洗えないで、自己流の詩を作っている私に、怖らくは、彼のほんのその場の気まぐれからと、それに久闊を叙すると言った程度の、儀礼的な意味をこめて、一篇の詩を依頼して来たまでのことである。

『猟銃』井上)

この英訳などうまい訳ではあるが、そのままほかの和文英訳に応用するわけにはいかない。

日本語の「足」は場所をあらわす成句に用いられることもある。

[例 222] I didn't buy the house because **the location is so bad from the viewpoint of transportation**.

(足場が悪いのでその家を買うのをひかえた。)

この「足場」には手がかりの意味もあり、「足場にして」とか「足がかりにして」は、ふつう get a foothold と訳されているのだが、『天声人語』の英訳には、curtain raiser という表現を上手に使っている。

[例 223] The satellite was **the curtain raiser** for a flight by an automatic interplanetary station to the planet Venus.

(そのような巨大衛星を宇宙の足場にして、自動惑星間ステーションを金星に向けて打ち上げたのだった。

『天声人語』)

この curtain raiser というのは芝居の開幕劇とか、長

い演劇の前に出す短かい狂言なのであるが、ここでは「足がかり」とか「足場」の意味に転用されている。

以上の用例でもおわかりのように、日・英語の表現がまったく同一の形になることはほとんどない。しかしごくまれに、日本語と英語がぴたりと一致するときもある。

[例 224] In stead of trying to achieve the flight from the earth to another planet **in one leap**, Russia opened the path to Venus by the spectacular feat of a two-stage leap from gigantic satellite.

(地球からいきなり一足飛びに他の惑星をねらわずに、巨大衛星から二段飛びの妙技で金星への道をひらくというわけだ。Ibid.)

「足」に関する慣用句をもうひとつあげてみよう。

[例 225] Moreover, in the waist of each vessel stood so many loach tubs full of pickled radishes that **there was almost no place left to step**.

(それからまた、胴の間には、沢庵漬を鰯桶へつめたのが、足のふみ所もないくらいならべてある。『虱』芥川)

#### I-O : 身体全体 (肌・骨などを含む)

「身」とか「肌」とか「骨」に関する慣用句が多いのも日本語・英語共通の特徴になっている。日本語の中で圧倒的に多いのは「身」がつく成句で、「身のほと知らず」とか、「身から出たさび」、「身を誤まる」、「身の毛がたつ」などがある。

[例 226] From the time I was a child I've owed everything to the Mozuya family—I **wouldn't dream of** behaving so ungratefully. It's really absurd.

(子飼いの時より一と方ならぬ大恩を受けながらそのような身の程知らずの不料簡は起しませぬ思いも寄らぬ濡れ衣でございます。『春琴抄』)

「身の程知らずの……」を “I wouldn't dream of…” としたのは文字通り日本人には思いもよらない Hibbet 博士による名訳だと思う。この慣用句は、日本的な主人と奉公人という対人関係を示すもので、いわゆる英語にならない日本的発想の表現である。『大和英』には「身の程」として one's social position; one's own place とあり、「身の程をわきまえずに」として with no regard for one's social standing; forgetting one's own place という訳が記載されている。いずれも正確な訳には違いないのだが、上述の文脈にあてはめて訳してみるとどうしても英語にならないのである。

同じく『春琴抄』のなかから「身に覚えがない」とい



う成句の訳をみてみよう。

〔例 227〕 When the two were forced to confront each other before her parents, she drew herself up stiffly and demanded: "Sasuke, what have you said to create suspicion? It's causing me a lot of trouble, and I wish you'd make it perfectly clear that **you're innocent.**"

(抱え所なく二人を対決させてみると春琴は屹となり佐助どん何ぞ疑ぐられるようなこというたんと違うかわてが迷惑するよってに身<sup>み</sup>に覚<sup>し</sup>え<sup>る</sup>の<sup>う</sup>い<sup>ふ</sup>こ<sup>と</sup>は<sup>な</sup>い<sup>と</sup>は<sup>き</sup>り<sup>り</sup>明<sup>り</sup>を<sup>し</sup>て<sup>て</sup>ほ<sup>し</sup>い。Ibid.)

「身の毛がよだつ」という成句は、寒かったり、恐れたり、いやらしかったりする時に使う知覚・感覚表現で、からだの毛が上に向って立つほどのぞっとするような思いをいう。古くからある慣用句で、謡曲集『鉄輪』の中にも、「雨降り風落ち、神鳴り稲妻、頻りに満ち満ち、ご幣もざざめき、鳴動して、身の毛よだって恐ろしや」とある。ここでは、森鷗外の名作『雁』からの英訳をみてみよう。

〔例 228〕 I was barely able to keep from starving because of the meagre dormitory and boardinghouse meals, yet there was one dish that **made my flesh creep.**

(僕は下宿屋や学校の寄宿舎の「まかなひ」にうえをしのいでいるうちに、身<sup>み</sup>の毛<sup>け</sup>のよ<sup>よ</sup>立<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>厭<sup>いと</sup>な<sup>な</sup>菜<sup>さい</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>た。『雁』森鷗外)

「身のおきどころなく」とか「身をまかせ」なども昔から現在に至るまでひき続き使われている。西鶴の『好色一代女』が引用してみよう。

〔例 229〕 **Life has no place** for us now, therefore today we depart forever from the Floating World.

(身<sup>み</sup>の<sup>お</sup>き<sup>き</sup>所<sup>しよ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>く、今日今日うき浮のわかれ、『好色一代女』)

身を Life と解釈して訳している。

〔例 230〕 A woman should **give herself** to only one man during her life time.

(女の一生にひとりの男に身をまかせ……)

江戸いろはがるたに出てくる「身から出たさび」も今だに慣用句として使われている。

〔例 231〕 It is bashing up the wrong tree to regard the invaders as kidnapped children. The U.S. is in a difficult position because the **chickens** of its miscalculation **are coming home to roost.**

(侵攻者を誘<sup>い</sup>か<sup>い</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>れた<sup>た</sup>子<sup>こ</sup>にたとえるのはお門違いだが、アメリカも計算ちがいの身<sup>み</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>た<sup>た</sup>さ<sup>さ</sup>びでつらい立

場でもある。『天声人語』)

日本語の「身から出たさび」を英語では Your chickens have come home to roost という。これは Curses, like chickens, come home to roost (のろいはのろいの主に帰る) という諺に由来している。このところで chickens を使った訳がさらに有効だと思われるのは、アメリカでは俗語として「誘かいされた子」のことを chickens と言うからでもある。

〔例 232〕 **I made a mistake** and ruined myself. My brother has taken over for the family in Kofu and I'm really not much use there.

(私は身<sup>み</sup>を誤<sup>あや</sup>った果てに落ちぶれてしまいましたが、兄が甲府で立派に家の後目を立てていてくれます。『伊豆の踊子』川端)

「身を誤った」と同じような慣用句に「身を持ち崩して」というのがある。

〔例 233〕 He had **gone** gradually **downhill** after that, becoming a sort of sharper, a guide to Japanese students in Paris, and then a backstage doorman at a music hall.

(それから、段々と身<sup>み</sup>を<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>崩<sup>く</sup>し<sup>て</sup>、ぼん引同様の留学生相手のガイドから寄席の楽屋番までして、日本に帰っても画を出さずに、美術批評をしたり、画商の真似をしたり、新劇の舞台裏で働いてゐた。『帰郷』)

日本語の「身を持ち崩す」というのを英語では「下り坂に行く」という発想をしているのが面白い。

「身を……」に関するものでは、「身を捧げる」lay down one's life for ~ とか「身を案じる」anxious about ~ などもあるが、同じ川端康成の『雪国』から「身を投じる」の訳を見てみよう。

〔例 233〕 Just as he had arrived at the conclusion that there was nothing for it but to **throw himself** actively into the dance movement, and as he was being persuaded to do so by the dance world, he abruptly switched to the occidental dance.

(もうこのうへは、自分が実際運動のな<sup>な</sup>か<sup>へ</sup>身<sup>み</sup>を<sup>を</sup>投<sup>な</sup>じ<sup>り</sup>ていくほかないという気持ちに狩りたてられ、日本舞踊の若手からも誘いかけられた時に彼はふいと西洋舞踊に鞍替えしてしまった。『雪国』川端)

ここでは、ほぼ直訳に近い throw himself into が用いて効果をあげているが、『大和英』に記載されている enter (launch) into ~ も使えないことはない。

同じく「身を……」でよく用いられている慣用句は、「身を切るように」と「身を切られるように」であろう。

〔例 234〕 Finally, as it was the end of the eleventh month of the old calendar (December), the wind blowing on the sea was **so cold that it seemed to fairly cut their flesh.**

(最後に旧暦の十一月下旬だから、海上を吹いてくる風が、まるで身を切るように冷い。『虱』芥川)

これは戦前日本の大学で教鞭をとったことのあるアメリカ人 Glenn W. Shaw 博士によるもので、日本語をほとんど忠実に訳しながらも、英語らしい訳になっている。

〔例 235〕 I would rather **be torn to pieces** than be held responsible for this thing.

(そう思われるのは身を切られるより辛いんだから。『ころ』夏目漱石)

精神的につらいことを「身を切られるようにつらい」と言うのに対して、肉体的な痛さは「骨身にこたえる」と表現する。

〔例 236〕 If you really want to become an artist you've got to grit your teeth and bear it, **no matter how much it hurts.**

(芸道に精進せんとならば痛き骨身にこたえるとも歯を喰いしばって堪え忍ぶがよい。『春琴抄』谷崎)

これも意味をくみとったうまい訳ではあるが、言語表現として考えてみると、日本語の「骨身にこたえる」の方が、英語の **no matter how much it hurts** よりも、はるかに感覚的にすぐれていると言えるだろう。同じことが「骨身を削る」という成句についても感じられる。

〔例 237〕 Their days, inevitably, would be spent in endless strife with the accursed Hsiung-nu, and they would **wear themselves down in efforts** to conciliate the states of the Western Marches, those states that could never quite determine their allegiance.

(決して終末ということのない呪われた匈奴との抗争に明け暮れるであろうし、叛服常ない西域諸国の懐柔に骨身を削ることであろう。『洪水』井上靖)

「骨」に関しては、「骨の髄まで」という成句があるが、これには、英語にもびたりと一致する **to the marrow** (of one's bones) というイディオムがある。

〔例 238〕 I felt lonely **to the marrow of my bones.**

(さびしさが骨の髄まで徹した。『愛と死』武者小路)  
どういうわけか、「血」のつく成句は英語の方がはるかに多い。高貴な生まれのことを **noble blood, blue blood** というのをはじめ、とても10本の指では数えられないほどイディオムが多い。諺にしても **Blood is thicker than**

**water** (血は水よりも濃い)/**Blood must atone for blood** (血は血で償うべし) などがある。

日本語の方にも「血道を上げる」とか「血潮の高鳴り」などがあるが、それほど一般的な成句ではない。

〔例 239〕 Even **you would have been struck** if you had looked through the binoculars at that intense and lovable creature. (I mean Tsumura, not the horse.)

(貴方だって、あの真剣ないじらしい生き物(勿論ブルーホマレではなく津村のことです)の瞬間の姿態を眼鏡の中からお覗きになったら結構血道を上げましてよ。『猟銃』)

「血道をあげる」というのは、本来痴情のためにほせる(多くの場合女性が)ことであると思うが、原文ではそのすばらしさに興奮するとかうっとりするような意味にとれるので、この英訳は妥当であると思う。

参考までに『大和英』には、**be madly in love with** (a man); **be head over ears in love**; **be gone on** (a man) などの訳が与えられている。

〔例 240〕 What a beautiful picture! The coldness of his profile under that unkept hair, and the charm of his long legs which, it seemed, could carry him at fifty miles an hour! Even now I feel my **blood tingle** for that boy.

(ああ、あの写真の美しかったこと。蓬髪の下の横顔の冷たさ、時速50マイルを走るといすなりと伸びた双脚の魅力! いま思ってもあの少年にだけは、異様な血潮の高鳴りを覚えます。Ibid.)

〔例 241〕 Her complexion was of the sort one might describe as **nicely bleached.**

(肌は、いわゆる血が澄んでいるという種類である。『本日休診』井伏鱒二)

「血が澄んでいる」とは耳新らしい表現であるが、「すきとおるような肌」のことであろうか。いずれにせよ“bleach”を用いて表現しているあたりを見ると、日本語の微妙さを改めて知らされる思いがする。

日本人は女性の美しさを言及する時によく「肌」の美くしさにふれるが、英米文学ではあまり見られない現象である。『千羽鶴』の中で『玉の肌』を **perfect skin** と訳しているが、日本語のもつニュアンスを欠いているように感じられる。しかし、同じ『千羽鶴』の中で、「私達の肌にはあいません」を **She wasn't my sort** と訳しているのは、よく日本語の意味を伝えている。

以上、われわれが平生何の気もなく使っている日本語  
(p.65 へつづく)



# 世界における外国語教育 (5)

—イギリス—

HOSHIYAMA SABURO

星山三郎

## I. アルプスを越えイギリスへ

午前10時15分イタリアのミラノを飛び立つ。B. E. 機は雨雲の中をぐんぐんと北上する。飛行機が雲の中で激しくゆれて思わずベルトに手がかかる。やがて雲の上に、真白に切り立った山の峰が顔を出すと、あれはモンブランだ、いやマッターホルンだ、ユングフラウだと機内が、ざわめき、カメラを窓外に向ける人たちで窓が塞がったと思ったのも束の間、もう眼下に湖が見える。ジュネーブ湖である。

飛行機が再び雲の中へ突入する。1時間あまりでやっと雲がと切れる。海岸へ出たらしい。遠く彼方に、白い波打際近くに白い山肌が見える。Dover 海峡らしい。雲はこれよりいよいよ厚く飛行機のゆれがひどくなる。豪雨らしい。12時10分、飛行機は雨に濡れたロンドン郊外の Heathrow 空港に着陸する。10月も中旬の冷たい雨が2階建バスのガラスを横なぐりにたたく。困ったなと思っているうちに、この雨はすぐ止んで、車内に日がさしこんで来る。The weather is so changeable and treacherous in England ということばがさっと頭の中をよぎる。

ロンドン市内に着くと私は先ず Davies Street の British Council を訪れることにした。それで空港からの途中、乗り継いだバスを Hyde Park Lane で降りた。すると私の目の前を、山高帽をかぶり、洋傘を手にした紳士が歩いているではないか。ロンドンに来たのだとの実感が深まる。

## II. British Council による語学教育視察プラン

British Council では Mrs. Awbery White という中年の婦人がすでに私のためにプログラムを作って置いてくれた。それに彼女は不在の場合をも想定していたのか、次のような手紙まで添えていた。

17th October, 1967

Dear Professor Hoshiyama,

As your Programme Organiser it is my pleasure

ELEC BULLETIN

to welcome you to this country. I hope that your stay will be both useful and enjoyable.

I enclose details of two appointments which I have made for you, but as I am uncertain of your plans for the rest of your stay in Britain, I have not made any further firm arrangements. This can be done when I see you....

I enclose some maps and pamphlets about London which I hope you will find useful, and a copy of our notes for the guidance of visitors for whom the Council is not financially responsible,

Yours sincerely,

(Mrs) Angela Awbery White

Programme Organiser

Visitors Department.

私の見学先に対する注文は次の3つであった。

- (A) 中等学校における外国語授業の参観
- (B) 外人に対する英語授業の参観
- (C) 外語教育研究機関とその活動

以上の3つに対し Mrs. White は私の滞英日程に合せて、大体下記のとおり場所と接渉し、多くは時日を未定としながらも、参観の手配をしておいてくれた。

### (A) GRAMMAR SCHOOL AND SECONDARY MODERN

- 1) Appointment with Mr. R. K. Hands, Headmaster, H. M. Chiswick Grammar School

(フランス語の授業)

Burlington Lane, Chiswick, London, W. 4.

- 2) Appointment with Mr. Davy, Head of Lang. Dept.

Shelburne Secondary Girls' School

(スペイン語の授業)

Benwell Road, N. 7.

(Halloway Road Station, Piccadilly Line)

- 3)\* Appointment with Miss E. M. Farewell, Principal

Jersey College for Girls (フランス語の授業)



ガウンのよく似合う校長室の Mr. Hands

St. Helier, Jersey, C. I.

(\*本校は Prof. Hill の紹介)

(B) **ENGLISH TEACHING AS A FOREIGN LANGUAGE**

- 1) Appointment with Mr. Harper,  
**English Language Teaching Institute,**  
**London Overseas Students Centre**  
11, Portland Place, London, W. 1. (BBC の隣)
- 2) Appointment with Mr. Ronald Mackin,  
**Department of English as a Foreign Lan-**  
**guage, School of Applied Linguistics,**  
**University of Edinburgh,**  
George Square, Edinburgh, Scotland
- 3) Appointment with Mr. Kenneth Strong,  
**School of Oriental and African Studies,**  
**University of London,** Malet Street, W. C. 1.
- 4) Appointment with Dr. J. B. Wynn,  
**Department of English and Liberal Studies of**  
**the Welsh College of Advanced Technology**  
51 Park Place, Cardiff.

(C) **外語教育研究と宣伝機関**

- 1) Appointment with Miss Cartwright,  
**OVAC (=Overseas Visual Aids Centre)**  
Tavistock House South, Tavistock Square,  
London, W. C. 1.
- 2) Appointment with Mr. Thornhill,  
**ETIC (=English-Teaching Information Centre)**  
State House, High Holborn, London W. C. 1.
- 3) Appointment with Mr. F. Quinn,  
**National Audio-Visual Aids Centre**  
Paxton Place, Gipsy Road, London, S. E. 27.
- 4) Appointment with Mrs. G. A. Moncaster,

**English Language Teaching Department**  
**Oxford University Press**

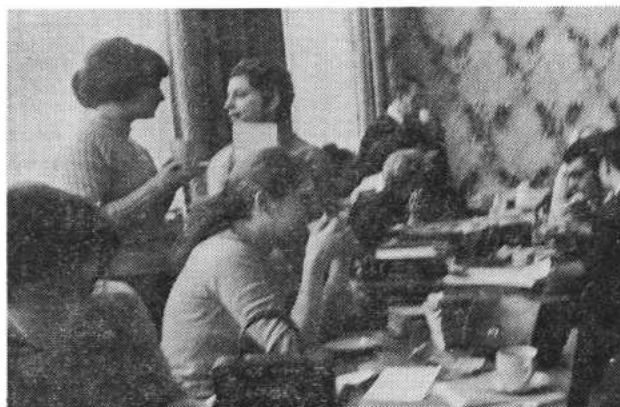
Ely House, 37 Dover Street, London, W. 1.

上記の(A)に示されたのはこのイギリスの代表的な学校であり, (B), (C)に示された教育機関はこのイギリスが最も力を入れているものであることを示しているように思われる。

III. **H. M. CHISWICK GRAMMAR SCHOOL**

イギリスで Grammar school といえば, わが国の中学校と普通科高校とを一つにしたような性格の公立中等学校である。Public school と並んで, 良家の子女の多い学校である。入る時は大部分が上級学校への進学志望で, 11歳で小学校を卒業した生徒が, 俗にいう“11+ examination”(イレブン プラス イクザミネーション)を受けて, その成績によって入学し, それから5学年あるいは6学年を修了して社会へ出るか, 大学へ進学する。Chiswick Grammar School へはロンドン, テムズ川の南岸にある Waterloo Station から行く。車内の中央に大きな網棚のおいてある古風な電車にゆられて21分間乗ると, Chiswick という静まり返った駅に着く。駅につくともう学校の屋根がまばらな街の家並や樹木の間を通して見える。徒歩5分で学校につく。約束の9時半になるとガウンに身を包んだ校長さんが校門まで出迎えてくれた。Mr. Hands という中年の紳士。「私が校長の Hands です。お出をお待ちしておりました。先生たちをご紹介いたしましょう。今ちょうど“tea break”の時間ですから教員室にいらっしゃい」と愛想がよい。教員室で先生たちと紅茶を飲みながら, さまざまな問答をする。日本の学校の教員室で, こんなにゆとりのあるくつろいだふんい気の中で話し合える学校があるか知ら。

以下は私の問いに対する先生方の答えである。



グラマー・スクールのなごやかな教員室(お茶の時間)



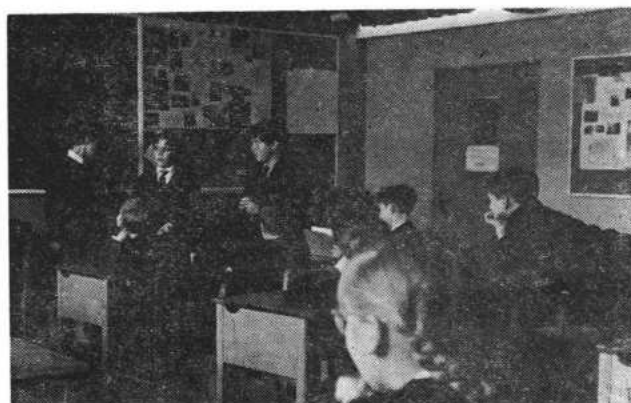
- 本校は男女共学，全校生徒数930名
- 男女生徒の割合 4 boys: 5 girls
- Primary school は5歳～10歳まで
- 本校では11歳～16歳 (1st form～5th form)  
17歳～18歳 (6th form, 2 Year-course)
- 1年に入学したすべての生徒が卒業することはない。約 2/3 は 5th form でやめる。  
6th form まで来るものは全生徒の 1/3。さらに大学へ進む者はその 1/2 となる。
- 本校には“11+examination”に合格した者が入って来ているが、この制度は世論の趣くところ、廃止の方向に進んでいる。
- 本校への入学許可は次の2つの条件による。
  - (i) Headmaster の認定
  - (ii) The record of the primary school (内申成績)
- 現在イギリスの中等学校は大別して，grammar school と secondary modern school の2つに分かれているが、これには反対の空気が強い。この風潮を反映して生まれたのが“comprehensive school”である。  
(その内容は学校によりかなり複雑)
- 本校の第1外国語は French (11歳より全員に)  
第2外国語は German (13歳より選択)  
Russian, Spanish, Italian を希望する生徒も居るが専任の教員がいないので実施は困難。
- G. C. E. (=The General Certificate of Education) について。これは卒業を検定する国家試験のようなものである。出題は (i)大学側の教員と (ii)中・高側の教員の代表者が協議してこれを定める。大学や社会は G. C. E. の種目と種類をば、進学ないし、入社資格とするのが普通である。

#### ◎ フランス語の授業の実際。

フランス語の授業をしている教室を15分間づつ、2つのぞかせてもらった。わが国の教育大学付属などに見られるように、参観者づれしているのか、それともイギリスの少年にとってはこれが普通の常態であるのか、授業中、自分の席を離れたたり、立ったり、隣の生徒の本をのぞき込んだり、その騒しさは、どこの国でも変わりはない。

授業の進め方——テープやスライドを用いて、先生が生徒を活動させるやり方は日本の場合と少しも変わらない。The world is one!

- 最初に参観したクラス。11歳組でフランス語の習い始めである。film-strip を用いて、教師による oral introduction, 次に教師自身による仏問仏答。この film は「生徒が鉛筆を失くして、それを探している光景」



グラマー・スクール、フランス語の授業風景

で、これを教具教材として耳と口から入る授業であった。生徒数は15名。このうちの1～2名が交代で、機械を操作する係り（この方を喜こんでやっているようだった。）

- 次に参観したクラス。12歳組で以前少し仏語を学んでいたらしい。「レストランへ行き 食事を注文するという situation」でのフランス語の会話の練習である。  
(写真はその授業風景)

先生 (1) film を写して見せ、同時に tape を聞かせる。

(2) tape のあとをつけて発音の練習をさせる。

(3) 同上の内容につき、生徒3名が一組となり交代に教室の前方へ出て、会話の練習をする。

#### ◎ Small Class Size に対する所感

1つの教室の机の数が30脚ぐらいであるから、いくら多人数になっても30名を越すことはあるまい。ロシアでも、オランダでも、ベルギーの学校でも、英語の先生たちは、あたかも相談したかのように、「30名を越す場合は、クラスを2つに分けます」と言っていたことを思い出す。エジンバラ大学の Mr. Mackin は「自分の経験では、外国語の有効な教授を行なうためには8名がそのマキシマム」と言っている。

日本と諸外国の英語教育の一番大きなちがいは、今や「理論や方法」ではなくてクラス・サイズにあると思う。日本は高教育社会であるために、短時間に最大の効果をあげるための工夫が競って生まれ、それがいつの間にか、教授法上のユガミとなって現われて来たのではないかと思う。すなわち

- (i) 語学の授業が機(器)を織るような単純な機械的作業になる傾向が見られること。



Shelburne 女子校のスペイン語の L. L. 授業風景

(四) 覚えた英語やその記憶法がお寺の小僧の「お経」化の傾向が見られること。

私は上述の Grammar School の授業を参観しつつ、以上のような事を考えていた。

## VI. SHELburne SECONDARY GIRLS' SCHOOL

この学校は Secondary modern school といわれているものの1つ。前述の Grammar school とは環境や、校内のふんい気ががらりと変わる。第1外国語は French でなく、Spanish で、学生総数748名中の90%がこれを選択心修としている。黒人の顔が、どの列にも見られる。この学校は地下鉄 Piccadilly Line の Halloway Station からほど遠からぬ Benwell Road の大通りに面しているが、高いコンクリートの塀にかこまれ、庭は狭い。緑の草木が目にはほとんどふれぬ。教員室も思ったよりうす暗い。教室に入ると生徒の人数は25~30名でいどであるが、生徒のはしゃぐ声が教室一杯にこだまする。黒人の真白い歯がいやに目に染みる。何れも西印度諸島とか南米からの移民の子弟だという。

この学校の外国語科の主任の先生は Mr. John Davie である。熱心のかたまりのような先生だがコックニイのためか、英語がとても聞きとりにくい。それでいて、彼は English, French, Italian と Spanish ができるといふ。今日は1年生の Spanish の授業をお目にかけましょうと、私の先に立って教室へ行かれた。手法は立派に Oral Method による授業である。通常、1クラス30名の生徒を2つのグループに分け、半分はラボを使用させての授業（フルラボ16台）、同時に他の半分には「書く」作業を課している。

本校の生徒748名に対し、Spanish の教員は5名、1クラスの週あたりの授業時間は（3~5）時間のよし。この学校のラボのブースは前面が皆ガラス張り（写真）

となっているので、生徒の顔、口の動かし方まで実によく観察できる。教師は先ず

- (1) 教材を吹きこんだテープを聞かせる。
- (2) テープによる questions に対し、各自の answers を各自のテープに吹きこませる。
- (3) 教師がそれをモニターする。

この学校ではギリシア語やトルコ語を希望する生徒も数名おるといふ。これら少数者にも、この Mr. Davie はそれぞれ選択教科として教えているらしい。「本校で Spanish に力を入れているのは、将来の生徒の就職の事を考えてのこと、French では他校に立ち打ちができません」と割り切って考えていた。Spanish のほかの外国語をやりたい者には、上級に行ったら、教えてやりまう」という Davie 先生、江戸っ子のペランメイ調子をロンドンで聞いているようであった。

## V. JERSEY COLLEGE FOR GIRLS

これはフランスの一部と見まごうほどフランスの北端に近い小さい離れ小島 Jersey にある女学校である。この島は気候温暖、フリーポートで物価が安く、生活が楽なので、退役のお役人や軍人の多く住んでいる所だといふ。ロンドンから飛行機でイギリス海峡を南東に向けて横断、ちょうど1時間で着ける。ここに今 Prof. L. A. Hill が住んでいる。私がロンドン滞在中、同氏に手紙を出すすと早速返事が来た。

"I would be very pleased if you would come over and spend a few days with us here in Jersey, in our house, while you are in Britain. You can fly over from London to Jersey in one hour. Quite a number of my friends have already done so. We shall look forward very much to seeing you."

私は予定を変更して Hill 教授を訪れることにした。同教授の家は海岸の最南端、見晴しのよい断崖の上にあった。海岸に面した大きな応接間の窓は、イギリス海峡の全貌を一幅に収めた一つの絵画そのものであった。Hill 教授はここで英語教育に関する著作に没頭しているのであった。この島の人口は約5,000とのことであるが立派な学校が幾つかあり Hill 教授の step-daughter が通っている中学では French をやっているとのことで、同教授の案内で、この学校を参観することができた。

1880年創立というから、かなりの歴史を持った名門校である。校長は（始めて会っても）Miss Farewell、外国語の主任は Miss Robinson、この日は特に遠来の客というわけで、私のため特に小学校の6年生（10~11歳）に対するフランス語の授業をやって見せてくれた。私は

当日の旅日記にこう記している。

Miss Robinson taught her girls French *orally, lively* ... using H. E. Palmer's Oral Method, ... this remind me of Palmer's "Action Chains" and his book *English through Actions*.

この College のコースと年齢は次の通りである。

Junior course (5—11) 歳 6 years

Senior course (11—18) 歳 8 years or so

この学校では学校長の方針で能力別のクラス編成を行なっているようであった。やはり当日の日記に私はこう記している。The Principal says... *to some extent* a class is not formed by age but by ability.

## VI. ENGLISH TEACHING AS A FOREIGN LANGUAGE

ヨーロッパの諸国を歩きまわり、そこで話される英語を、気を付けて観察してみると、いずれも British English であることに気がつく。これは地理的、経済的に密接な関係があることによるものであることは容易に察しがつく。しかしその British English 普及の陰に、いかにイギリスの British Council の努力があるか、それを見逃してはいけな。

その努力の一つの現われはイギリス国内における、外国からの留学生に対する英語教育の施設の充実であり、他の一つはそれを側面から援助している研究機関の充実と宣伝普及である。それは本章の始めに述べた British Council, Visitors Branch の Programme Organizer が私に訪問先としてアポイントメントを取りつけてくれた(B)項、(C)項のリストがこの事実を有力に物語っている。日本を学ぼうと日本にやって来る外国人に対し、日本の政府やその他の諸団体は、彼らにどれだけのことをしているのか、それと、これとを比べて見ると、イギリス政府、イギリス人の努力が並大抵でないことがわかる。

イギリスへA・A諸国からやって来る留学生に対する短期教育の場として "English Language Teaching Institute" がある。これはロンドンのほぼ中央(BBCの隣)にある施設である。A. V. Aids を活用して、東南アジア、アフリカ、南米メキシコからの留学生などに対し、1クラス7〜8名の学生を相手にオーラルによる訓練を見たが、教える先生方も必死である。私はウエルズのカーディフ大学でもアフリカの黒人留学生に対する英語の授業をも参観したが、教える側に、実に熱がこもっていた。私は大切なのはこれだなと思った。アフリカの黒人たちのうちには、もう大学生だ(?)というのに言語系統のちがいのためか、[s] と [ʃ] の区別がどう

しても、幾度くりかえしても出来ない学生がいた。見ている私の方が泣き出したくなる位であったが、先生は seep と sheep; puss と push を根気よく繰り返して発音の練習をしていた。This is ~ と Is this ~? の区別がつかなかったり、この文型の発音が何度くりかえしても【ジシシ〜】とか【エジシ〜】である。これらの学生もアフリカ本国へ帰れば、末には国家の指導者にもなる人たちにちがいない。人知れぬ、たゆみなき教員の努力と辛抱強さの威力とその必要性を、この時ほど強く感じさせられたことはない。

私が先に(C)の項としてあげたイギリス国内における英語教育研究施設としてあげたものの中で一番心に強く残っているものは、ロンドン中央通りの High Holbornにある State House の2階にある ETIC (=English-Teaching Information Centre) である。8階造りの建物の2階の数室をこの情報宣伝の場として使っているにすぎないが、世界の英語教育の状態について、なんらかの情報、知識を得たいと思えば、此处に来るか、手紙で此处に問い合わせれば、何かがわかるという仕組みになっている。ここの図書室には

- (イ) 世界各国で使われている英語の教科書
- (ロ) 各国で出版されている英語教育書類
- (ハ) Audio-Visual Aids 関係の図書やその実物

このようなものが、不十分ながら揃えてある。

私はこの図書室で日本関係のものを調べて見た。ある本棚の一段が日本における英語関係書類で、その冊数は約50冊ほどであった。次にそのうちの数冊を列挙して見よう。

- 1. 文部省編：(中学・高校)学習指導要領(外国語科)
- 2. 英語教科書：大修館 *New Approach to English*  
三省堂 *Crown*  
開隆堂 *Jack and Betty*
- 3. ELEC 出版物：ADDRESSES AND PAPERS
- 4. 東京教育大外語研：REPORT ON AURAL-ORAL TRAINING
- 5. H. E. Palmer : *Five Speech Learning Habits* (開拓社)
- 6. 文部省：EDUCATION IN 1964 (英文)  
(Issued by Government of Japan, March 1966)

このセンターの主任 Mr. Thornhill は「ここは主として Africans と Asians のためのものです」と言っていたが、わが国の出版社など、自社の発行物などをめんどろがらずに寄贈しておいたらどうであろう。100年先のことを考えて。

(東洋女子短期大学教授)

# SILENCE IS NOT ALWAYS GOLDEN (3)



David Hale

Lecturer

Harrow College of Technology and Art

**V. Devices** (Practical suggestions for easier and smoother conversation)

## 1. Psychological Factors

First let me state very definitely that there are *psychological factors* involved in communicating through another language. When a foreigner speaks to the average Japanese the latter feels automatically that he will not be able to understand. This is often even true when the foreigner happens to speak quite presentable Japanese! The barrier is entirely a mental one and can be lifted with a little reasonable thought.

In schools many or most students spend a lot of time diligently studying English. That they cannot speak it is a failure of emphasis and not an automatic and inherent inability. The same student has for average conversational purposes more than an adequate knowledge of grammar. Usually he knows *too much* of it, and the extent of his consideration to produce an enormous and perfect sentence is at the same time the extent to which he is unable to do so at least quickly and when it is necessary. Japanese people in any case do not (who does?) like to make mistakes, and they take themselves far too severely to task if they make a blunder. Unfortunately, if we combine this national characteristic with the learning of masses of complex syntax and grammar we are seriously compounding the inability to speak. Conversation is on the whole relatively simple in its constructions, and a few techniques will go farther than volumes of grammatical rules.

Shyness, then, is no help. Nervousness should be kept for other occasions and something of a 'cavalier attitude' developed. Not too much of a cocky pertness, this can strike the foreigner badly, but a feeling that nothing can be learned without mistakes and that experience is the most direct way to progress. Native-speakers are generally not over-critical about mistakes being made, the only real criterion is, of course, *whether you can be understood* and *whether you have been understood properly*. So long as exchange is taking place, mutual understanding is possible; even silence for the best possible reason—that of creating a good sentence in English—can break off the conversational flow, and defeat its object. Some self-confidence, and the desire to really make progress will carry you over that initial inhibition, and enable you to do more justice to your abilities. Since it is in fact impossible not to make mistakes, you might as well come to terms with the fact and determine to communicate at all costs.

## 2. Listening to a language, and some related points

Practically speaking, the best way to listen to a language is to listen, not to every syllable, many of which may be slurred in speech in any case, but for 'key-words.' These may be *main words which you recognise* from your vocabulary knowledge, and which you can put together to make a chain, or *words which are stressed* in some way by the speaker. The latter are made conspicuous by an *intonation* or *stress pattern* which may allow the speaker



to dwell on them for perhaps a longer time or at a distinctive pitch. *Repetition* is also a clue to importance; a key-word or phrase might recur several times in a speech, and the repetition gives an indication of its importance for an understanding of the central meaning of the passage.

It is therefore misplaced effort to try and catch every syllable of every word and concentrate so much on that that the speaker has finished the next sentence while you are still worrying over the eighth word of the last one! It is instead much more sensible to listen to the conversation as the unit, feeling the general contextual meaning, sensing the flow and rhythm, and picking out key-words and phrases to put together an abridged version of the meaning almost quicker than it is being articulated. As the speaker continues, in the case of a lecture for example, you can pick out the *thread* of the talk, while perhaps even being unable to translate each word into your own language if someone tried to make you. But you will be getting a high percentage of the meaning. In conversation, if some particular word or phrase is repeated and clearly seems central, but you do not know its meaning, then it is sensible to ask for an alternative or explanation.

Of course *vocabulary* is important. No one can learn it for you; and there is no substitute for hard work. But effective work is of more value than the other kind, and in this connection I wonder how many would-be speakers of English own an English-English Dictionary? It is important to get to know the *connotations* of words, and phrases, as they are used in the language. At a practical level the phrase, "I can't *put up with your attitude*," has implications of fierce and blunt objection, when you are more likely to mean, "Sorry, I can't *agree with what you say*." The native reaction to the first might be pugilistic, but to the second very reasonable!

At a more sophisticated level you might come to distinguish, for example, between the

words 'lonely', 'alone', 'solitary' and 'isolated', all of which might be translated into Japanese by the unwary as having identically the same meaning, which in fact they do not. Or you might come to feel some distinction between words like 'toll' and 'peal', the first with its sad connotation and the second with its happier one, or to sense that if bees 'hum' they seem energetic and summery, but rather homely, while if they 'buzz' they may be just as energetic but possibly ominous too. Wasps don't hum!

The English-English Dictionary also helps you to identify the meanings of words in other English words, expanding your vocabulary and taking you at the same time more and more away from the idea and habit of instant translation which can only be a hindrance in using a foreign language. A good dictionary, and an up-to-date one, will also lead you away from the danger of using either old-fashioned words (who *uses* 'thus' or 'thereby' in conversation?) or, what may seem even worse, the use of slang. There is a famous quasi-limerick which goes:

'The reason for using slang,

Is to show you are one of the gang.

But when it dates

It grates.'

It is hard enough for native-speakers to handle slang, assuming they want to, without seeming slick, and nearly impossible for the non-native-speaker. It is better, then, to avoid it altogether.

Perhaps it might be useful to point out that pronunciation is rather important, but not in the way some people seem to think. In English, as in Japanese, very few people stress every syllable and pronounce every sound exactly. Where English is concerned that would make an intolerable noise, nothing like the *sound* of the language itself. Many words are in fact not very emphatically sounded, many ellisions are used and generally a flow and rhythm established instead. There are two dangers therefore rather than only one. The first is the

danger of not enunciating clearly words which are enunciated, and the second is of over-pronouncing words which normally carry little weight.

In the first context might I make an observation or two about the systems for representing foreign sounds or words in the Japanese language. The *kana* devices, *katakana* and *hiragana*, are fascinating ways of avoiding the limitations of *kanji* and enable foreign names and other foreign items to be represented in Japanese. But there is a serious limitation involved. The sounds of *kana* are only the sounds of the *kanji* from which they were originally developed, and they do not represent the non-Japanese sounds. All foreigners coming to Japan enjoy tricking out their own names in *kana*, one of the amusements being that the sound of the name changes in the process, sometimes quite drastically. In my case I cannot be known in Japan by the title my forefathers sported, as, although the sound of 'Hale' is one sound in English it becomes two distinct sounds when transcribed into Japanese—'Hei-Ru'. There is no 'l' sound in *kana*. I have no objection whatsoever to being known as 'Mr. Heyru,' but the Japanese instead of 'Mr.' before put 'san' after the name and the enigmatic 'Heyrusan' has associations which some native-speakers will realise! English has sounds which Japanese does not have. The Japanese student wishing to speak English must go far beyond the *kana* sounds and imitate the full range of English sounds. Classes conducted by my wife with small Japanese children show that there is no physical reason why every Japanese cannot make every English sound as well as any native-speaker. Again it is the psychological factor, usually of becoming 'bound' by the native language, which makes the shades begin to crowd in on the growing boy, and sometimes turns him into an inflexible old man! What can we do when *kana* makes no distinction in sound between 'glass' and 'grass', 'rove' and 'robe', or even 'veal' and 'beer'! except abandon,

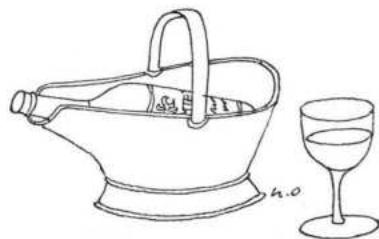
for this particular exercise, its limitations and look elsewhere for help.

As I have suggested before the tape-recorder is the helper. A student who puts a sentence or two by a native-speaker onto tape, and tries then to faithfully record his own attempt to reproduce the same sounds, will in a very short time have helped himself past this difficulty. Particularly if he chooses progressive and systematic material for his exercises.

This same exercise will also help the student to bypass the other difficulty mentioned before—that of learning ellisions and using words which carry little stress. 'I'm' is almost always used instead of 'I am', and likewise 'I'll be going' instead of 'I will be going.' In American English this is often taken to an extreme which is only faintly imitated so far by most Britons. 'I do not want to go' might seem rather too emphatic to the Briton and he is more likely to say 'I don't want to go,' though even then the final consonants are not over-pronounced. Some Americans might take this several stages further and say what could sound like 'Ahdonwanago.' But in any case good selection of material for the tape-exercise suggested above will make all this much less of a problem in practice.

In short, the ability to recognise sounds quickly and accurately is of vital importance, and the ability to make accurate sounds quickly and convincingly is just as important. But, as Japanese people are very fond of saying 'Rome was not built in a day. *Practice*, as we all say, makes perfect!

(To be continued)



# A Grammar of Contemporary English

by Randolph Quirk · Sindney Greenbaum · Geoffrey Leech · Jan Svartvik

Longman, pp. 1, 120 + xii, ¥10,000

YAMBE TAMOTSU  
山 家 保

## はじめに

本書は1972年に Longman Group Ltd. より出版された A 5 判変形の 1, 120 頁に及ぶ著作であり、その cover に依れば今までに書かれた英文法の共時的記述では最も充実した、最も包括的なものであり、あらゆる英語国の教養ある人々に依って用いられる標準英語を集中的に取りあげ、その口語体と文語体、ならびにイギリスとアメリカの語法の差異などを解明するものであるという。以下各章毎に筆者の注意を喚起した個所を挙げて論評を加える。

## 著者

本書の著者はつぎの 4 氏であるが、この著作が開始された時点では、ともに University College London の English Department の staff であり、かつ英語の語法調査事業である Survey of English Usage に関係していた。

Randolph Quirk はイギリスを代表する言語学者として有名で、1964年にアメリカを代表する Princeton 大学の Albert H. Marckwardt 教授との “A Common Language” と題する英米語に関する 12 回にわたる対談が BBC と VOA の両方から放送され、その内容はあとで出版されたことはよく知られている。現在 University of London の Quain Professor of English で、1960 年から開始されている Survey of English Usage の Director でもある。

Sidney Greenbaum は現在 University of Wisconsin—Milwaukee の教授で、Survey of English Usage には 1965 年に参加している。

Geoffrey Leech は University of Lancaster の Reader in English, Brown University の visiting professor, MIT の Harkness Fellow で、1962 年から Survey of English Usage に関係している。

Jan Svartvik は University of Lund の教授であり、1962 年以来 Survey of English Usage の Assistant Director である。

## Preface

序文では、この 4 人の著者の著作態度を明確にしている。彼らは、de Saussure や Jespersen 以来の伝統的な言語理論には疑問の余地のない長所があり、また最近の言語理論、特に変形生成文法は大きな刺激となっていることは認めているが、どの言語理論も単独ではすべての言語現象を解明するまでには至っておらず、従ってどの特定の言語理論にも属さない折衷的な立場であることを明らかにしている。このような妥協的な立場は、おもな言語理論がそれぞれお互に他の理論の影響を受け合っているという最近の傾向をよく反映したものだとしている。

この著作に当っては、Harvard 大学の Dwight L. Bolinger 教授から特に貴重な示唆を与えられたことを述べているが、その他の助力者の中に Jones の発音辞典の改訂に当たった A. C. Gimson や Charles C. Fries の令息で Central Michigan 大学教授の Peter Fries の名も見えている。

## 1. The English Language

ここでは英語の重要性を、(1) native speakers の数、(2) 地理的分布、(3) 科学・文化面における伝達量および(4) 政治・経済の分野における影響力という 4 つの観点から論じているが、特に科学の分野における国際語としての重要性については l'Académie de Paris の Inspecteur Régional である Denis Girard 氏の調査資料に基づき、つぎのように述べている。

フランス語を話す国々の学者の 90% は英語で書かれた図書が必要であると考えているが、その中にはフランス文学専攻の学者も含まれている。さらに重要なことは、25% の学者はその学術論文を英語で発表したいと考えている。このような傾向はイタリア語にもドイツ語にも見られる。

1950 年頃イタリアの物理学の学術誌 *Nuovo Cimento* はイタリア語以外の論文も受け入れることにしたが、20 年もたたないうちに、イタリア語の論文は 100% からゼロ

になり、代わって英語の論文はゼロから100%になった。

ドイツの *Physikalische Zeitschrift* では1962年から1968年の間に英語の論文は2%から50%になった。

また、ヨーロッパの *Astronomy and Astrophysics* では、寄稿したフランスの科学者の論文の  $\frac{2}{3}$  は英語であり、またフランス政府の補助金を受けているにも拘らず、Agence Internationale de l'Energie Atomique の機関誌 *Nuclear Fusion* では論文はすべて英語で書かれている。

## 2. The Sentence: a preliminary view

本書では動詞を先ず stative verb と dynamic verb の2つに大別しているのがひとつの特色である。stative verb とは、(1)She is in London, (2)The girl is now a student at a large university, (3)John knew the answer のような進行形を許さぬ動詞をいうのであるが、dynamic verb とはこれに反して進行形を許す動詞をいう。

この区別は重要であり、dynamic verb は進行形のみならず、命令形も可能であるが、stative verb の方は進行形も命令形も不可能である。

	Dynamic	Stative
Progressive	$\left\{ \begin{array}{l} \text{I'm learning the language.} \\ \text{I'm being careful.} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} * \text{I'm knowing the language.} \\ * \text{I'm being tall.} \end{array} \right.$
Imperative	$\left\{ \begin{array}{l} \text{Learn the language!} \\ \text{Be careful!} \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} * \text{Know the language.} \\ * \text{Be tall.} \end{array} \right.$

\*印は語法として間違っているものを示す。

これら2種類の動詞は、subject complement (主格補語)を要する動詞とそうでない動詞の2つに大別される。前者を intensive verb, 後者を extensive verb といい。

たとえば上の(1), (2)の文の is や, (4)His brother grew happier gradually の grew のように主格補語を必要とするものを intensive verb という。ここで一寸注意を要するのは(1)の in London である。これは伝統文法では主格補語とはせず, is は完全自動詞で, in London は場所を表わす副詞句というように分析するが, もし in London を除けば is はいかに完全自動詞とは言っても文の意味は完全ではなく, このような場所を表わす副詞(句)は必要不可欠なものである。従って主格補語(Csで表わす)と同等の扱いをすべきだというのが本書の主張である。したがって上の(2)と(4)がそれぞれ SVC という構文であるのに対して(1)は SVA<sub>place</sub> という構文になる。もちろん A<sub>place</sub> とは場所を表わす副詞(句)とい

う意味である。

ここで stative verb の方をまとめると, これは上の(1), (2)のような intensive verb と(3)のような extensive (& transitive) verb とに分かれる。したがって stative verb の構文にはつぎの3種類のものがある。(p. 42)

Stative verb	Intensive	A <sub>place</sub> (SVA <sub>place</sub> ) .....	(1)
		Cs (SVCs) .....	(2)
	Extensive: Od (& transitive)	(SVOd) .....	(3)

注: Od は direct object をさす。

Dynamic verb も stative verb と同様 intensive verb と extensive verb の2つに分かれる。前者は上の(4)の grew happier の grew のような動詞で Cs を必要とする。後者は transitive と intransitive verb に分かれるが, transitive verb の方は Od ひとつだけを必要とする monotransitive, 間接目的語(Oi)と Od との両方を必要とする ditransitive, さらに Od のほかに目的補語(Co)を必要とする complex verb の3つに分かれる。したがって dynamic verb の構文にはつぎの5種類のものがある。(p. 42)

Dynamic verb	Intensive: Cs	(SVCs) .....	(4)
		Monotransitive: Od (SVOd) .....	(5)
	Extensive	Vt. Ditransitive: (Oi) Od (SVOiOd) .....	(6)
		Complex: Od Co (SVOdCo) .....	(7)
		Vi. (SV) .....	(8)

上の(5)~(8)の例文を挙げればつぎのようになる。

- (5) John carefully searched the room.
- (6) He had given the girl an apple.
- (7) They make him the chairman every year.
- (8) It rained steadily all day.

このように動詞を stative と dynamic の2種類に分けると, 従来の5文型とは異なって8文型を認めなければならないが, 特に重要なのは(1)の SVA<sub>place</sub> をひとつの文型としていることであろう。

## 3. The Verb Phrase

### used to について

本書では used to という法助動詞が否定文では didn't used to と didn't use to の2つの形をとり, 疑問文では used he to はイギリス英語に特有のものであるが, did he used to の方が米語でも英語でも多く用いられると述べている。(p. 82)

ところが OED は How did we all use to admire her!



(1767), COD は What used he to say? のほかには *used not* (colloq. *didn't use*) to answer の例を挙げている。Zandvoort は Did he use to take the bus? He didn't use to answer? を挙げ、また Copperud は Negative statements and questions with *did*, however, take the form *use to*. と述べている。

本書に述べているような *didn't used to* や *did he used to* という形は他の文法書や辞書には出ていない。これが Survey of English Usage で発見されたというのなら話は別であるが、そのような言及もない。

#### 4. Nouns, Pronouns and the Basic Noun Phrase

##### The Double Genetive について

本書では a friend of mine のような double genetive では普通部分的な意味を伴うとして a work of Milton's を one of Milton's works と同じであると説明しているが、同じ個所に this great nation of ours という全く部分的な意味を持たない例を出している (p. 203)。さらに p. 890 では、このような of は部分的な意味を持つので、A friend of the doctor's has arrived. は正しいが、\*The daughter of Mrs Brown's has arrived. は誤りだとしている。もちろん後者は redundant で The daughter of Mrs Brown... で充分である。

本書がこのように部分的な意味があると主張しているのにも拘らず That wife of mine や This War Requiem of Britten's が可能であることを認めているのは矛盾と言わざるを得ない。

Jespersen は an old friend of Tom's では2つの概念を直接結びつけることは出来ないで、2つのものを同格の of で結びつけているのであるとし、a portrait of the king (representing him) と a portrait of the king's (belonging to him), an impartial estimate of Tennyson と an impartial estimate of Tennyson's の区別を明らかにし、このような例から結論的に言えることは、このような double genetive の of は some of us の場合のような部分的な意味を持つとは考えられない (Some of the examples given show conclusively that of cannot here be taken in its partitive sense....) と述べている。 (p. 146)

Evans もある文法家達はこの of は partitive であるから、that mother of his などというのは軽蔑的な言い方だとしているが、実際はこの double genetive は、部分的な意味があてはまると考えられるような場合でも、それ自体は部分的な意味を持たない (But actually this

double genetive does not carry a partitive meaning, even where that would be applicable.) と述べている (p. 142)。

#### 5. Adjectives and Adverbs (省略)

#### 6. Preposition and Prepositional Phrases

##### from... to と (from)... through について

期間を言い表わす from ~ to ~ では to のあとに来る期間が全体に含まれるかどうか不明確である。これに対して米語の (from) ~ through ~ にはこのあいまいさがない。

We camped there (from) June through September. (AmE)

(9月も含まれる)

We camped there from June to (or till) September. (BrE)

(9月が含まれるかどうか不明)

この区別は注意すべきであろう。 (p. 318)

##### 時を表わす前置詞の省略について

時を表わす前置詞 for は We stayed there (for) three months. のようによく省略されることは誰でも知っている。しかし多くのいわゆる 'event' verbs の場合には省略出来ない。I haven't spoken to him for three months. は正しいが、\*I haven't spoken to him three months. は誤りであるということは余り知られていない。前置詞句が文頭に来ている場合も同様である。

例 For 600 years, the cross lay unnoticed. (p. 320)

#### 7. The Simple Sentence

##### Subject Complement と Predicate Appositive について

Curme は He returned safe. の下線の部分のように完全文（この場合は完全自動詞）のあとに添加されて主語の様態を記述するものを predicate appositive (同格述詞、または叙述同格語)と呼んでいる。これは He returned safely. のように動詞を修飾する副詞とは違って主語を修飾する形容詞的機能を持つ。

ところが本書ではこのような predicate appositive を認めていないための混乱が見られる。すなわち、つぎの3つの文の下線の部分は副詞的な機能を持つが故に、これらは省略しても文として成立するし、最初の2つの文では、これを文頭に持って来ることも可能であるとしている。

He ran the shop single-handed. (1)

He drove the damaged car home completely undismayed. (2)

He was educated a Protestant. (3) (p. 351)

Curme に言わせれば、(1)と(2)の下線の部分は predicate appositive で、それぞれ He という主語の様態を記述している。もちろんこれらが文頭に出て Single-handed, he ran the shop. のようになってその機能は変わらない。

しかし(3)の a Protestant は、They educated him (to be) a Protestant. というような能動態の文の目的補語が、受動態となって純粹の主格補語に変わったものであり、したがってこれは上の(1)、(2)とは厳密に区別すべきものである。このような主格補語が副詞的機能を持つと説明することは困難であるし、もちろん主格補語である以上 predicate appositive のように自由に文頭に置かれることはない。本書の歯切れの悪い説明も機能的に異なっているものを一緒に取り扱おうとしているところに原因している。

#### 否定の範囲と焦点について

本書では下降の音調を ` , 上昇の音調を ´ , 下降・上昇の音調を `´ で表わしている。本書では spelling も punctuation も全く同じな2つの文に、つぎのような音調の指定をしている。

I wasn't listening all the time. (a)

I wasn't listening all the time. (b) (p. 381)

これらの2つの文の音調と接続を記号で表わせば (a) は /232|231#/ となり、(b) は /232|/ となる。しかし (a) の文をひとつの phonological phrase で発音するか、それとも2つにするのかは個人の自由であって、(a) を listening のところに stress を置かず /231#/ と発音することも可能である。したがって (a) を2つの phonological phrase に分ける必然性はない。

そうすると (a) と (b) の意味の差は /231#/ と発音するか、/232|/ と発音するかという接続の対立に依ることとなる。

(a) はいずれの発音をとっても、最初から最後まで全然聴いていなかったという全面否定の意味であり、(b) は最初から最後まで聴いていたわけではないという部分否定の意味になることは言うまでもない。(a) では否定の範囲が listening まではしか及んでいないのに、(b) では all the time にまで及んでいる。

元来 /232|/ という音調は、発言の主旨がそこで最終的に終わったものではなく、そのあとに何かが続くか、

または言明せずにかくして置く場合に用いられるもので、上の (b) の場合も I was listening only part of the time. というような発言がかくされているのである。

否定の範囲と共に重要なのは否定の焦点である。本書では I didn't leave home, because I was afraid of my father. のように2つの phonological phrase または tone unit に分けると、否定は主節だけに関係し、because に導かれる節は否定の範囲外に置かれ、書く場合も home のあとに comma が置かれると述べている。意味はもちろん父がこわかったので家を出なかったということになる。もちろん home のあとに接続や comma を置けばその意味は明瞭になるが、そうしなければならないということではなく、この文を途中で pause を置かずに /231#/ と発音することも出来、意味は変わらない。もっとも本書では home に上昇調の ´ を附しているが、これは ´ の誤りであろう。ところが、これを I didn't leave home because I was afraid of my father. (/232|/) という音調で発音すれば、父がこわかったから家を出たのではないという意味になり、このあとに I left home because I was afraid of my mother. というようなものが続くことになる。/231#/ が家出をしなかったのに、/232|/ では別の理由で家出をしたことになるのである。(p. 383)

このような /232|/ という音調は特に否定文で slightly や a little などという副詞と共に用いられた場合には注意を要する。この場合の否定の焦点はこのような副詞に置かれる。

We didn't praise him slightly.

(=We praised him a lot.)

We don't like it a little.

(=We like it a lot.) (p. 455)

#### 8. Adjuncts, Disjuncts, Conjuncts

Adjuncts は普通の副詞、disjuncts は sentence adverb, conjuncts は接続副詞と考えればよい。

本書では Do they definitely (really, \*Certainly, \*surely) want him to be elected? という例を出して、certainly や surely は用いられないことを示している (p. 443)。その理由として、これらが definitely や really の adjuncts とは異なって disjuncts だからであろう。しかもこの disjuncts と adjuncts の位置は相当厳重に守られているようである。Evans もつぎの例を出している。(p. 442)

They must be *heartily* congratulated.

They must *surely* be congratulated.

*heartily* は *congratulated* のすぐ前に置かれた adjunct であるが, sentence adverb (disjunct) である *surely* はこの位置には置けず, *be* 動詞の前に置かれて, 文全体に対する評価を示しているとするのである。

このことは *frugally* や *badly* のような adjunct が, disjunct の位置に入ることは許されない。

{They live *frugally*.

{\*They *frugally* live.

{They treated his friend *badly*.

{\*They *badly* treated his friend. (p. 464)

## 9. Coordination and Apposition (省略)

## 10. Sentence Connection

### Sequence Signals について

文と文との関係を示す明確な言語記号 sequence signal (連続記号) を初めて明らかにしたのは Fries の *The Structure of English* (1952) であり, これを受けてさらに詳しく説明しているのが W. Nelson Francis の *The Structure of American English* (1958) である。

しかし筆者は Fries や Francis が挙げている連続記号のほかに音調や強勢, さらに動詞の時制形, 特に過去進行形や過去完了形が連続記号として重要な役目を果たしていることを拙著『実践英語教育』(1972) の中で指摘しているが, 本書においても time relaters として過去進行形と過去完了形を挙げていることは我が意を得たりの感が深い。

He telephoned the police. There *had been* an explosion.

Alice turned on the radio to full volume. John *was taking* a shower. (p. 659)

この2つの例においてはそれぞれ前後の文の関係が2つの tense forms によって示されていることは興味深い。

### 否定文に用いられる too について

さきに否定の範囲と焦点について述べたが, in addition や also と同じ意味の too についても本書では焦点という考え方を適用している。

The children read the play. They acted it *too*. では too の焦点は acted という動詞におかれ, 読んだだけではなく, 演じたことを意味している。ところが両方の文が否定されると2番目の文は \*They didn't act it *too*.

とはならず, They *also* didn't act it. か They didn't act it *either*. か Neither (Nor) did they act it. かのいずれかになるとしている, しかしつぎのような文では too の焦点は主語に置かれ, 一部の人々には受け入れられている用法であるとしている。

The children didn't read the play.

Their parents *too* didn't read it.

2番目の文は Their parents didn't read it *either*. と同じ意味であることはもちろんである。

このように主語に焦点が置かれている否定文としては大修館『英語語法大事典』に He, *too*, is no mean preacher. She, *too*, had never met anyone like him. などの例が出ている。

三省堂の『英文法辞典』には I can play the piano, *too*. は I に強勢を置けば「私もピアノが…」の意味になり, piano に強勢を置けば「私はピアノも…」の意になるとしていることは正しい。しかし I *cannot* play the piano, *too*. とすると, 上の2つの意味をそれぞれ否定することになるとしていることには賛成出来ない。

Native speakers によると Can you play the piano, *too*? というような問いに対しては, No, I can't. か No, I can't play the piano. かのいずれかの答しかなく, \*I can't play the piano, *too*. (/232|31#/) とは言わないという。また \*I can't play the piano, *too*. (/32|31#/) も英語としては acceptable ではない。もしも「私も…」という意味を出すのであれば, I, *too*, can't play the piano. と言わなければならないと言っている。

## 11. The Complex Sentence

### not so ~ as について

本書では否定文では, formal style の場合, as ~ as の代わりに so ~ as が用いられることがあるとして, つぎの例を出している。

He's *not so/as* young as I thought.

Margaret M. Bryant も否定文では as ~ as と so ~ as の両方が用いられるとしながらも, つぎのような data を挙げている。19世紀の半頃の調査では, writers の 11.7% が否定文に as ~ as を用い, 88.3% は so ~ as を用いていたが, 今日では情勢がすっかり変わって 53.6% のものが as ~ as を用い, so ~ as を用いているのは 46.4% に減少しているとしてその傾向をはっきり示している。これからの生徒達にどちらを教えるべきかは明白であろう。

# since のあとの現在完了形について

筆者の知っている native speakers (アメリカ人) は I've climbed Mt. Fuji three times *since I've been in Japan*. のように *since* のあとに現在完了形が用いられることは屢々あるという。本書でもつぎのような例を挙げてそれを認めている。

Since we *have owned* a car, we *have gone* camping every year. (p.782)

しかし Evans は current English では *since* のあとには過去形の動詞を用いなければならないと述べている (p.455) し, Fries の *American English Grammar* では, "his mother has been worried about him ever since he *has been* in \_\_\_\_." というようなものを vulgar English としているので, いささか驚いたが, よく調べてみると OED には It is long since the kites *have had* such a banquet. という例が出ていし, Curme の *Syntax* には It is (or has been) a long time since I *have seen* him. や It is now four years since I *have studied* this question. などが何の説明もなく, 極めて当り前のように出ている。因みに大修館の『英語語法大事典』と三省堂の『英語慣用法辞典』には D.H. Lawrence, Somerset Maugham その他の人々の同様な例が挙げてある。

## Transferred Negation について

Transferred negation というのは否定の焦点が元来所属する従属節の *that* clause から主節に転移することをいうのである。たとえば I *didn't* think he was happy. という文は, このように主節の動詞を否定した意味と, I thought he *wasn't* happy. という従属節の動詞を否定した意味と2つあると本書はいう。しかし最初の意味は余り可能性がなく, また2番目の意味と区別し難いので, このような主節への否定の転移が行なわれるとしている。しかしこのような否定の転移は think, believe, suppose, fancy, expect, imagine, reckon などの動詞に限られるとしてつぎの例を出している。

I don't  $\left\{ \begin{array}{l} \text{think} \\ \text{believe} \\ \text{suppose} \end{array} \right\}$  (that) you've paid for it yet. (a)

He doesn't  $\left\{ \begin{array}{l} \text{imagine} \\ \text{expect} \\ \text{reckon} \end{array} \right\}$  (that) we need worry. (b)

従属節に否定の意味があることは, (a) の方に否定的な yet が用いられていたり, (b) では普通否定的にしか用いられない need worry が用いられていることでも分かるというのである。また tag-question では, I don't

suppose (that) he cares, *does he?* とあたかも He doesn't care, *does he?* のように用いられていることでも証明出来るという。

ただし同じような動詞でも assume, surmise や presume では否定の転移は行なわれず, 例えば I don't assume that he came. は I assume that he didn't come. とは同じ意味ではないと説明している。

## 12. The Verb and its Complementation (省略)

## 13. The Complex Noun Phrase (省略)

## 14. Focus, Theme and Emphasis

### Structural Compensation について

英語では複雑な構造のものは文末に持って来る傾向があるが, これを本書では end-weight の原則と言っている。これは同じく文末に新しい情報を伝えるものを持つてくる end-focus の原則と同様重要なものである。

従って end-weight の原則によって, 可能なところでは主部よりも述部の方を長くしなければならないし, そのために structural compensation (構文上の補償) が行なわれる。例えば, He sang well. とか He was singing. とかはよく言われるが, He sang. とだけは減多に言わない。単に He ate, He smoked, He swam. などとは言わずに, He had a meal, He had a smoke, He had a swim. などというのは structural compensation が行なわれているのである。

## Appendix I Word-formation (省略)

## Appendix II Stress, Rhythm and Intonation (省略)

## Appendix III Punctuation

### Hyphen について

ある語が行の終わりに来て, そこでおさまらない場合は, 半分に切って hyphen をつけて残りの部分は次の行に廻すことはよく行なわれるが, 本書によるとアメリカ英語とイギリス英語とではやり方が異なるというのである。アメリカでは音韻的に自然なところを重視する。したがって structure という語は struc- というところで切る。ところがイギリスでは, もっと形態素的な, また語原的な点に考慮を払う。したがって struct- というように切るというのである。因みに英米を代表する COD と Random House Dictionary とを比較してみた



ら、つぎのようであった。

COD	Random House
fa'ther	fa-ther
mo'ther	moth-er
an'y	an-y
ma'ny	man-y

なお合成語についても英米は異なり、米語では出来るだけ hyphen を用いないようである。

(BrE) air-brake, call-girl, dry-dock, letter-writer  
(AmE) air brake, call girl, dry dock, letter writer  
(p. 1019)

#### Quotation marks について

Quotation marks でも英米では異なった習慣を持ち、英語では ' ', 米語では " " が主として用いられ、引用句の中にさらに引用する場合には英語では " ", 米語では ' ' が用いられるという。

'I heard "Keep out" being shouted,' he said.  
(especially BrE)  
'I heard 'Keep out' being shouted,' he said.  
(especially AmE)  
(p. 1074)

#### 日付や時刻の表わし方について

日付は 7/2/72 や 7.2.72, まれに 7:2:72 のように表わされるが、英語ではこれが '7th February 1972' であるのに対して米語では、'July 2nd, 1972' となるから注意を要する。

(p. 44 よりつづき)

とマザー・グースの世界にぶつかるのはほとんど不可避であるように思われるが、日本の社会にも、己が幼時とマザー・グースの想い出とが不可分にからみあっている人は少なくないのである。評論家の桐島洋子氏もかつて自分の幼い日々とマザー・グースとの無気味な出会いのことを美しい文章にしたことがある（『読売新聞』昭和47年9月5日）。

わたくしは、マザー・グースの唄が日本語に翻訳されてもなお失わない強い魅力（魔力というべきか）のことをもちろん考えるが、同時に日本の社会におけるマザー・グースに象徴される英語文化（英文学でない）の予想外の根の深さと層の厚さにも想いをいたさないわけにいかないのである。

マザー・グースは、わが国では英文学の研究対象についてになりえない宿命にあるのかもしれない。しかし、それにもかかわらず（あるいはそれだからこそ）マザー・

時刻は 6:30 のように colon を用いるのが主として米語であり、6.30 のように period を用いるのが英語である。（p. 1079）

#### 手紙の宛名その他について

手紙の終わりに Yours sincerely, とするのが主として英語、Sincerely yours, とするのが主として米語である。宛名でもつぎのように余り comma や period を用いないのが米国式、各行の終わりに comma, 最後に period というのが英国式である。

26 Park Drive	43, College Green,
Portsmouth, RI 02840	Dublin,
USA	Ireland.

(p. 1030)

この書評を終わるに当たって、本書から非常に多くのことを学び得たことを感謝と共に付言する。

なおこの書評で書名を挙げずに言及した文献はつぎの通りである。

Bryant, M.M., *Current American Usage*, 1962  
Copperud, R.H., *American Usage: The Consensus*, 1970  
Curme, G.O., *Syntax*, 1931  
Evans, B. & C., *A Dictionary of Contemporary American Usage*, 1957  
Jespersen, O., *Essentials of English Grammar*, 1933  
Zandvoort, R.W., *A Handbook of English Grammar*, 1957  
(ELEC 研究開発部長)

グースは、まぎれもなくわたしたちの文化の一部にすでになっているのである。鷺鳥の背に乗って、日本の空をひょうひょうと翔(あ)けてゆく鷺鳥おばさんにとって、たかが英文学の研究対象にされることこそかえって不本意なことかもしれない。  
(東京大学教授)

(p. 50 よりつづき)

の中に身体に関する言いまわしが実に多いことがおわかりになったと思う。このことは英語にも言えるし、ほかの外国語もおそらく同じであろう。しかし、こうして子細に比較対照してみると、日本人独特の発想から出ているものも多く、ほとんどの場合、日本語をそのまま直訳することは不可能のように思える。また、身体の部分を使った比喻表現が、日本語と英語でびたりと一致することとごくまれである。  
(お茶の水女子大学助教授)



## ■エレクト選書

### 『マザー・グース童謡集』

平野 敬一 編

評者が学生時代、英文科の恩師たちは口ぐちに、英(米?)文学を専攻しようと思うなら、ギリシア・ローマ神話、聖書、シェイクスピアの3つはできるだけ精通しておけ、とおっしゃった。その大きな理由の一つは、この3つからの語句の引用が、引用符“ ”なしにしょっちゅう文学作品に出てくるから、ということであったように思う。その後7, 8年曲りなりにも英文科に籍を置いて勉強した経験から見て、この言葉はたしかに真実であった。しかし、その後さらに教壇に立ち、機会を得て米国で勉強をしたり、英米人の友人と接触を重ねていくうちに、英米文学やその背景である英米文化を理解するには、まだ何か大きく欠けているものがあるような気がしてなくなってきた。しかし、その第4のものが何であるかわからないまま、一種の欲求不満の状態がしばらく続いた。そんなある日、忘れもしない Jakobs-Rosenbaum コンビの *Grammar 1* の第9章を読んでいた時、...and the dish ran away with the spoon という例文にぶつかったのである。これが私の場合、*London Bridge* や *Pussy Cat* のような特別に有名な歌を除いて、マザー・グースとの初の意識的な出会いと言ってよい。後になって、これはマザー・グースの中の nonsense rhymes と呼ばれる範疇の一例であることがわ

かったが、その当時はとにかく奇想天外な文章なので強い印象を受け、興味をそそられた。そこで、今では南カロライナ州の田舎に引きこもっている親しい米人の友達に、こんな妙な文章があったが何かと尋ねてみた。すると彼は、ニヤッと笑ひ、Hey, diddle diddle... から始まる4行詩(本書 p. 24)を早口で暗誦した。しかも、英米人ならたいてい知っているという。私はいっそう興味をそそられ、2度目の渡米の際には、マザー・グースを中心に、子供の童謡や童話を集めてみて、その思いがけない分量と根の深さに驚嘆した。

このような気持であったので、中央公論社の新書版で平野敬一著『マザー・グースの唄』が出た時には、もろ手を挙げて歓迎し、平野氏に賞賛の手紙を送った。このたび ELEC 選書から、同じ編者で本書マザー・グースの選集が出版され、歌や朗読の録音テープまで入手できるようになったのは、まことに喜びにたえない。わが国でこれ以上適任者はないと思われる編者が、(おそらく)幼少のころ耳や肌でなじんだ童謡と詩を、愛情をこめて選び、歌詩の注や解説をつけているものである。悪からうはずがない。どうか、中学・高校の英語の先生がた、子供の歌などと軽べつなさらず、お好きなものからなじんで、生徒たちにも折にふれて教えてやっていただきたい。生長した子供たちが、国際人として英語国民に接する時、彼らの心の琴線と触れあう、よいきっかけになるはずである。Who Killed Kennedy? とい

う本の題名が、マザー・グースの一つ Who killed Cock Robin? (本書 p. 79) から来ている例でもわかるように、これらの引用も引用符をつけずに出されるので、英語文化の不可欠な知識の4番目として、りっぱな資格がある。ぜひとも一読(いや、覚えてしまうほど数読?)をおすすめしたい。(ELEC出版部 B6判 184頁 ¥580 カセットテープ・オープンテープ各1巻 ¥1,600)

(東京教育大学助教授 田中春美)

## ■『新クラウン和英辞典』

(第3版)

山田 和男 編

43年の改訂版と第3版とを比べてみると、(1)archaicあるいはobsoleteになった見出語を削除し、新たに加えられた見出語、(2)既出の用例にさらに加えられた多くの用例、(3)既出の表現に対する慎重な加筆訂正、(4)come, do, go, make, pull, run, work の7動詞、in, on, over, to の4前置詞、その他を扱った、他の辞典に類を見ない慣用語法表がすぐに目につく。このような充実した改訂を成し遂げた編者に心から敬意を表したい。結論として、第3版は慣用法の点から用例をいっそう充実させた点で他の辞典よりもすぐれていると言えるであろう。

(1), (2), (3)について2, 3例をあげておく。(1)「コンペイトー」「日章旗」「あにはからんや」などを削除、「愛社精神」「アニメーション」「過疎地帯」「ハイジャック」「ノンポリ」「ノンセクト」など数多くの見出語を追加。(2)用例の充実ぶりは「環境」「汚染」を見ればよい。前者の場合、2つの用例(43年改訂版)が「環境の改善(汚染)」を含めて8に、後者の場合、2つの用例(43年改訂版)が「大気汚染」を含めて12に、それぞれふえている。用例の増加ばかり

でなく、見出語「霧」では「霧が出はじめる」の訳出に roll in を用いるなど編者の語感の鋭さがうかがえる。(3)「文化国家」a cultural nation (43年改訂版)をa cultured nationと訂正するなど、慎重な加筆訂正がされている。

第4版のさいには編者に次の点を考えていただきたい。(1)付加表現:「文化勲章」an Order of Cultural Merit,「落第点」a failing mark《米》,a failure mark《英》,「小銭入れ」a coin purse,「五合目」the fifth stage,「別荘」a cottage《cf. a vacation house》(2)加筆事項:「スキーに行く」go skiing (to)→go skiing《at Yuzawa》,「怠ける」be idle [lazy]→be lazy《時折り be idle》,「講師」a lecturer [an instructor]《on [of, in] philosophy at Tokyo University》→a lecturer [an instructor]《in philosophy at Tokyo University》。(三省堂 B6変型判 1,248頁 ¥1,200)

(慶応義塾大学教授 三浦新市)

## 『日・米コミュニケーション・ギャップ』

永井陽之助 著  
ヘンリー・ドソフスキー

本書は、第3回日米関係民間会議に提出された問題提起論文を収録したものである。通称「下田会議」といわれるこの企画は、日米両国の関係各界のトップクラスの人たちを集めて行なわれ、その主催者である日本国際交流センターとアメリカン・アセンブリーの努力は特筆すべきである。また、その主要論文を『日米関係の展望』(沖縄以後の日米関係)、それに本書『日・米コミュニケーション・ギャップ』として逐次刊行してきたサイマル出版会の役割も見逃がすことができない。

けだし民間の国際交流とは、ただ

カッコよくパーティーで握手してまわるというようなものではなく、ここに紹介したような縁の下力持ちの存在があってはじめて成立するものである。「国際対話」とか「相互理解」が一種のブームになり、それに乗って世の中が右往左往する風潮の中で、本書は頂門の一針となるべきものといえる。

その内容においても、さすがに日米関係の裏表を知り尽した人たちの発言だけあって、いちいち教えられる。ただ、あえて評論家的な感想を述べさせてもらうならば、私なりに次のことがいえよう。

第1は、本書が示す明確で、そしておそらく適切な分析を、個人の生活の場でどのように行動に生かすべきかが、専門外の読者にはよくわからないのではないかということ。本書は、第一義的に国家レベルの諸局面を分析しているが、読者である私たちが個人としてどのようなかわり合いを持っており、また、その中で何をなすべきかについて、もう一步踏みこめないものだろうか。

第2は、第1点と密接に関係することだが、日米関係において私が非常に重要と考える企業活動の問題がなぜか充分にとりあげられていないこと。それ自体が現実との一つの「ギャップ」になるような気がする。(サイマル出版会 B6判 260頁 ¥850)

(日本総合研究所国際研究室長

金山宣夫)

## 『アメリカの民衆文化』

T. P. コフィン 編  
大島 良行 訳

まず何より、この書は、全体として、アメリカの民間伝承と、それを研究する民俗学の道案内として、適度につりあいのとれた格好の入門書であると言っておかねばならない。民俗学というものについて論じた第

1章に続き、民謡、昔話、伝説、舞踊、迷信、なぞなぞ、諺など各種の民間伝承について、それぞれの専門家があまり偏ることなく、簡略で適切な説明を行なっている。そのどれもが大なり小なり明晰な語り口であるのは、この本がもともと VOA の連続講演であったからなのだろう。25名の筆者は、いずれもアメリカの一流の民俗学者であり、それもさまざまな分野にわたっていて、この一冊によって、アメリカの代表的な民俗学者が一堂に揃えられたのだとも言い得る。日本では、確かにこういった規模で、比較的正確にアメリカの民間伝承が紹介されたということとはかつてなく、日頃新聞、雑誌、TVを通して日本の人たちが抱えているアメリカ像が、これによってある程度是正されうることかと思われる。

ただ、訳者は、その努力は認めても、不適任であったようで、アメリカの民俗学についての無知が随所にうかがえ、用語、書名、雑誌名の訳語にそれが顕著にあらわれている。中でもぼくには、訳と音楽に関するものが目についたのだが、例えば、「バラード」はやはり「バラッド」の方がいいだろうし、「フォークソング」は「民謡」でいいのではないか。また、「ヒルビリー運動」と言ったのでは何のことかわからないし、プロンスンの「記念碑的な概論『チャイルド・バラードのもつ音調の伝統』」は珍訳という他ない。それに、引用文の、散文はともかく、韻文は原文も共にあげてほしかった。訳詞のみでは筆者の論じていることを裏切ることもなりかねないからだ。そういったことから、この訳書は、アメリカの民間伝承とその研究のまともな案内書としては、いささか不親切なものであるかもしれない。(研究社四六判 344頁 ¥950)

(金沢大学講師 三井 徹)



## 展 望 通 信

### ◆1973年 ELEC 夏期英語教育研修会

ELEC では、中学校および高等学校の英語科教員を対象とする「夏期英語教育研修会」を、下記の要領で実施します。

#### A. 前期 ELEC 会場 (通学制)

7月30日(月)から8月11日(土)まで ELEC 英語研修所において開催。定員 150 名。

#### B. 後期 八王子会場 (合宿制)

8月18日(土)から27日(月)まで東京都八王子大学セミナーハウスにおいて開催。定員60名。

なお、詳細については、25円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「夏期英語教育研修会」係あて、募集要項をご請求下さい。

### ◆ELEC 夏期英語講習会

ELEC では一般成人を対象に「夏期英語講習会」を下記の要領で実施します。

#### 1. 会期 7月30日(月)～8月17日(金)

#### 2. コース (初級, 中級)

(1) 午前の部 (9時30分～12時5分)

(2) 夜の部 (6時～8時35分)

#### 3. 願書

20円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8 ELEC 英語研修所「夏期英語講習会」係あて、ご請求下さい。

### ◆ELEC 同友会月例研究会

ELEC 会館を会場として、つぎの通り月例研究会が開催されます。入場無料。

第66回 9月29日(土) 2:30～4:30

講演「最近における言語心理学の諸問題」

ELEC 教務部長 松下幸夫氏

第67回 10月27日(土) 2:30～4:30

講演「Testing の理論と実際」

ELEC 研修部次長 大友賢二氏

なお、7月、8月は休会とします。

### ◆語学ラブラトリー学会 (LLA) 全国大会

LLA 昭和48年度 (第12回) 全国大会は下記の要領で開催されます。

#### 1. 期日 7月23日(月), 24日(火)

#### 2. 会場 福岡大学 (福岡市西区七隈11)

電話 (092) 87-6631

#### 3. 内容 講演, パネル討議, 研究発表, テーマ別研究部会

### ◆ELEC 英語研修所「海外留学試験科」

米国留学英語検定試験 (TOEFL) 受験のための短期集中準備コース。週2回(火, 木), 1日4時間, 午前9時30分から午後2時まで。月謝は1学期間27,500円。

第3期 9月18日(火)～10月30日(火)

第4期 11月1日(木)～12月18日(火)

第5期 1月17日(木)～2月26日(火)

第6期 2月28日(木)～4月11日(木)

### ◆ELEC 海外留学試験

海外留学希望者, TOEFL 受験者, 海外出張者等を対象とする英語能力検定・診断・指導のための試験が9月28日(金)午後1時から ELEC 会館で実施されます。受験希望者は ELEC あて願書をご請求下さい。

### ◆ELEC 英語研修所秋学期開講

一般成人および教員を対象とする ELEC 英語研修所の秋学期は、つぎの通り開講されます。

1. 申込期間 7月2日(月)～9月10日(月)

2. 研修期間 9月17日(月)～12月19日(水)

### ◆第9回 ELEC 英語教育研究大会

本年の ELEC 英語教育研究大会はつぎの通り開催されます。

1. 期日 1973年11月10日(土)

2. 場所 ELEC 会館 (東京都千代田区神田神保町3の8)

3. 内容 講演 “Problems and Attitude in the Teaching of English in Japan” Mr. J. J. Dunn (Language Officer, The British Council)

講演「英語教育の課題」黒田巍氏 (大妻女子大学教授)

実演授業 大橋菊子氏 (東京都立神代高等学校教諭)

英語展望 (ELEC Bulletin) 第42号  
定価 350 円 (送料 85 円)

昭和48年7月1日発行

編集人 中 島 文 雄  
発行人 竹 内 俊 一  
印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の22  
電話 (269) 1111 (大代表)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)  
東京都千代田区 田神保町3の8  
電話 (265) 8911～8916  
振替・東 東 11798



# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC